ISSN 2185-856X

JICA横浜　海外移住資料館

研究紀要

7

平成24年度

論　　文

ホノルル潮音詩社にみる日本人移民社会と移民の生活史
― 1920 年代から太平洋戦争開戦まで ―
島田　法子

ペルー日系二世の短歌と戦前期の日本語教育
― 里馬実科高等女学校と日系婦人会文芸部「椰子の実短歌会」―
柳田　利夫

日系移民学習の教材開発と実践（I）
― 移民学習教材としての「日本－ブラジル移民カルタ」の開発 ―
森茂　岳雄・中山　京子・福山　文子

日系移民学習の教材開発と実践（Ⅱ）
―「日本－ブラジル移民カルタ」を用いた実践 ―
服部　圭子・大舩ちさと・中山　京子・スエナガ サンドラ テルミ

研究ノート

愛媛県海外移民史研究の現状と資料状況
木村　健二

リーマンショックによってブラジル人はどのようなことに困難を感じているのか
― 豊田市保見団地でのフィールドワークから ―
大谷かがり

ジャイカ
JICA

はじめに

JICA 横浜 海外移住資料館は 2012 年秋に開館十周年を迎え、11 月にこれを記念するシンポジウムを開催いたしました。公益財団法人海外日系人協会との共催のもと、第 54 回海外日系人大会参加者の方々、研究者、マスメディアをはじめとした約 130 名の参加を得て、大変盛況なシンポジウムとなりました。

同シンポジウムの基調講演において、海外移住資料館学術委員長を務めていただいている、津田塾大学飯野正子理事長は「移住の歴史や意義を検証し、学術的価値のあるものにするためには、移住の送出側、受入側双方の研究が必要であり、10 年前に海外移住資料館が設立されたことは、送出側の拠点として移住研究の促進につながった」と述べられました。

また、同シンポジウムではアメリカ、カナダ、メキシコ、ブラジル、ペルーの日系博物館・資料館の幹部や有識者をお迎えし、パネルディスカッションを行いました。現在各国の日系社会では、世代の経過とともに移住の歴史や意義を後世に継承することに高い問題意識を持っています。次世代に伝える工夫など、各国の博物館・資料館の連携が重要であり、海外移住資料館にその要としての役割を期待するとの声が寄せられました。

本『研究紀要』は、皆様のお力を得て、第７号の発刊を迎えることができました。『研究紀要』の発刊を中核として進めている海外移住や日系社会に関する研究の推進と、次世代を中心とした一般市民に広く海外移住の歴史や日系社会の現在を伝えていくこと。この二つを今後より有機的に連携させながら取り組むことが我々に求められていると、同シンポジウムを通じて強く認識いたしました。研究の成果を、展示、広報誌、ウェブサイト、公開講座等のイベントなど海外移住資料館が持つ様々な手段を通じてわかりやすく伝えていくこと、「資料の収集・整理」、「調査・研究」、「教育・展示」の三つの役割を担う海外移住資料館であるからこそ果たせる使命だと考えます。この使命を果たすために、今回ご執筆いただいた皆様をはじめ、幅広い方々のお知恵を今後も引き続きいただいて参りたいと思います。

この『研究紀要』が、読者の皆様の海外移住・日系人社会のより深い理解に繋がることを願ってやみません。

独立行政法人国際協力機構　横浜国際センター　所長
海外移住資料館　館長
吉　浦　伸　二

『研究紀要』第７号の発刊によせて

『研究紀要』第７号が完成いたしましたので、お手元にお届けいたします。学術委員会が平成 21 年度に立ち上げ 24 年度まで活発に活動したプロジェクトの成果の一部が、ここに掲載されております。いずれも、海外移住資料館の目的である「海外移住と日系人社会に関する知識の普及」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」を達成するための努力が実ったもので、大変、誇らしく思っております。

現在進行中（平成 24 年度−26 年度）の学術委員会研究プロジェクトは以下のとおりです。

①「ニッポンの伝統、ニッケイの祭り―日本文化の伝承と変容を女性の役割を軸に―」

②「移住資料ネットワーク化プロジェクトの充実と拡張」

上記②のプロジェクトの成果は、すでに、(1)「カルロス千代照平岡」ペルー日本人移住史料館デジタルミュージアムサイト、および（2）ペルー日本人契約移民検索システムとなって、制作・公開されています。これは、web 上でも公開されることになっており、今後は、各国・地域の検索データベースとして拡がりを持たせていきたいと考えております。

また、これまでの研究プロジェクトの成果は、『研究紀要』以外にも公表されています。たとえば、特別展示「ハワイに生きる日系人 ―受け継がれる日本の心―」では、以前のプロジェクトでの調査の際にハワイで収集された資料が多数、展示されました。同じく特別展示「ペルーの日系人」も、プロジェクトとの関連で企画されました。すでに終了したプロジェクトの成果に基づく公開講座や学習教材作成も行われております。このような形で海外移住資料館の活発な活動が示されることは、『研究紀要』とともに、海外移住資料館の目的達成につながるものであり、大変喜ばしく誇らしいことです。このような成果が今後も出ることを願っている次第です。

この『研究紀要』が、読者および関係者のみなさまのご支援を得て成長し、海外移住資料館の活動の一端が、より多くの方がたに理解・認識していただけますよう、願っております。

飯　野　正　子

津田塾大学理事長・海外移住資料館学術委員会委員長

研究紀要

〈目　次〉

はじめに　吉浦　伸二

『研究紀要』第７号の発刊によせて　飯野　正子

論　　文

ホノルル潮音詩社にみる日本人移民社会と移民の生活史
― 1920 年代から太平洋戦争開戦まで ―
……1
島田　法子

ペルー日系二世の短歌と戦前期の日本語教育
― 里馬実科高等女学校と日系婦人会文芸部「椰子の実短歌会」―
……21
柳田　利夫

日系移民学習の教材開発と実践（I）
― 移民学習教材としての「日本－ブラジル移民カルタ」の開発 ―
……43
森茂　岳雄・中山　京子・福山　文子

日系移民学習の教材開発と実践（Ⅱ）
―「日本－ブラジル移民カルタ」を用いた実践 ―
……63
服部　圭子・大舩ちさと・中山　京子・スエナガ サンドラ テルミ

研究ノート

愛媛県海外移民史研究の現状と資料状況
……91
木村　健二

リーマンショックによってブラジル人はどのようなことに困難を感じているのか
― 豊田市保見団地でのフィールドワークから ―
……105
大谷かがり

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface Shinji Yoshiura

On Publishing the Journal of the JOMM Masako Iino

Articles

The Honolulu Cho-on Shisha Poetry Club: Japanese Immigrants' Life as Reflected in Tanka Poems ····· 1
Noriko Shimada

Tanka Poetry for Nisei (Second-Generation) Japanese-Peruvians and Prewar Japanese-language Education: The Lima Women's Vocational High School and the Tanka Poetry Circle "Yashi no Mi" of the Peruvian Japanese Women's Association ····· 21
Toshio Yanagida

Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (Ⅰ):Development of "Nihon-Burajiru Imin Karuta" as a Teaching Material for Migration Studies ····· 43
Takeo Morimo • Kyoko Nakayama • Ayako Fukuyama

Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (Ⅱ):Practical Reports on Application of "Nihon-Burajiru Imin Karuta" ····· 63
Keiko Hattori • Chisato Ofune • Kyoko Nakayama • Sandra Terumi Suenaga

Research Notes

History of emigration studies and historical materials in Ehime prefecture ····· 91
Kenji Kimura

Difficulties experienced by Brazilian from 2009 to 2011: From field work in Toyota City, Homi Complex ····· 105
Kagari Otani

ホノルル潮音詩社にみる日本人移民社会と移民の生活史
― 1920 年代から太平洋戦争開戦まで ―

島田法子（日本女子大学・教授）

＜目　次＞

はじめに
1.　ホノルルの初期の短歌結社
2.　潮音詩社誕生（1922）と同人たち
3.　初期の潮音詩社の活動
　3.1　例会活動
　3.2 『夜開花』（1923）の出版
　3.3 『カマニ』（1924）の発行
　3.4 『布哇歌集』（1926）の出版
4.　詩音詩社の停滞期―1930 年代
5.　詩音詩社の復活―1940 年代
おわりに

キーワード：ハワイ日本人移民、移民の同化、短詩型文学、ホノルル潮音詩社

はじめに

この小論は、1922 年にホノルルに誕生し、現在まで 90 年の歴史を刻んできた日本人移民の短歌結社「潮音詩社」を取り上げ、創設された 1920 年代を中心に戦前の歴史を掘り起こし、移民地文学を通してハワイの日本人移民の文化変容を考察するとともに、発表された短歌を資料として日本人移民の生活史を辿るものである。潮音詩社はなぜこの時期に創設され、どのような変遷をたどったのだろうか。日本人移民社会をどのように写し取っているのだろうか。

まずハワイの日本人移民史を簡単にたどり、最初の短歌結社が誕生した経緯を述べる。次いで潮音詩社の誕生の経緯とその構成メンバーについて触れ、同人たちが発行した歌集、同人誌を分析する。その後、1930 年代の潮音詩社の停滞期について述べ、最後に日米関係が緊迫した 1940 年代の潮音詩社の活動と詠草を分析する。

ハワイの日本人移民の短歌結社についての先行研究には、篠田左多江の尾籠賢治を中心とした論文と、筆者と高木真理子とのハワイ日本人移民短詩型文学に関する総合的共同研究、ならびに筆者のヒロ銀雨詩社に関する論文がある[1]。しかし潮音詩社そのものに関する先行研究は皆無である。

まず、短歌結社が成立した背景として、ハワイの日本人移民社会の歴史を短く押さえておきたい。日本人のハワイへの本格的な移民が開始されたのは 1885 年であった[2]。日本とハワイ王国とのあいだで正式に交わされた政府間約定書に則ったもので、「官約移民」とよばれる契約労働移民であった。当時ハワイではサトウキビ産業が隆盛となり、サトウキビ・プランテーションでは労働力が大幅に不足し、日本人農民は理想的な労働力供給源と考えられた。1894 年までの 9 年間に、約 28,000 人の日本人が契約移民として海を渡った。ところが 1893 年にハワイ王国がアメリカ人入植者によって転

覆させられ消滅してしまったため、移民事業は日本政府の手を離れ、1894 年からは民間の移民会社に委ねられることになった。移民会社の斡旋による「私約移民」の総数は、契約労働が禁止された 1900 年までに約 46,000 人に達した。1898 年、ハワイはアメリカ合衆国に併合され、1900 年には基本法制定によって合衆国の準州となったために契約労働制度は違法となった。1900 年以降の移民は契約に縛られない「自由移民」と呼ばれ、日米紳士協定が締結される 1908 年まで続いた。この間に約 68,000 人がハワイに渡航した。日米紳士協定によって新規の日本人移民は禁止となった。しかし、1924 年の移民法によって日本人移民が全面的に禁止されるまでの期間は「呼び寄せ移民」の時代と呼ばれ、子どもや多くの「写真花嫁」をふくむ血縁者 62,000 人がハワイの土を踏んだ[3]。そのうち「写真花嫁」は 3 万 6 千人を数え、日本人社会は家庭的落着きを持つようになった[4]。

初期の日本人移民にとって、ハワイ移住はあくまでも錦衣帰郷を目的とした出稼ぎであって、ハワイでの生活は一時的な腰掛にすぎなかった。特に官約移民の時代には、移民たちはハワイ到着後すぐに契約先のプランテーションに分散、配置され、激しい労働に明け暮れる日々で文芸活動に時間を割く余裕はなく、また文芸に関心を持つ者は少なかった。官約移民 75 周年を記念して出版された『ハワイ日本人移民史』は、「教養が低く、風習も乱れ勝ちで、その生活状態も薄給に起因して、極めて低級であった事は否定できない」と回顧する[5]。この時代には、文芸活動が生れる素地はなかったといえよう。しかし日本人移民社会は未成熟ながら官約移民時代にすでに形成されつつあり、社会的諸制度が成立しつつあった。メソジスト派牧師美山貫一の影響で 1887 年には慈善団体「日本人救済会」が、1888 年には「在布哇日本人禁酒会」が組織されたし、早くも 1892 年には最初の日本語新聞が刊行され、翌 1893 年には最初の日本人学校がハワイ島コハラで始まった。会衆派牧師神田重英が公立学校の校舎を借りて開校したもので、生徒数 30 余名であった。

私約移民の時代に入ると日本人人口は急速に増えていき、契約期間が終った農民がホノルルやヒロといった都会で転職し、また契約労働以外の目的で渡航する日本人も増えて日本人街が形成されていった。1896 にはホノルル日本人医会が、1900 年にはホノルル日本人商人同志会が誕生した。自由移民の時代に入るとハワイの日本人人口は 61,000 人を超え、日本人社会の機能はさらに複雑化し、さまざまな社会制度の発達をみるようになった[6]。商人、宗教家、教育者、学生、医師、官吏等の渡航者も増え、文芸の素養のある人口も増えていった。発行される日本語新聞や雑誌も増え、寺院や神社の設立も相次ぎ、日本人学校も次々と創設された。

呼寄せ移民の時代になると、日本人社会は経済的にも社会的にも発展をとげ、定住時代を迎えつつあった。渡辺七郎の『布哇歴史』によると、

> 此の時代に於ける日本人の著しき変遷は、個人的に見れば、契約労働より自由労働に進んだこと、自由労働より更に独立事業に進んだこと、独身生活より結婚生活に入ったこと、結婚生活より父母としての生活に進んだこと、出稼根性より永住主義に転じたこと等である。更に此れを社会的に見れば、従来米人が独占して居った種々なる職業に割り込んで相当の成績を挙げたこと、世界の思潮に順応して生活の向上を計ったこと、日本語教育機関が発達したこと等を数へることが出来る[7]。

1910 年代の日本人社会の特質は社会階層が分化し、労働者階級から中産階級が分離したことである。それを象徴するように 1911 年、ホノルルで、エリート層とよべる経営者、医者、宗教界や教育界、言論界の指導者たち 50 名ほどが「金曜会」という社交団体を設立し、毎月例会を開いて情報交換や親睦に努めるようになった[8]。また 1918 年には諸井六郎総領事の発案によって、日本人社会指導層

が集う親睦会として「木曜会」も創立された[9]。渡辺礼三によると、その頃のホノルルでは階級分化が目立って進んでいた。

> 考えてみると、1915年ころのハワイは、それまで一様に貧困で、皆が体を張って労働していた日本人社会が、ようやく、貧富両極に分化し、それが次第に顕著になってきた時期だった。1900年ころまでは、一握りの富裕な人しかいなかったが、15年頃には、ワイキキの「望月［料亭］」などに、しげしげと出入りする人々も相当増え、一方では一日一ドルの日給で働く人々も随分多かった。また、自由移民の時代になると、それ以前の教育度の低い人々に比べると、一段と教育度の高い人たちも増えてきた[10]。

ホノルルの日本人街は相当の規模をもつようになった。森田栄の『布哇五十年史』によると、1910年代のホノルルの町は急成長しており、欧米の小都市にも遜色のないほど美しく、20か国以上の言語が飛び交うコスモポリタンな町で、「布哇群島の首府にして、人口十万を有し日本人の在住する者約二万に達す」とある。日本人街に関しては、「ヌアヌ、キング、ベレタニア、ホテル、パラマ、リリハ等一円の街路は、殆ど日本人街と称するを得べく・・・日本人の大商店にして、白人商業区域内に店舗を有する者も少なからず」と述べられている[11]。当時、ホノルルだけで、日本人の銀行3、商業会議所、仏教寺院5、神社3、日本人中等学校4、日本人小学校10、新聞・出版社7、漁業関連会社3、食品会社2、劇場2、その他多数の会社があった。また商店も、日本語書籍店3など多数あり、多様な機能分化、組織化の進んだ状況にあったと言えよう。

このように呼寄せ時代のホノルル日本人社会は機能分化・階級分化し、比較的教養の高い中産階層が相互に親睦関係をもつようになり、そのような社会背景から、短歌結社の花が開いたのである。90年も継続した短歌結社「潮音詩社」の誕生は、安定した中産階層の形成と深い関係があったといえよう。それはいわゆる「平民文学」と呼ばれた俳句の誕生とは異なる背景を持ち、異なる発展過程を経た。

1.　ホノルルの初期の短歌結社

ハワイの日本人移民のあいだでは、俳句結社のほうが短歌結社より早く成立した[12]。最初の吟社「エワ土曜会」は、1901年にオアフ島のエワ・プランテーションの労働者のあいだで生まれた。次いで1903年ハワイ島のヒロで都市居住者を中心に「ヒロ蕉雨会」が結成された。俳句は比較的習得しやすく、創作に時間がかからず、長時間労働に追われる労働者階層でも可能な文学であり、かつ移民の母体である日本の農村で親しまれてきたという背景があるからである。

それから約10年遅れて、短歌結社の黎明期を迎える。記録に残る最初の短歌結社はホノルルの「みどり会」で、1913年に森うしほ等によって結成された。少し長くなるが、不破保雄による1914年の短歌界をめぐる回顧を引用してみよう。

> 布哇に於ける文壇史は随分とふるいものである・・・然し私の記憶する所に依れば明治四十三［1910］年、神田謹三[13]氏の来布したと云ふ事は、少なく共布哇文壇にとっては一新紀元を開拓したる時代であったと思ふ、文芸雑誌として火星、高潮、うきくさの発刊を観、更に白光の発刊に依って布哇文壇の内容充実を誇ることの出来たのは、蓋し大正三［1914］年であった、私達は此の一年間に於る記憶に依って布哇文壇史の一班を窺ふ事が出来ると思ふ・・・。

詩歌界も大正三年度は今迄にない賑やかさを呈した、森うしほ氏の『みどり社』三條粂太郎氏の『ザボン社』は時を同じうして起ち、桑木仁子、下迫公子、引地嶋の女、露崎陽子、橋本みどり子、番紅花涛子の女流歌人の排出を見た、更に浅海青波、岬幻花、大嶋白雨、月村一郎、月村銀平、家仲茂、鈴木黄花、甲斐みどり、斎藤芙蓉其他種々な歌人が幾人となく生れた・・・[14]。

不破保雄はさらに続けて、ハワイ文壇の隆盛は、邦字新聞の文芸欄の展開と深い関係があったことを指摘している。

布哇に於ける文芸発達史に特記す可きは新聞文芸の変遷である、明治四十三年乃至四年に至る迄の新聞紙は文芸の独立を許さなかった、僅かに紙面の一部を割いて小説、詩歌等を殆ど遊戯的に掲載し読者も亦文芸を重大視しなかった。

然るに神田謹三氏の来布と共に布哇新報紙上に文芸壇を設くるが否や、森うしほ、川崎芥南、浅海蘆風の諸氏生れ夫等の刺戟が動機となって文芸に志す者多く森うしほ氏が新報文芸を担任するに及んで漸次布哇文芸は独立し、三條粂太郎氏が殖民新聞に文芸壇を担当し爾来毎新年度に於る新聞文芸の収穫は量に於て質に於て大陸文壇を量駕するの傾向を示した・・・日布時事日曜号並に増田玉穂氏担任の布哇日々新聞文芸壇は其の後の中心勢力であった・・・[15]。

篠田左多江が指摘するように、初期の文芸活動を担ったのは向上心に燃えてアメリカを目指してやってきた青年たちであった。上記の森うしほ、浅海蘆風、川崎芥南、三條粂太郎らは苦学生で、ハワイで英語を学ぶために夜学校に通う仲間であった。自由移民時代から呼寄せ移民時代に、特に青年移民が増加して彼らの中から文学が花開いた経過は、篠田論文に詳しい[16]。不破安雄が述べるように、この時期には文芸雑誌が次々と創刊された。財政的困難のためにいずれも短命ではあったが、増田玉穂による文芸誌『火星』(1909-1910) を嚆矢として、俳句結社である水無月会の『ウキクサ』(1911)、井田王白石による『高潮』、そして森うしほの『白光』(1914-1915) が続いた。

最初の短歌結社である「みどり社」「ザボン社」は短命に終わっている。目覚ましい活躍をした青年歌人たちが次々と勉学のために大陸へ去ったからである。1913 年に、川崎芥南はマサチューセッツ州スプリングフィールドへ留学し、浅海蘆風は医学を志してカリフォルニア州スタンフォード大学へ、1915 年には森うしほがニューヨークへ、そして三條粂太郎も 1918 年に勉学のためにニューヨークへ渡った。その後、みどり社の元同人等によって 1918 年に「南国巡礼詩社」と「銀草詩社」がうまれたがかつての隆盛はなく、さらに 1921 年には馬場のぼるが若い独身男性を率いて「白日社」を創設したが、それも 3 年で解散した[17]。青年を主力とする短歌結社においては、若い情熱が燃え上がったとしても、それを定着させる社会的、経済的基盤はなかった。

2. 潮音詩社誕生 (1922) と同人たち

新たな短歌をめぐる動きが、予期せぬところから生まれた。かつて森うしほ等と共に文芸活動をしていた浅海青波は、日布時事記者として忙しく働き始め、しばらく文芸活動から遠ざかっていた。ところが 1922 年の結婚を機に再び歌を詠み初めた[18]。そして友人に勧められ、それまで発表した歌 200 首ほどを集めてハワイ最初の歌集『海潮音』を出版したのである。青年期の恋と孤独とハワイにおける運命を嘆く歌が多いが、結婚後の数首―「十年の恋に会ひたる喜びという妻故に接吻する／昨日まで探し求めし恋故に其君ゆえにいとしと云ひぬ」―に見られるように、歌集は青波の創作意

欲の復活を示していた。

歌集出版は、ホノルルの歌人たちの消えかかっていた文芸への関心を呼び起こした。医師であり歌人でもある毛利元一［きしのあかしや］は、青波とは面識がなかったにもかかわらず、『日布時事』に賛辞を寄せ、出版記念会を開催するように促した[19]。それに応えて、5 月 14 日夜、ホノルルの短歌同好者たちを招いて、出版記念会がヌアヌ YMCA 会館で開催された。

記念祝賀会の席上、挨拶に立った毛利元一は「毎月歌の会を開催すること」を提案。満場一致で出席者を同人とする短歌結社の設立が決まり、『海潮音』にちなんで「潮音詩社」と命名された。里川ひろしと吉田のぶじが会の世話役に選ばれた。夕食の後、早速「お互いに自己紹介し・・・持ち寄り及び速成の短歌短詩を集めて採点し」、これを潮音詩社の第一回例会とすることになった。そして採点した詠草は『日布時事』紙上に発表することを決定した[20]。（当夜の詠草は 5 月 21 日の『日布時事』に「海潮音小集詠草」として発表されている。これ以降も例会ごとに、『日布時事』の日曜版の「日曜文芸」欄に、潮音詩社詠草が掲載されていく。）

まず、初期の潮音詩社に集った同人たちについてまとめておきたい。彼らの職業については判明しない人々も多いが、布哇年鑑等で判明した限りそれを記しておく[21]。1922 年 5 月の祝賀会に集まった設立メンバーは、主賓の浅海青波（浅海庄一、日布時事社記者）の他、毛利たいざんぼく（＝きしのあかしや、毛利元一、医師）、相賀渓芳（相賀安太郎、日布時事社社長）、岬幻花（河村重博、日布時事社記者）、豊平走川（豊川良金、日布時事社記者）、里川ひろし（山下草園、日布時事社記者）、室中未鳴（室中儀一、布哇報知社記者）、吉田のぶじ（吉田信二、布哇報知社記者）、比嘉静観（比嘉賀秀、メソジスト教会牧師）、見田宙夢（見田政造、日本語学校教師）、今村清子（本派本願寺別院総長今村恵猛夫人）、東洋汽船出張所の松下氏夫人、松澤睦水（松澤光茂、ヌアヌ YMCA 幹事）、泉さだを（泉貞雄、ワターハウス商会員）、内田蕉風（内田清人、日本語学校校長）、青木青襟子（青木秀作）、嘉数南星（嘉数佐市）の総数 17 名であった。彼らはすでに安定した職業と社会的地位を得た中産階層の人々であったことが見て取れる。

結社設立後すぐに新しいメンバーが参加した。翌 1923 年に出版された最初の同人歌集『夜開花』をみると、作品を出品している同人は 21 名で、記念会に出席した 17 名のうち 11 名と、新たな同人 10 名である。新しい同人の名前をあげておくと、濱畑潮彩（濱畑慶兵衛、車の雑誌出版）、袖澗加保留（袖澗久右衛門、花園業）、兒玉修三（兒玉写真館経営）、佐藤芳山（高橋莞治、布哇報知社記者）、須藤豊二（森重書籍店員）、東明子、大久保うまきち（大久保午吉、日米投資会社社員）、谷碧朗（＝古屋翠渓、古屋熊二、富士家具商会経営）、竹森達二（竹森員雄）、白石白輝で、新しい同人には、学生も交じっているし、失業青年も居た。特に白日社の若い同人たち（竹森達二、室中未鳴、佐藤芳山、白石白輝、須藤豊二）が、潮音詩社にも顔を出していたことがうかがえる。

さらに翌 1924 年に出版された同人文芸雑誌『カマニ』に掲載されている同人名簿には 21 名が掲載されている。新たに加わったのは、飯岡白蓉（飯岡織之丞、日本人病院医師）、細田紫葉（細田喜一、日本総領事館書記）、浅海蘆風（浅海吾一、医師）、藤間順笛（藤間順平、日本人学校教師）、田巻青穂（田巻龍太郎）、南景三（小島定吉、小島書店経営）であった。

1925 年には創立三周年記念会が料亭共楽館で開催された。入浴、晩餐の後、幹事の報告があり、同人の顔ぶれの変遷が紹介された。例会に出席しなくても詠草を提出してきた女性の同人を含めて 47 名で、その顔触れは以下である。

> 潮音詩社は、大正十一年五月の創立以来今日迄、例会に出席した者、毎回詠草を出して互選に加へた者等を含めて会員として名を連ねた人が四十七名ある。この四十七名は勿論殆んど男

子であるが、中女性が数名ある。故人となった人一名[22]、他島に行った人数名、渡米した人、帰国した人数名あり、現在会員は十七八名である。明星派の赤木毅氏や、アララギ派の永田龍雄氏が例会に出席した頃は二十名からの会員があった。去る二十日夜共楽館で催された創立満三周年記念会席上幹事から報告された四十七名の人の人名は次の通りである。

見田宙夢、吉田のぶじ、嘉数南星、松澤睦水、きしのあかしや、比嘉静観、藤田逸夫、白石白輝、岩屋残花、袖澗かほる、竹森たつじ、下越雪路、松岡まつ子、飯岡白蓉、浅海蘆風、はる子、星野鐵也、細田紫葉、佐藤芳山、谷碧朗、大久保うまきち、兒玉修三、濱畑潮彩、柳戸鼓水、沈丁花、愁花、勿忘草、須藤豊二、馬場のぼる、岬幻花、相賀渓芳、浅海青波、豊平走川、内田蕉風、室中未鳴、泉さだを、伊藤孤花、田巻青穂、藤間順笛、北川しぐれ、玲子、文子、南景三、布久永渓月［日本語学校教師］、林田茂吉、島村流子、里川ひろし[23]。

『日布時事』の里川ひろしによるものと思われる報告記事「その夜の印象―潮音記念会雑記」[24]は、その頃の同人の様子―女性の例会出席がないこと、家庭を持つものが増えたこと―を伝えている。「満三周年になったわけで布哇に於る短歌会として其の生命の長きこと前代未聞である。・・・詠草会に詠草を送った女流歌人もたくさんあったが一度の出席も見なかった。せめて三周年記念会に少しでも出席あって欲しかったが一人もいなかったのは遺憾事の一つである。趣味の会には年齢職業は勿論性別さえも超越し心と心を以て集ひたいものである」と。続けて、浅海青波の結婚に続いて、濱畑潮彩、佐藤芳山、田巻青穂と同人が相ついで結婚し、「独身者も残りすくのうなって心細くなったものだ。青春の悩みの歌の共鳴者も漸次減したわけになる。」と記している。

ここで、白日社との関係に触れておきたい。『日布時事』に掲載された濱畑潮彩の回顧録によると、1921年に馬場のぼるが白日社を創立したころ、馬場のもとには竹森達二、須藤豊二、藤田逸夫、室中未鳴、白石白輝、田巻青穂、木原隆吉、佐藤芳山、岩谷残花、藤間順笛等の若者が集った。「当時の白日社の連中と来たら馬場氏一人が妻帯者で後は全部独身者で、随分馬鹿遊びや馬鹿騒ぎをやった。」という[25]。翌年潮音詩社が発足すると、血気はやる若者たちは対抗意識を燃やし「白日社は仮想敵手として潮音社を目指していた」らしい。対抗意識の一因としては、年齢層の違いがあり、社会階級の違いがあったことが挙げられよう。また、潮音詩社がアララギ派に近い同人が多かったのに対し、白日社は「明星派が占めて」おり、「甘ったるい恋愛物」ばかりを詠っていたこともある。さらに、潮音詩社が『日布時事』に基盤をおいて詠草を発表したのに対し、白日社は『布哇報知』に発表していたことに、もう一つの原因があった[26]。

相賀渓芳やきしのあかしや等、年長者の集う潮音詩社は、白日社の若手の歌人を招き、例会の活性化を図ろうとしたのであるが、濱畑の回想によると、

いつぞや共楽館で潮音社例会［第５回例会、新年会］が催され白日社同人も案内された。・・・さて採点となると、白日社連中は［前もって打ち合わせて］連中同志の歌許りを抜いたので最高点も次点も全部白日側で占めて、おまけに会費も払はず凱歌をあげて引き上げた。・・・その後潮音詩社では相賀氏宅で例会［第８回］を開き矢張白日社の連中も招待された。・・・案の定採点の結果は一等も、二等も其次も全部白日社側で占めて、ワーッと許り凱歌をあげて引き上げた。当時潮音社の幹事大久保うまきち氏が「もう白日社の連中は来てくれぬでもよい」と云ったとかで大分仲間の問題になっていた[27]。

しかし結局、白日社の同人はほとんど潮音詩社にも籍をおいた。そして間もなく白日社は立ち消

えとなり、潮音詩社の一人舞台となった。

浅海青波の一冊の歌集出版を契機として立ち上げられた潮音詩社は、ハワイの日本人社会の成熟を象徴していた。ホノルルという都市住民の中の社会的に安定した中産階層で、文芸に関心のある人々、すなわち新聞、教育、宗教、医療関係者を中心として結社を作る機が熟していたのである。移動の激しい若者たちの短歌結社とは異なり、安定した社会的･経済的基盤をもっていたと言えよう。

3.　初期の潮音詩社の活動

3.1　例会活動

潮音詩社の活動の中心は例会であった。例会では前もって提出された詠草を互いに批評･採点した。第９回例会からは即詠も始まった。非常にまじめに研究的態度で臨んでおり、月例会では遠慮のない議論が交わされたようだ。同人雑誌『カマニ』にも、同人による批評が掲載されているが、仲間内だからという甘えや遠慮はなく、手厳しい批評が展開されたことがよく示されている。

月例会の会場は、初年度の開催記録によると、ヌアヌ YMCA 会館や、塩湯、望月、共楽館といった料亭、そして同人（相賀渓芳、浅海青波、きしのあかしや、松澤睦水）宅が用いられた。費用のかからない同人宅で開催されるときにも会費を徴収し、資金を積み立てて行った。毎月料亭に集うだけの、あるいは十名以上の仲間を自宅に招いて歓待するだけの、経済力を持つ同人が多かったことを示している。さらに第５回例会の席上、詩社の基礎をかためるために二名の常務幹事を置くことになり、大久保うまきちと吉田のぶじが任命された[28]。

短歌結社は、互いに利害のない同好の仲間の親睦会として機能した。料亭での新年会、夏の遠出など、リクリエーションの場でもあった。例えば、同人歌行脚の記事が、1925 年８月 16 日の『日布時事』に大きく掲載されている。豊平走川、袖澗加保留、濱畑潮彩、吉田のぶじ、兒玉修三、飯岡白蓉、里川ひろし、相賀渓芳の８人が車に分乗して島めぐりをして歌を詠んだ。風流な趣味を満喫した様子が見て取れる[29]。

最初の数年間は熱気あふれる活動が続いたようだ。２年目には同人歌集『夜開花』を出版し、３年目には隔月同人誌『カマニ』を発行し、５年目にはハワイ全島の短歌同好者に投稿を呼び掛けて『布哇歌集』を出版した。

他方、華やかに活動する潮音詩社はホノルルの歌壇の批判の標的となり、『日布時事』、『布哇報知』、そして『布哇新報』の文芸欄に、辛辣な短歌批評が掲載された。「その結果、しばしば激しい論争が起き、読者はそれを楽しんだ」[30]という。「芋作」「タロ作」などという偽名を使い、紙上で「短歌を材料に個人攻撃」をする者も現れた[31]。また中林可鳴による「挑発的」「冷笑冷酷」な批評も掲載されたので、浅海蘆風は敵対的風潮が過熱することを恐れ、「短歌論客に寄す」という一文をしたためている。蘆風は可鳴に対して、「吾等潮音詩社の同人が相集ひ、相互作歌をしているのは、程遠い作歌の途を互ひに励まして進まんとする意志のためであって、他意はない。吾輩が短歌を真面目に考へ始めてまだ一、二年にしかならない。」と謙遜しつつ、批評のための批評ではなく、「吾々初心者は、可鳴氏如き先輩に向って希望する処は、此の卑見を以て吾々を指導して貰い度いのである。」と理解を求めている[32]。

3.2　『夜開花』（1923）の出版

最初の同人歌集『夜開花』は、第 10 回の例会が松澤睦水宅で開催されたとき、「潮音詩社第一周年記念」として歌集を出版することが決まったもので、二名の幹事が編者となって出版された。ほ

ぼ同じ時期に出版されたハワイ島のヒロ銀雨詩社の一周年記念歌集『銀雨』（1925）と比べつつ[33]、詠草をテーマ別に分類して検討を加えたい。『銀雨』の場合と同じように、ほとんどの同人が、ハワイの自然―花、椰子、黍畑、虹、海―をモチーフに楽園ハワイの自然美を詠っている。自然の美、その変化に、日本人の感性が生きている。

砂の白海の青みも鮮やかにそよげる風に椰子のさゆらぐ　嘉数南星
カマニ散るカマニ散る散る紅葉して常夏の島に秋風わたる　相賀渓芳
かがやきは銀の雫を動かして晴れゆく靄にマイナ高鳴く　見田宙夢
マノアなる小雨静けき青草にヒラヒラと散る金雨花のあり　白石白輝

また歌は移民の生活史を写す。移民としての生活苦、差別、孤独や、志を果たせない慙愧の念と寂寥感も、大きなテーマとなっている。潮音詩社同人の中には失業中の青年もいた。『銀雨』と同じように、アメリカン・ドリームを果して成功を謳歌する歌はみあたらない。

しみじみと貧乏こそは悲しけれ銭を拾った夢をみしかな　泉さだを
今日も又朝餉をとらず出で行きし無職の友は未だ帰らず　竹森たつじ
現世に虐られし日の叫び平等なりと声を放てり　袖澗加保留
病む妻と子供見守りコツコツと荒れにし畑を力なく打つ　袖澗加保留
夜となれば波打ちぎわに来て嘆く癖さえ何時か身につきしかな　室中未鳴
恋もなく金もなきこの単調よこの若き日の何時まで続く　兒玉修三

潮音詩社の同人たちのなかにはまだ独身者も多かった。青年たちは、ロマンティックに失恋を嘆き、情熱をこめて恋を詠う。これは同人にほぼ独身青年がいなかったヒロ銀雨詩社の『銀雨』と違う点である。

苦しさと悲しさとひた胸を焼く黒くこがれて我は死なまし　濱畑潮彩
吾が胸の壺を満たさむすべのなき夢の君をばもてる悲しみ　嘉数南星
すべてみな此のあきらめに身を投げて人妻となる汝も一人かな　竹森たつじ
追憶のいたましき恋よ哀れ無為の日は逝くわが若き日は逝く　兒玉修三
一塊の火と力をば投げし者そはわが胸に生くる君なり　里川ひろし

他方、1920 年代の日本人移民社会は、渡辺七郎に従えば「独立事業」「結婚生活」「永住主義」の時代であり、多くの写真花嫁を迎え、ハワイで家庭を築いてささやかな妻子との暮らしが始まった時代であった。『銀雨』と同じく、とくに子どもが生まれると、移民地に生活の根が張って生活者としての目線が生まれていく。

限りなき宇宙の中に妻と云ひ子といふものを持てる不可思議　東明子
子故には「馬鹿」と云はれて黙しいる尊き愛や父なればこそ　大久保うまきち
生くことの幸知れりてふ妻の瞳よピンクシャワーの揺るる昼頃　谷碧朗
後を追ふ事を覚へしいとし児よまことに我は父となりたり　谷碧朗
種々な玩具をやれど慰ぐさまで抱っこ抱っこと言ふ事をきかず　松澤睦水

異国で苦闘中の移民が短歌を詠むとき、祖国を想う気持ちが強く出てくることは自然な事であろう。日本に帰りたくても帰れない移民は、故郷の父母を思慕する歌を詠い、日本に続く海、空や、雲を詠い、そして日本とハワイを行き来する船や手紙に思いを寄せる。

はてもなき海辺に立ちて母恋へば我影さみし夕月夜哉　泉さだを
雨ばれの月あきらけく起き出て今朝来し母の文をみるかな　泉さだを
黒潮を超ゆれば鳥も追ふてこず祖国を離るる哀愁を覚ゆ　松澤睦水
くにさして帰る船あり此の真昼水平線におこる白雲　里川ひろし
背伸びした後姿の鎌足に母にかも似ていとしかりけり　佐藤芳山

3.3 『カマニ』（1924）の発行

３年目に実現した隔月同人誌『カマニ』の発行は、共楽館で開催された新年会で決定した。そして次の例会（相賀渓芳宅）で雑誌名、編集委員等が決定した。編集委員に選ばれたのは、日布時事社の豊平走川と里川ひろし、布哇報知社の吉田のぶじ、そして布哇新報社の佐藤芳山で、当時のホノルル三大日刊新聞社の記者４名であった。その次の例会（浅海青波宅）で、第２号からは編集とは別に詠草委員が掲載作品を選ぶことになり、浅海蘆風、飯岡白蓉、浅海青波、細田紫葉が選ばれた[34]。第１号と第２号は日布時事社で印刷され､広告を取り､第２号からは35セントで販売されたが、経営が苦しく、第３号からはミメオグラフ印刷となり、第６号で終わりになった[35]。

同人誌『カマニ』では、潮音詩社の同人たちの短歌論が展開された。同人のあいだでは、明星派は少数派で、当時日本で主流であったアララギ派の影響が強かった。写実主義、生活密着主義の傾向が色濃く表れ、知的で分析的な短歌論が展開された。例えば、飯岡白蓉は「自歌批判の提唱」というエッセイの中で、「歌は自己独特の表現であり生活の投影である。・・・歌に対する感情は俗を離れて真でありたい。物好き遊戯的態度から脱し空想的文学の技巧を斥けたひ。自然のままの真実―特殊―清新―優秀―美でありたい（ママ）。」とのべている[36]。里川ひろしも「自然の巡礼者」と題するエッセイの中で、次のように主張している。

「自然を見詰める」ことは常に必要である。吾々は平常余りに自然に対して鈍感であり、冷淡でありはすまいか。余りに自然を軽視しては居ないか。・・・

布哇の自然は単調である、と言ふことは誰人の口からも聞く処であるが、これは日本等に較べて見る時確かにそうした趣がある。然し乍ら布哇の自然が、日本のそれに比較して無変化で単調であると云ふことは布哇の自然が、作歌の上に無価値であると云ふ事実を証拠だてるものではない。仮令単調なり共、布哇には布哇の生命がある。布哇の自然は日本のそれよりも違った或る生命を持ってゐる。・・・

布哇の自然と日本の自然の異変、濃淡を比較対照して其優劣を決定するのが芸術の第一義ではあるまい。・・・布哇の自然の中に日本のそれより異つた点を見出し、それを掴み、それの価値を確かめ、そしてそれを表現せんが為めであらねばならぬ。・・・

ローカルカラーを表はすと言ふことは作歌の上に非常に大切であること今更言を要しなひが、是は殊更に其地名とか、其土地の草木、花鳥の名を入れたり又は其他の方法で無理をしなく共、しっくりと其地の情景に浸って居れば自ら其歌の上に現はれて来るものである。・・・[37]

自然に対して純粋に、素朴に向かい、古今調を排して万葉調を探求することが流れであった。浅

海蘆風は「古典をしたふ心―万葉集研究の緒言―」や「万葉集短歌選釈」を寄稿した。細田紫葉は「長塚節の歌に就き」の中で「錯綜した人生と自然の真実を歌ふ、これが短歌の使命であり、総ての文芸の真の姿であらねばならぬ。私が長塚節の歌を愛するのも実に此所に或る」と書いた[38]。

同時に、ありふれた日常生活の一部を詠うことが奨励され、それゆえハワイの日本人の生活をあるがままに描く「ローカルカラー」が重要視された。このような短歌観から、生活から分離した歌は批判の対象となった。例えば飯岡白蓉は、望郷の念を歌った歌を、「遠く故郷を離れているにも拘らず､その幼かったおぼろげな記憶を歌にしやうと苦心している。勿論それも悪くはない。しかしもっと自分の生活環境に忠実でなくてはいけない。先ず自分の周囲から開拓して行く方がよい。それを正直に見、正直に顕すことを怠ってはならぬ。」と批判した[39]。ローカルカラーの強調は、移民の生活を映し出す歌を作るということを意味し、彼らの歌は移民の社会史の資料としての価値が大きい。

3.4 『布哇歌集』（1926）の出版

この歌集は、当時日本で出ていた「年間歌集」に習って、ハワイでも全島を俯瞰する年間歌集を毎年一回出版する計画が持ち上がったもので、潮音詩社同人以外の短歌同好者からも広く詠草を募集した[40]。その結果ハワイ諸島 35 名の歌を収めることになった。

『布哇歌集』にはアララギ派の傾向が如実に現れている。選歌委員たちが全員アララギ派の信奉者であったから、『夜開花』とは異なって、ロマンティックな恋の歌や情をこめた望郷の歌はほとんどない。歌集の「はしがき」に明示されているように、この歌集に収められた歌には、3 つの特色がみられる。第 1 に、選歌委員は「ローカルカラーを濃厚に出したいと希ふこころと、風土生活により深い興味を喚起させたい望み」を持っており､ハワイの風土色を強く反映する歌を重視した。第 2 に、彼らは「時々のこころのひらめきを保存して置くことは、やがて時代相として顕るものである」と考えており､「歌壇の時代相を綜合的に記録する」ことを目的とした。第 3 に､「我々の目に触れるもの総てに自然美のあることをわすれてはならない。自然と人生との一致が即ち歌の極致である」と主張し、ハワイの自然美を強調する歌が多く掲載された。

第一に、ローカルカラーの濃い歌は移民の生活の一コマを歌う。多くの同人が安定した生活基盤を持っていたとはいえ、サトウキビ・プランテーションの労働者はまだまだ日本人社会の多数者であり、農耕は身近な風景である。

ホーを振る吾がかげ細くひっそりとうしろの土手に伸びしさむしろ　藤間順笛
うすぐらき明けがたの野や群立ちてホウ持ちにつつ朝汽車にのる　大下胡蝶
一日の仕事も終へて湯を浴めど赤土のしみのなお落ちぬかな　吉本秋山
日ならべて雨ふりつづく裏畑にほうれん草の茎赤らみぬ　吉田のぶじ

また都会生活の歌では、多くの同人にとっては決して有産階級的な余裕のあるものではなかったので、貧しさを詠うことが多かった。日本語学校教師であれ、日本語新聞記者であれ、安定してはいても財政的に恵まれていたとはいえまい。また貧しくても力強く生きる移民たちの生活がホノルル市内のあちこちで見受けられた。

久々の雨降る朝を靴下の破れ気にして水汲みにけり　飯岡白蓉
石ころのかまどをつくり夕餉たく海辺しづかに暮そめにけり　中林紅流
板壁のかくて破けむ古小屋に北風つよく吹きすさぶ音　中林紅流

あれを買ひこれもかひたいと思へども懐さみしいつになっても　泉さだを
やがて又降るけはいあり、夕、雨漏りの屋根に釘うつ父の細腕　豊平走川
まづしき女のでも出来るだけ粧はひし正月と言ふ淋しき一と日　星野金雨花
秋立つ日友禅模様きたる娘を街に見たりきアメリカの地に　南景三

第二に、1920 年代の時代相を反映する歌は、家庭を築いて定住期を迎えたハワイの日本人社会を反映している。明るい潤いのある家族の歌がますます多くなっている。

鏡台の前に化粧の妻の手のうごきふとやみ秋雨のふる　岩屋郁夫
宵月の芝にまろびて妻と二人移り来し家をしみじみと見る　濱畑潮彩
手枕に指をくわえてかろやかにそと母親の愛に笑む吾子　馬場のぼる
ククイ樹のさゆらぐ陰に水桶を囲みて子等のたはむる真昼　藤間順笛
ほの煙る野の火の灰に吾子はしもそと埋めにける芋堀りてはや　袖澗加保留
淋しげに指を吸ひつつ眠りたる吾子抱きしめてひたにわびぬる　前田杏華
昼近き厨に父の来まさずと聞きて淋しく吾子と飯食す　前田杏華
しみじみと吾れら語らふ窓の辺に時々よする浪の音かな　古屋翠渓
君かへるかがやきの日の早かれと祈るこころを我れはおぼえぬ　安部すずらん
われとわがさびしき性を其のままに持ちて生れしかあわれいとし児　浅海青波
病める児の脈見てあれば夜は更けて声ほそぼそと冬の蚊鳴くも　斎藤芙蓉
鳩みれば鳩の唱歌をうたふなり幼子可愛し今も唱ひぬ　宮崎千草

第三に、そして一番多いのは、ハワイの自然を日本人らしく繊細に観察して詠ったものである。四季の不明瞭なハワイにあってもわずかな季節の移ろいに目を留め、ハワイの自然の雄大さを詠っている。

雨つづき風に少し寒みあり常夏の秋を漸やくに知る　豊平走川
雨あとの薄らしめりの土踏めばそこはかとなくジンジャの匂ふ　藤間順笛
船底の溜りの水に川岸の九重葛［ブゲーゲンビリア］が散れる昼かな　吉田のぶじ
新緑の若葉に萌ゆるキャベの木に花咲きており夏近きかも　田巻青穂
碧玉をとかせし如き海底に見えざる国の在る心地する　相賀渓芳
プルメリア朝の時雨を嘆くにや花二つ三つ枝離れ行く　中林無有
あはただし雲かたまると見るほどにはや襲ひきぬ山の夕雨　中林可鳴
海原にもゆる血潮を流すごと静にコナの夕陽は入る　丸谷秀岳
椰子の葉の影引く濱にまろびつつうとうと聞ける潮ざいの音　布久永渓月
海見ゆる赤地高原かげらひて兵営のラッパ山越して聞ゆ　袖澗加保留

初期の潮音詩社の活動は、例会、機関紙発行、歌集出版と華々しかった。しかしこの後、急速に衰えていくのである。その発端と思われるのは、『布哇歌集』を巡る出来事であった。ハワイ全島に向けた詠草募集広告には、詠草選定委員が歌の選定をすること、最小限度の添削をすることを掲げていたのであるが、添削をめぐって中林無有（中林清文）から手厳しい抗議の手紙が日布時事社に届いた。中林無有は次のように主張した。

・・・自分の歌を無断で他人に依りて改飾され、夫れが為めに自分の元歌意を害はれ、傷けられたる事程、歌を詠む者に取って心外至極の沙汰は無いのである。・・・私は無断に自分の歌を改竄され、此の自尊心を傷つけられてまで、歌集に載せらるる事を潔しとするものでない。編者に於て若し私の歌が、加筆せねば歌集に載するに足らぬ程不美なものと思ったものならば、原稿を返して呉れればよい迄であった。・・・私は歌集投稿募集広告の際に、改竄は編者の自由であるとの旨が言明されてあったならば、元より私は歌集の仲間入りをお願ひするものではなかったのである[41]。

これに対して選歌委員会は、募集条件として「歌の選定及び字句の訂正は選歌委員に一任すること」が明記されており、「中林君の気に食はぬのは遺憾事ではあるが致方がない」とだけ返答し、歌論については紙上での論争をさけた[42]。これによって、歌集を毎年出版しようという意気込みは消え去った。さらに、その後潮音詩社は停滞期に入る。3月例会記録はなく、4月例会の詠草発表は6人、5月はなく、6月例会の詠草発表は7人。そしてその後長らく中断する。

4. 潮音詩社の停滞期 —1930年代

潮音詩社が90年の歴史をもつとはいえ、その活動がコンスタントに継続してきたわけではない。その間、中野次郎がいうように「ローラ—コースターのような上がり下がり」があり[43]、ときには長期間にわたり中断している。潮音詩社の活動は『日布時事』の文芸欄を発表の場としていたので、文芸欄を追うことによって、およその盛衰は把握することが出来る。『日布時事』に見られる中断状況は下記のようになっている。

まず、1927年6月26日例会以降、1928年3月24日例会までの短期間、例会が開催されなかったようだ。理由の第一と考えられるのは、有力な同人がホノルルを去るという変動であった。前年の1926年3月には、『カマニ』の詠草委員で短歌論を展開していた日本総領事館書記の細田紫葉が帰国した。次いで、1927年8月には同じく詠草委員であり同人を指導してきた医師の浅海蘆風が帰国した。福永渓月は次のように嘆いている。

蘆風氏は熱心な万葉の研究者であり讃美者である。潮音詩社の歌調が明星調の揺籃から現今故国歌壇の主潮たるアララギ調（万葉調）へと転換進歩したのには氏の歌論が預かって力があったと言はねばならない。・・・曩に紫葉氏を送り茲に又蘆風氏を送る。さなきだに歌壇に人少く漸次さびれ行きつつある今日、氏を送ることは寔に痛惜に堪えないことだ[44]。

さらに9月、その福永渓月がハワイ島ハカラウに日本語教師として赴任して去り、10月には幹事であった吉田のぶじが絵画の勉強のためにアメリカ東海岸のボストンに去った[45]。

有力同人を失ったことに加えて、ホノルルに残った同人たち、とくに青年たちが順次就職したり社会的に重責を負ったりするようになっていき、文芸活動への余裕を失っていった。山下草園は『布哇運動界』の主筆となりスポーツライターとして活躍し始め、豊川走川は『日布時事』の経済部担当となって多忙な記者生活を送っていた。さらに、

アノ熱心家だった袖澗加保留も東洋学園学務委員長やなにかで社会的に多忙となったセイか例会の催促もしないやうになり、肝心の幹事田巻青穂が布哇便利社に入りモトサイクルで飛び回っ

ているといふ具合で近来潮音詩社例会の開かれたといふことを聞いていない。・・・[46]

その上、豊平走川には娘が生れ、濱畑潮彩には息子が誕生し、「父親ぶりを発揮」し、仕事がおわると「矢のように家に帰りベビーの顔と睨めっこを続け」、文芸活動は後回しになった[47]。

当時のホノルルでは、文芸熱が冷めた状態であったようだ。『日布時事』紙上では、日曜日の広告が増えたためと、文芸欄が低調なため、文芸欄は日曜日から追い出され、「これからは毎週土曜日の第六面を文芸欄として開放することに」なった[48]。その土曜文芸欄には、「潮音詩社の詠草会が中絶しているためか短歌の振はざること夥しい。」あるいは「潮音詩社詠草会も久しい間中絶しているが・・・一しきり盛んだったミメオグラフの文芸雑誌も影を見せなくなった。一体どうしたと云ふのだろう。」といった嘆きの声が載った[49]。

1928 年春、潮音詩社の例会が復活した。新たに三上朽葉（三上永人、布哇出雲大社神官）が加わったことが大きい。三上朽葉は布哇出雲大社の神官としてハワイに赴任してきた。彼は、アララギ派を離れて北原白秋らとともに「日光」誌を起した釈超空に師事した歌人で、日本で歌集も出版していた。1928 年の 3 月例会は幹事山下草園の斡旋で、三上朽葉宅で開催され、潮音詩社は「瀕死の状態から蘇ることが出来た。」この例会には大久保志朗、川添樫風という新同人も参加し、相賀渓芳、袖澗加保留、飯岡白蓉、泉さだを、日向春潮（海老阪精宏、布哇中学校教師）等十数名が参加した[50]。その後、本重商店社長の山本清三氏が潮音詩社のために豪邸を開放してくれたので、4 月から 7 月まで山本邸で例会があり[51]、次の 8 月例会は飯岡白蓉氏の新宅を会場にして開催され、本郷くれない、北村愛子という女性 2 名の参加もあった（北村愛子の帰国送別例会で愛子は 8 月に帰国）[52]。

しかしその後例会は再び休会状態となった。二度目の停滞期間は長く、1933 年 4 月まで続いた。原因の一つは、またもや同人の移動にあったようだ。1928 年夏に豊平走川が帰国し、翌年 1 月には三上朽葉がハワイ島のヒロ石鎚神社に移動[53]。2 月には創設メンバーの一人であった泉さだをが一時帰国した。1931 年 2 月には、中心的同人であった飯岡白蓉が帰国した。文芸欄の記者は「潮音詩社同人の中でも特に熱心に、ひたすら歌道に精進して来た飯岡氏である。・・・今布哇歌壇の明星とも云ふ可き白蓉氏を布哇から失はんとして、或る種の淋しさを禁じ得ない」と名残を惜しんだ[54]。続いて同年 6 月には、もう一人の古い同人である日向春潮が、米国視察を経ての帰国の旅路についた。また同人の個人生活の変化も一因だったらしい。須藤豊二、兒玉修三、三上朽葉が相次いで結婚し家庭人となった[55]。

さらに、時代背景として、日本人社会全体が経済発展に傾斜していき、文芸離れをしたことが挙げられよう。1924 年の移民法によってアジア人の移民が全面的に禁止となり、ホノルルの日本人社会は急速に定住化に向かった。さらに、日本語学校をめぐる主流社会との軋轢、法廷闘争が 1927 年の連邦最高裁判所の判決によって勝利の決着をみると、日本人はさらにハワイに定住するようになった。相賀安太郎によれば、日本人は動産としてよりも不動産として財産を有するようになっていった。「1928 年に至って、それまで日本人所有の不動産は八百万弗台なりしものが、一千万弗に上り、爾来引続き増加の一路を辿り・・・1930 年には一千二百八十八万九千四百二十九弗となった・・・」[56]。1930 年のハワイの日本人人口は 139,631 人を数え、ハワイ人口全体の 38 パーセントを占めるに至り、多様な産業分野に進出を果たし、経済的地歩を固めた。日系二世がハワイ準州政治に進出を始めたのもこの年であった。漁業とコーヒー産業は日本人の独占事業となり、1930 年の「全島漁業の年産額は二百万弗を誇るに至った」[57]。文芸より経済の時代風潮であった。

ただし、潮音詩社は決して解散したのではない。同人の帰国等の特別のときには詠草会が散発的に開かれていたことが『日布時事』の記録によってわかる。1929 年 2 月、泉さだをの送別記念例会

が相賀渓芳宅で開催された[58]。1931 年 1 月には、「永い間詠草会を休んでいた潮音詩社では、昨年末布哇島から布久永渓月を迎えて急に活気を出し、新年詠草会を去る十一日サンデーワイパフ上原ドクトル好意によりポールシチー半島なる同ドクトル別邸に催した」[59]。1931 年 2 月には、飯岡白蓉の帰国送別の詠草会が開催された。1931 年 6 月には、日向春潮の帰国送別詠草会が開催された[60]。

これ以降、1933 年まで、例会の記事はみつからない。1932 年 3 月には、ハワイ全島の文芸愛好者を集めて布哇文芸協会の設立をみたが､潮音詩社はその旗揚げに参加した様子がない。この協会は「此の廃頽的気分の横溢している布哇にピチピチした文芸協会の一つくらいあってもよいと思ひます」という宣言文を発表した[61]。ホノルルの日本人社会を覆っていた物質主義への抵抗を試みたものであろう。しかしこの協会の文芸活動は新聞紙上に発表されておらず、活発だったとはいえないようだ。

1933 年 4 月､再び潮音詩社例会活動が断続的ではあるが同人宅を巡るようにして復活している。『日布時事』に詠草を発表したのは、泉さだを、山下草園、ヨシダノブジ、袖澗加保留、相賀渓芳、川添樫風、布久水渓月、安達凉雨、伊藤孤花、大井常英（日本語学校教師)、大西慶子、華頂静麿、陽光寺三郎の 13 名で、かなりの参加者があった。翌年夏、料亭塩湯で開催された懇親会の記事は、活発な交流をうかがわせる。

> ・・・又今年も恒例の懇親会が待ち受けていた。二十九日のサンデーにワイキキのしほ湯に同人十一名が顔をあわせて睦まじい一夕をすごした。陽がまだカンカンと照る頃から集って思ひ思ひに海に飛びこんだり砂の上に体を日にさらしたりして愉快な午後であった。・・・余光尚ほ明るい部屋の中に選を始める。選後の短評を抜きに一同テーブルをかこんで二つの肉鍋をつつきながら懇談、…一人一芸を演じて興深く、はしゃぎまわって十一時頃散会した[62]。

しかしこの後例会はまた途絶えがちになり、三度目の停滞期を迎えた。例会は送別会等の特別のときのみとなり[63]、ついには例会どころか『日布時事』紙上の文芸欄さえ消えてしまったのである。

5. 潮音詩社の復活 ―1940 年代

ところが 1940 年になるとまた例会活動が盛んになる。理由ははっきりとは分からないが、幹事の吉田のぶじの努力が相当あったと思われる。また高齢期に達した同人たちに時間的余裕がうまれ、文芸意欲が復活したのかもしれない。新しい同人の参加も増え、例会は月毎に開催されるようになった。例えば、3 月の例会では「毛利医博邸新築の日本間に・・・初めて加はった志賀野浦子、大城秀一、姫野正弘、柿の本の船頭諸氏の新顔」のほか、ヒロからの旧同人の田巻青穂と、「久しく姿を見せなかった古き熱血歌人可愛をさむ」が参加し、そして常連の毛利たいざんぼく、毛利八重、草野海三、椿建彦、袖澗加保留、中野浮葉、伊東正夫、相賀渓芳、佐藤富美彌、中林無有、三田翠山、三隅夕陽丘（三隅愛吉、日布時事社記者)、ヨシダノブジも出席し、「常になき賑はいを見せた」[64]。1941 年の 4 月例会は毛利氏新築の別荘で開催され、徴兵制度が始まって、応召入営の若い同人佐藤富美彌の壮行詠草会となった[65]。沖の舟人邸で開催された同年 5 月例会では、待望の日本の歌人加藤七三による詠草批評が届き、海野草三が読み上げ、「熱心に傾聴のあまり時を打忘れて散会は十二時に間もない頃」であった[66]。研究熱は創設当時を彷彿とさせるものがあった。

当時の例会記事に見られる潮音詩社詠草を拾ってみると[67]、太平洋戦争勃発前の日本人社会の世相を表す歌が沢山ある。まず、一世の高齢化を反映した、年齢を感じさせる歌が多い。最年長の毛利たいざんぼくは 80 歳を超え、相賀渓芳は二人の孫に恵まれ、かつての独身青年たちも家庭を持って

40 歳代から 50 歳代になった。

世界の人みな叛く日もわれにいまいとし愛孫二人もあるも　相賀渓芳
朝夕に手なれしかがみ見つめつつ、われも老ひぬとひとりごといふ　志賀野浦子
恋もせず過ぎにしあとをふりかえりなごりおしくもおもふわれかな　志賀野浦子
七十路の険しき坂もとく越えて八十路のみねを仰ぐ君哉　毛利八重
ライチーを植へはしたれど実る日のいつとは知らず老せまる身の　相賀渓芳
若き日はかくはあらじと思ひしに浮世の浪に今ぞおぼれぬ　柳井しげ子
五十路あまり老くれば夢も醒むべきをふくればふけて夢の絶えせぬ　中林無有

移民たち自身の高齢化は、日本に残してきた父母、兄弟の高齢化も意味した。祖国からは親族の死を知らせる手紙も届く。

あわれやも野辺の花にもふるさとのたらちねの母おもほゆぞかし　姫野正宏
子等のため母なきあとをひとり居てさびしくゆきし父をぞ思ふ　志賀野浦子
貧しさと闘ひつつも育ぐみ来し母のまことの深きを思ふ　今井龍美
弟の死を聞きてかなしおのが身のいよよ生家に遠ざかりゆく　志賀野浦子

1940 年には、世界戦争はすでに始まっており、アメリカはまだ参戦していないが、F･D･ローズヴェルト大統領は参戦にむけて準備を始めていた。ハワイでも軍事基地は拡張され軍事訓練が頻繁になり、夜もサーチライトが警戒するようになった。そして開戦前から 4 回にわたって徴兵があり、日系二世も徴兵されていった。潮音詩社の歌もその世相を反映する。軍事教練の風景が歌のモチーフとなり、アメリカ生まれの二世の徴兵と忠誠のモチーフも詠われた。

編隊をくずさず行けり爆撃機、雲母のごとく雲の彼方に　草野海三
時まさに非常時なれば飛行機の爆音近くわが身に響く　とし子
カリヒ潟千鳥の閨も安からじサーチライトの夜もすがら降る　夕陽丘
生国に誓ふ男の真ぞと入営の友をつつしみ送る　伊東正夫
初めての歩哨に立てば夜もすがら我に向ひてなく虫のあり　佐藤富美彌

日本語新聞は盛んに日中戦争を報道し、一世の間では日本軍への支援金の募集なども熱心に行われた。祖国からの手紙も、家族が戦争に巻き込まれたことを伝えていた。日米開戦の噂もあった。日本国籍の一世にとっては、祖国の戦争は重大な関心事であった。

いとし子をせめて一人は大君にささげまつると妹のふみ　志賀野浦子
子等はいまいくさに召され残りたる夫に逝かれし妹思ふ　志賀野浦子
大臣たち今日も日ねもすあげつらう殺戮の事たばかりのこと　草野海三
防へなき国の哀れをつくづくと今更にまた見る心地する　相賀渓芳
日米戦へば世界人類の破滅ぞと松岡大臣は声高くさけぶ　陽光寺三郎

潮音詩社が復活し熱を帯びてきたとき、1941 年 12 月 7 日、日本海軍が真珠湾を奇襲した。敵性外

国語である日本語は使用禁止となり、10 人以上の敵性外国人の集会は禁止され、日本語新聞の発行一時停止と検閲制度が導入され、潮音詩社は例会を中断せざるを得なくなった。また、潮音詩社の同人の多く―毛利元一［たいざんぼく］、相賀安太郎［渓芳］、古屋熊次［翠渓］、浅海庄一［青波］、小島定吉［南景三］、武居熱血（武居呉服店経営）、大井常英 ―は、ホノルル日本人社会の指導的立場にあったので、開戦直後に逮捕されてサンド・アイランドに抑留された。サンド・アイランドからさらにニューメキシコ州のサンタフェ抑留所、テキサス州のクリスタル・シティ抑留所、そしてカリフォルニア州のトューリレイク隔離収容所へと送られていき、終戦まで抑留された。抑留所では時間がたっぷりとあり、新しい結社―サンタフェ吟社とテキサス詩社―が作られ、ミメオグラフ印刷の歌集まで出版された。サンタフェでは『古多満』という文芸誌が 1944 年と 1945 年に 2 冊出版され、テキサスでは毛利元一編で合同歌集『流れ星』が出版された[68]。

おわりに

潮音詩社の例会活動は 1922 年に、当時ホノルルの日本人社会に台頭してきた中産階級の人々の中の文芸愛好家の間で始まった。最初の数年間は非常に熱のこもった活動が展開されたが、同人の移転や個人生活の変化、移民社会の経済的・社会的変化など、様々な要因で活動のアップダウンが激しく、ほとんど有名無実化した停滞期もあった。ヒロ銀雨詩社の場合も、1920 年代末から活動がほぼ休止状態になったが、しかしヒロ銀雨詩社の場合には、1932 年から日本の『短歌研究』編集長であった大橋松平の指導を仰ぐことになり、停滞期をのりこえることができた。毎月の詠草が海を越えて大橋の元に送られ、批評・添削されて戻ってくるという添削指導が定期的にあり、太平洋戦争開戦まで続いた。潮音詩社の場合には、このような日本の歌壇との永続的な関係がなかったことが、長い停滞期を打破できなかった一因といえよう。潮音詩社の場合には、1940 年には活発な活動を再開していたが、開戦によって中断せざるを得なかった。戦後 1948 年に活動が復活してからは、1949 年 1 月から釈超空の添削・指導を仰ぐことになる[69]。

潮音詩社は戦前だけでもおよそ 20 年の歴史を刻んだ。長い停滞期があったとはいえ、同人仲間の親睦意識は絶えることなく、解散を唱える者はなかった。存続に貢献したのは、創設期からの同人たち―毛利元一、相賀渓芳、袖澗加保留、泉さだを、吉田のぶじ、浅海青波―が核となってホノルルに定住していたこと、そして名幹事と謳われた吉田のぶじの存在が大きかったと言えよう。そして、毛利元一、相賀渓芳、その他の同人たちが順番に自宅で同人たちを歓待し、詠草の採点・批評だけでなく、食事や茶菓でもてなし、夜 11 時頃まで愉快な親睦が持たれたからである。職業の区別なく、男女の区別なく、同じ趣味で結ばれた者の集いであった。

潮音詩社の歴史とその歌は、日本人移民社会の一面を映し出す資料として貴重なものである。同人たちは生活史を歌に込め、それがやがて時代相を現すことになると自覚していた。相賀渓芳は潮音詩社の歩みを振り返って次のように言う。

> 言ふまでもなく、短歌は単なる風流韻事の遊びごとばかりではなく、暇つぶしの業ではない。歌の道は同時に亦荊の道であり、血に滲む（ママ）思索と熱と、正しき有りの侭なるものの見方と、それを表現するわざとならぬ技巧とを伴って、初めて達成の域に達するのである。
>
> 更らに又ハワイの歌人として別個の使命は、亜熱帯の気候と、鮮明なる南国の色彩に富む大自然と、理想的なるコスモポリタン郷たる此の地に於ける移植された日本民族の人事とを、短歌を通じ如実に伝える事である。

短歌結社を作ることによって、移民たちは仲間を得、生活を見つめる習慣を得、そして自己表現の場を得たと言えるだろう。それによって移民たちの生活史、時代相を今に伝えているのである。

註

[1] 篠田左多江「黎明期のハワイ日系日本語文学―尾籠賢治を中心に ―」『移民研究年報』第13号、2007：41-57頁。島田法子編『俳句・短歌・川柳にみるハワイ日本人移民史』平成18年度科学研究費補助・基盤研究C（一般）報告書、2009。島田法子「ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動 ― 移民の同化とアイデンティティ形成に関する一考察 ―」『JICA横浜海外移住資料館　研究紀要』第6号、2012：1-20。

[2] ハワイへの移住は、明治元年に移住した「元年者」と呼ばれる約150名の移民に始まる。彼らの中に農民は少なく、ハワイのプランテーション労働に適応せずに帰国や大陸転航した者が多く、また後続の移民がなかったので、ハワイで日本人社会を形成するにいたらなかった。『ハワイ日本人移民史』（ホノルル、布哇日系人連合協会、1964）、265頁。

[3] 移民人口の統計には多少の差がある。ここにあげた数字はハワイ政府の発表によるもの。『ハワイ日本人移民史』、166頁。

[4] 山下草園『日本布哇交流史』（東京、大東出版社、1943）、340頁。

[5] 『ハワイ日本人移民史』、268頁。

[6] 『ハワイ日本人移民史』、316頁。

[7] 渡部七郎『布哇歴史』（東京、大谷教材研究所、1930）、380頁。

[8] 森田栄『布哇五十年史』改定版（東京、森田栄、1919）、845頁。

[9] 相賀安太郎『五十年間のハワイ回顧』（ホノルル、「五十年間のハワイ回顧」刊行会、1953）、336頁。

[10] 渡辺礼三編『布哇報知創刊七十五周年記念誌』（ホノルル、ハワイ報知社、1987）、24頁。

[11] 森田栄、155頁。

[12] ハワイにおける俳句結社については、島田法子「俳句と俳句結社にみるハワイ日本人移民の社会史」『俳句・短歌・川柳にみるハワイ日本人移民史』、9-33を参照。

[13] 俳号は田島斷、筆名は神田謹三、本名は田島金次郎。東京出身で、1910年にハワイに渡航。ホノルルの布哇中学校・女学校の教員となる。1920年帰国。

[14] 不破保雄「大正三年度の文壇」『日布時事』大正4年1月1日。

[15] 同上。

[16] 篠田左多江、41-57頁。

[17] Jiro Nakano, “Honolulu Tanka Club: The Choon-shisha: A 70 Year Retrospective,” *Hawaii Herald,* July 16, 1993.

[18] 岬幻花「『海潮音』を読む―浅海青波氏の著書の歌集―布哇歌壇の産物」『日布時事』1922年4月23日。

[19] きしのあかしや「海潮音讃歌」『日布時事』1922年5月7日。

[20] 「昨夜の『海潮音』小集―清楚なる一夜 ―是を動機に毎月歌の会を催すことに決す」『日布時事』1922年5月16日。

[21] 潮音詩社同人の職業については、ホノルルの鈴木啓氏に多くのご教示をいただいた。

[22] 白石白輝は1923年カリフォルニア州の神学校に留学、水泳中に死亡。

[23] 「潮音詩社の人々 ―今日迄の例会のあと」『日布時事』1925年6月28日。
[24] 「その夜の印象―潮音記念会雑記」『日布時事』1925年6月28日。
[25] 濱畑潮彩「文壇大福帳」（一）『日布時事』1930年9月21日。
[26] 濱畑潮彩「文壇大福帳」『日布時事』1930年10月12日。
[27] 濱畑潮彩「文壇大福帳」（二）『日布時事』1930年9月28日。
[28] 大久保うまきち、吉田のぶじ編『夜開花』（ホノルル、潮音詩社、1923）、巻末。
[29] 「潮音詩社同人島巡り ―小一日の歌行脚」『日布時事』1925年8月16日。
[30] Jiro Nakano, “Honolulu Tanka Club.”
[31] 紅葉樹「潮音社同人批評について」『日布時事』1924年4月6日。
[32] 浅海蘆風「短歌論客に寄す」『日布時事』1925年10月11日。その後中林可鳴は、潮音詩社の募集に応じて『布哇歌集』（1926）に歌を寄せている。
[33] 銀雨詩社に関しては、島田法子「ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動」を参照。
[34] 山下草園「回想・潮音詩社 ―短歌結社半世紀の発端」（4）『米布時報』1972年9月1日。
[35] 山下草園「回想・潮音詩社 ―短歌結社半世紀の発端」（3）『米布時報』1972年8月1日。
[36] 飯岡白蓉「自歌批判の提唱」『カマニ』第1号、18頁。
[37] 里川ひろし「自然の巡礼者」『カマニ』第2号、13-14頁。
[38] 細田紫葉「長塚節の歌に就き」『カマニ』第2号、17頁。
[39] 飯岡白蓉「布哇歌集を通して」『日布時事』1926年12月12日。
[40] 山下草園「回想・潮音詩社 ―短歌結社半世紀の発端」（5）『米布時報』1972年10月1日。
[41] 中林無有「布哇歌集遺憾事」『日布時事』1927年1月16日。
[42] 選歌委員会、タイトルなし、『日布時事』1927年1月16日。
[43] Jiro Nakano, “Honolulu Tanka Club.”
[44] 福永渓月「去り行く人 ―浅海蘆風氏」『日布時事』1927年8月14日。
[45] 「潮音詩社水上詠草会 ―近く開催する」『日布時事』1927年9月11日；「文壇噂話」『日布時事』1927年10月29日。吉田のぶじは絵画留学を終えていったん帰国し、1931年秋に再びハワイに移住。
[46] 「文壇噂話」『日布時事』1927年10月29日。
[47] 「文壇噂話」『日布時事』1927年11月12日。
[48] 「土曜文芸」『日布時事』1927年10月29日。
[49] 「土曜文芸」『日布時事』1927年11月5日、及び11月12日。
[50] 「文壇噂話」『日布時事』1927年11月26日；「文壇雑記帖」『日布時事』1928年3月18日、及び4月1日。
[51] 「文壇雑記帖」『日布時事』1928年4月15日、及び8月5日。
[52] 「文壇雑記」『日布時事』1928年8月12日、及び8月26日。
[53] 「文壇雑記」『日布時事』1929年1月20日。
[54] 「文芸雑記」『日布時事』1931年3月1日。
[55] 「文壇噂話」『日布時事』1928年7月29日；「文壇雑記」『日布時事』1929年2月17日。
[56] 相賀安太郎、419-20頁。
[57] 同上、501頁。
[58] 「文壇雑記」『日布時事』1929年2月17日。

[59]「潮音社新年詠草」『日布時事』1931年1月18日。

[60]「潮音詩社六月の詠草 ―アラワイ河畔に春潮氏を送る」『日布時事』1931年6月21日。

[61]「文壇有志発起で ―布哇文芸協会― 愈々組織と決定す ―同時に宣言も発表」『日布時事』1932年3月13日。

[62]「潮音詩社詠草」『日布時事』1934年8月4日。

[63]「潮音詩社5月例会―あらた野夫人の帰朝送別の事、並にノブジ幹事欧米絵行脚の事」『日布時事』1937年6月2日や「潮音詩社5月例会 ―同人伊東小平を送る」『日布時事』1938年6月3日などの特別な例会が記録されている。

[64]「潮音詩社」『日布時事』1940年4月4日。

[65]「潮音詩社」『日布時事』1941年4月12日。

[66]「潮音詩社」『日布時事』1941年5月14日。加藤七三が詠草批評をするようになった経緯は不明である。紙上からは判断できないが、1940年から例会活動が復活した背後に加藤七三との繋がりがあったのかもしれない。加藤七三は熊本医科大学の生化学教授で熊本医科大学文芸部から歌集『藪』（1935）を出版している。1959年には『加藤七三歌文集』（加藤七三先生紀念会）が出ている。

[67]「潮音詩社」『日布時事』1940年4月6日、5月4日、6月6日、1941年4月12日、5月14日。

[68] Jiro Nakano, “Honolulu Tanka Club.”

[69]「潮音詩社新年詠草」『日布時事』1949年2月1日。釈超空没後は東京の林間短歌会主宰木村捨録が指導した。

The Honolulu Cho-on Shisha Poetry Club: Japanese Immigrants' Life as Reflected in Tanka Poems

Noriko Shimada (Japan Women's University)

This paper examines the history of a Japanese tanka poetry club, called Cho-on Shisha, established in Honolulu in 1922. First, it presents the historical background of the Japanese immigrants' community in the 1920s to prove that the club was the product of a rising middle class in this period that included medical doctors, ministers, ethnic newspaper reporters, Japanese language school teachers, owners of small businesses, and shop clerks. Then it demonstrates that their poems manifest the ideas and feelings of Japanese immigrants' toward the motherland, and also reflect their acculturation into the local life of Hawaii. In the 1930s, the club activities lost momentum and sometimes almost came to a halt. The paper confirms that their loss of passion ensued from the economic success of Japanese immigrants and their social mobility in Hawaii, young members' moving to the U.S. mainland, and elderly members' returning to Japan. However, in the 1940s the vigor was regained due to the consistent leadership of several stable members, only to be doomed to disband due to the outbreak of the war. The paper confirms that the club was a source of ethnic pride and a sense of belonging among the Japanese immigrants and that their poems were precious historical records of the life of Japanese immigrants.

Keywords: Japanese immigrants in Honolulu, tanka poetry club, Cho-on shisha

ペルー日系二世の短歌と戦前期の日本語教育
― 里馬実科高等女学校と日系婦人会文芸部「椰子の実短歌会」―

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）

＜目　次＞

はじめに
1.　ペルー日系社会と婦人会の成立
2.　ペルー日本婦人会文芸部「短歌研究会」
3.　ペルー日系婦人会「短歌研究会」から「椰子の実短歌会」へ
4.　里馬実科女子高等学校と小川長男
5.　「椰子の実短歌会」の終焉
まとめ

キーワード：第二世教育、バイリンガル教育、女子教育、婦人会

はじめに

2005 年 3 月 12 日、間近に迫ったペルー日系婦人会創立 50 周年の記念行事をめぐって最後の調整が進められているさなか、初集会以来、33 年間、ほぼ毎月欠かすことなく続けられてきた日系婦人による月例短歌会が、第 369 回集会を以てその歴史を閉じた。

本稿では、1972 年 5 月 30 日、ペルー日本婦人会文芸部「短歌研究会」として数名の幹部と会員を中心に活動を開始し、「椰子の実短歌会」として 2005 年に「休会」という形でその最後の時を迎えた日系女性による短歌創作グループの活動の軌跡を、婦人会そのものの成立過程、その後の会員・幹部の世代変化との関わりに視点を置いて再構成し、一世に替わり次第に同グループを支えていくようになった日系二世について、戦前期の第二世教育を廻る議論と日本語教育現場での教師の葛藤、移民自身の祖国に向けた夢と現実的な生活戦略とを背景に、素描を試みるものである。

1.　ペルー日系社会と婦人会の成立

ペルー日系社会における短詩形文学の流れについては、別稿[1]で簡単に触れたので、ここでは繰り返さないが、明治末に遡る移住の当初から、契約耕地から早い時期に都市に移動し、現地大衆層を顧客としながら都市の拡大に呼応して小規模自営業に展開していったペルー日系社会[2]では、多くの移民は錦衣帰郷を夢見つつ日々の生活に追われ、文芸や創作活動に関わることはごく稀で、戦前期の文芸活動は、一部の有資移民や移民会社の社員といったインテリ層によるごく限られたものにとどまっていた。また、都市部で現地大衆社会のまっただ中で成長していった二世達については言うまでもないが、日本からの移住者である一世自身、また、彼らから呼び寄せられた若者達においても、生活上の必要から言語文化的な現地社会への適応が比較的早くから進行していた。戦後、二世の成長と日本の敗戦による混乱とにより、日系社会は戦前期から進んでいた現地化の現実を受けいれ、心情的にも永住を決意してゆくことになるが、ブラジルやボリビアなどとは異なり日本からの集団

移住が認められなかったペルーでは、後続移住者は親族呼び寄せや配偶者の渡航などごく限られたものとなり、日系社会の現地化プロセスは一層加速されることになった。

1950 年代初頭のペルーでは、戦時中の凍結資産解除の動きや、日本の独立の回復などとほぼ時を同じくして、日米開戦を機に事実上その活動を停止していた様々な日系組織が、二世層の活動に刺激を受けつつ徐々に再興を遂げ始めていた。戦前期にペルー赤十字の依頼を受け、公領事館との密接な関係を維持しながら募金活動などを行っていた「秘女和会」の系譜を引く日系婦人による慈善組織の創設もそういった動きの一つであった。

未だ日本が独立を回復しておらず、日本の在外公館が存在していなかった 1951 年 6 月 5 日、ペルー赤十字からの要請に応え、募金活動に自主的に参加・協力した一世・二世の日系女性達に対する感謝状の贈呈式が行われ、その後の茶話会で「戦前にあったような秘女和会のような組織を結成しては」という当時のペルー新報社社長で戦後日系社会のリーダー的存在であった村松義定の提案に、集まった女性たちが賛同し早速委員会が開催されることになった[3]。同月 13 日に開催された委員会では、婦人会の創立委員を正式決定して会則などの草案作成、会員募集を開始することなどが決議されている[4]。しかしながら、翌年以降も毎年日系女性による赤十字募金への協力は続けられたが、その後数年間、婦人会結成の動きが進展した様子は窺うことができない[5]。

本格的に婦人会創立の議論が交わされるようになるのは、発案から 4 年後の 1955 年になってからのことであった。同年 4 月 1 日、津田天瑞領事の提案で赤十字募金に協力した婦人の代表 50 名ほどが公使公邸に召集され、同領事から「婦人を主体とせる慈善団体の創立案」が提出され、「満場一致にて可決」した女性たちの同意の下に、その席で監事 10 名が選出されている[6]。その後、4 月 14 日には公使公邸で最初の監事会が開かれ、会の名称を「在ペルー日本婦人会」とし発会式を 6 月 12 日に開催することを決議するなど[7]着々とその準備が整えられていった。しかし、会の目的を慈善事業とすることによって将来過重な負担をペルー側から求められる可能性について危惧が抱かれたことから、発会式は延期され、7 月 12 日に再び以前招集された婦人有志 50 名が招集され、会の目的を「会員相互の親睦と生活の向上を計(ママ)り当国予定の社会事業に協力を求められた時ハ参加し、余力があらバ其の他の慈善事業にも応分の協力をする」と変更し、その場で準備委員を市内各区から推薦、選出し再スタートが切られることになった[8]。こうした曲折を経て、ペルー日本婦人会の発会式と活動資金捻出のための演芸会が開催されたのは 8 月 21 日のことであった[9]。

既に述べた様に、同会は、戦前期にごく一部の有力移民の夫人達が組織していた「秘女和会」と呼ばれる、社交性が強く、在外公館とも密接な関係を持って維持されてきた慈善団体の系譜を引くもので、戦前期同様、ペルー赤十字からの協力要請を受けて種々の募金活動に参加したことをきっかけに新しい組織として再興されたものであった。創立の経緯を見ても、在外公館の強力な働きかけのもとに[10]、慈善事業を引き継ぐ団体として形成されていったものであった。しかし、戦前期の「秘女和会」の閉鎖性に対する反省や、若い二世婦人たちの積極的な協力のもと、広く日系女性全体を会員としてつなぎ止める努力と運営がなされ、かつ、活動の一つの柱にペルー社会に向けた慈善事業を置きつつも、次第に高齢化してゆく一世の慰労や、生活窮乏者への援助をより重要なもう一つの柱としてゆくことが目指され、以後今日迄、女性の視線を持って広範で積極的な各種の社会活動を展開してゆくことになる[11]。

ペルー日本婦人会では、会員相互の親睦を目的とした清遊会といった行事の他に、日系社会に向け敬老会や養老院の訪問、ひな祭りなどを主催すると同時に、日系社会の伝統となっている「運動会」や、婦人会の後を追うようにして再興されたペルー中央日本人会などの主催する様々な行事に共催、ないし協力という形で参加しその活動の幅を広げていった。そういった場における婦人達のパフォー

マンスを背景に、演芸部、コーラス部などの活動も盛んになり、会員の趣味と修養のための手芸部、茶道部なども併せて創設されていった[12]。そのなかの一つとして、婦人会幹部の藤井公子らが中心となり文芸部「短歌研究会」も設置されることになる。

2. ペルー日本婦人会文芸部「短歌研究会」

1971 年、里馬日本人小学校第 17 期生の小波津己代子が二世として初めて婦人会の会長に選出された。これは、婦人会を設立し 50 年代 60 年代を通じてその活動を担ってきた一世達が次第に第一線から退き、婦人会活動の中心が二世層に移って来たことを象徴する出来事であったと言える。その後、再び一世の会長が数年続くが、1977 年、再び二世の野田末子が会長となった時には、副会長の若林不二恵を除き、幹事長の遊佐智子、会計の上地清子、会計監査の小波津己代子らの婦人会幹部はほとんど戦前生まれの二世によって占められるようになっていた[13]。

いみじくも、小波津己代子が会長を務めていた 1972 年 4 月 14 日に開かれた第三回役員会で、敬老会、赤十字街頭募金や運動会についての議事に続いて、当時の副会長であり、短歌の素養の深い一世の藤井公子が中心となり、「文芸部を設置して短歌、俳句同好の部員を募集」することについて協議がなされている[14]。5 月 24 日には、『ペルー新報』に「短歌研究会」開催の趣旨を掲載し、30 日、「午後五時より会場（筆者注：ペルー新報社二階婦人会室）に於て短歌研究の初集合、十九名。野沢いね先生にご意見を伺ひ、各々即席を発表、七時過、来月を約し散会」している[15]。

1950 年に創刊された日西語新聞『ペルー新報』には、その創刊時から、「読者文壇」や投稿の形で、短歌、俳句、琉歌を中心とした文芸作品が掲載されていたが、後に婦人会の二代目会長となる内山初子は、ハウハ在住の斎藤清風などの常連と共に、折に触れ投稿を続けていた一人であり[16]、藤井と並んで短歌研究会設立推進者の一人であったものと思われる。婦人会の幹部としては藤井公子の他に、いずれも会長経験者である内山初子、伊波音、上運天鶴子などが、一般の会員としては、油谷春枝、吾妻都美子、遠藤貴世子、長崎絹代、渡辺栄子、野田アイ子、小野島千代[17]、中村歌子[18]などが短歌研究会の積極的なメンバーであった。また、雨宮松枝は短歌部の会計として深く同会の運営に関わり、2005 年 3 月の短歌会の終焉を見届けることになる唯一の短歌会創立時からのメンバーとなった[19]。このような初期の短歌会会員の多くは、20 年代後半から 30 年代にかけて日本からペルーへと渡航し、戦中・戦後の困難な時期を乗り越えた一世の女性たちであり、ちょうどこの頃、子育てや日々の生活から解放されてゆく一方で、夫や友人の死、自らの老い、そして孫の成長などなどについてわき上がってくる自分たちの思いを表現する場として、「短歌研究会」に参加していったのである[20]。

「短歌研究会」の創設にあたって、戦前パナマ、チリ、エクアドルなど中南米各地で手広く実業家としての活動を続け、戦後ペルーに居を構えていた天野芳太郎が短歌に堪能であることから、彼に選者となってもらうことで短歌会を開始している[21]。天野は、毎月最終水曜日の午後に婦人会会場で開かれてゆくことになる短歌会に出席して直接指導することはなかったが、1982 年に逝去するまで、選者として婦人会短歌会の活動を精神的に支えていった。短歌会の活動を実際に指導したのは、婦人会幹部の藤井公子と、野沢いね[22]で、野沢いねを「教師」としてのスタートであった。その後、「短歌研究会」はほぼ欠けること無く毎月一度の集会を続け、選ばれた作品は『ペルー新報』誌上に随時掲載されていった。

1977 年、藤井公子が会長であった時に、短歌会は創立 5 周年を迎え、歌集『ペルーに息ぶく』[23]が上梓され、その出版記念祝賀会が開催された[24]。「ペルーに息ぶく」という歌集のタイトルは、藤

井の求めに応じた天野が付けたもので、同誌の表紙には天野の揮毫になるタイトルが掲げられていた。同書には、33 名の会員による 800 首を越える和歌が掲載されており、数首から 50 数首まで、作者別に作品がまとめられ、巻末を藤井公子の 55 首が飾っていた。以後、5 年ごとに短歌集の刊行が続くことになる。

短歌会 10 周年にあたる 1982 年には、記念祝賀会が 7 月 16 日に開かれ[25]、歌集の第 2 巻『ペルーにいぶく十年』[26] が刊行された。一世 6 名があらたに会員として加わり、物故者についても作品が収録されたが、総歌数は 770 首弱、会員総数は 28 名へとそれぞれ僅かであるが減少している[27]。この短歌集は当時病床にあった天野芳太郎のもとに届けられたが、その二ヶ月後の 10 月 14 日、創立以来の選者であり、短歌会の後ろ盾になってきた天野が永眠し[28]、短歌会はその精神的・象徴的な後ろ盾を失うことになる。以後、短歌会はほとんど婦人会相談役としての藤井公子が主宰するものとなり、婦人会の議事録からも「短歌研究会」に関する記録は、15 周年の記念誌刊行まで見られなくなっている。

続く第 3 巻『ペルーに息ふく』[29] は、1987 年 10 月 23 日に上梓祝賀会が開催された。その席で藤井公子が文化部「短歌研究会」を代表して所感を述べ、内山初子による閉会の辞で締められた。藤井公子は、後日婦人会幹部会の席でも、短歌会を代表して婦人会に対して礼を述べている[30]。第 3 巻でも、藤井公子の作品を筆頭に、個人別に作品がまとめて掲載されている。更に一世 6 名、二世 1 名の新しい会員[31] が参加したにもかかわらず会員の総数は 22 名、収録歌数も 630 首程に減少を続けており、一世会員の高齢化による参加者の減少が主たる原因となり、短歌会が一つの曲がり角に来ていたことを物語っている。

短歌会創立 20 周年記念の合同歌集第 4 巻『ペルーに息ふく』[32] の出版祝賀会は 1992 年 12 月 10 日に開催されている[33]。この第 4 巻では、歌集の体裁、内容ともに大きな変化が加えられた。それまでの 3 巻を通じて踏襲されてきた、やや縦長の正方形に近い紙型から、横長へと変えられ、表紙も無地のモノクロのものから、カラーで桜の一枝の写真が入ったかなり現代的なものとなった。また、この時期に 14 名の新会員が参加しているが、瀬上テレサ、徳山緑、野内いさえ、諫山しげる、田中百合子[34] ら戦前生まれの日系二世は、早世した諫山しげるを除き、初期からの会員である雨宮松枝や中村歌子、80 年代になって短歌会に参加するようになった小林ミツ子などの一世とともに、短歌会の最後の時期を支えてゆくことになる。

婦人会の活動が戦前生まれの二世によって担われるようになっていった 70 年代から 80 年代にかけて、短歌会は婦人会の活動や実生活において第一戦から退きはじめた一世女性によって担われていたが、80 年代後半から 90 年代初頭になると、このように短歌会に二世の参加がめだつようになっていた。この時期は、一世の高齢化が更に進行していたことと同時に、戦前に教育を受け、それまでペルー社会の中で生活を続けていた二世達が第二の人生を歩み始める時期でもあった。ペルーは、ハイパーインフレと政治的混乱、テロ活動の激化などにより、政治経済社会全般にわたり、苦難の時期を迎えていた。海外に向けたペルー人の出稼ぎの動きが活発となり、90 年には日本の入管法の改正により日系人にも日本での就労の機会が与えられると、日系人の日本への出稼ぎが日系社会の空洞化を惹きおこしかねない勢いで進んでいった時期でもあった。二世達は、自らの老いと、三世の子息やその孫達が日本に向かう厳しい現実とに直面することになる。ちょうどこのころ、事実上短歌会を主宰してきた藤井公子も病床につくようになり、短歌会の活動を支えてゆくことが事実上困難となっていた。会員数の減少にも危機感をいだいた婦人会では、短歌会への積極的な参加の呼びかけを行った。これに応えたのが、第一線を退きつつあった前述の二世達であったのである。

この 4 巻めの短歌集には、総歌数こそ 550 首と減少を続けているが、第 1 巻を超える 34 名の作品が収録されている。歌の数の上では依然として一世層が中心となっており、参加間もない二世達の

作品は、瀬上テレサの 31 首を例外に、ほぼ一桁台にとどまっているものの、その後の短歌会を支えてゆくことになる二世たちがこの時期、会に積極的に参加するようになったことは特筆すべき点であろう。また、第 4 巻が刊行された後のことになるが、サイパン島で生まれ、南洋庁立サイパン高等女学校在学中に米軍の占領下に置かれ、捕虜収容所から戦後沖縄に強制送還されるという経歴を持つ宮里千枝子も、積極的な参加者の一人となった[35]。

図　婦人会短歌集『ペルーに息吹く』

3. ペルー日系婦人会「短歌研究会」から「椰子の実短歌会」へ

4 冊目の歌集が刊行されて間もなく、それまで事実上短歌会を指導して来た藤井公子が 1993 年 5 月に死去し、「短歌研究会」は文字通り存続の危機を迎えることになった。既に、婦人会の伝統的な文化活動の一つとなっていた短歌会に対する婦人会幹部の特別な理解と協力、会員達自身の懸命な努力により、集会はその後もほぼ毎月続けられていったが、本来であれば 5 冊目が刊行されて然るべき 1997 年になっても、短歌集が刊行されることはなかった。日系社会そのものもまた、出稼ぎが一時的なブームから、日本への定住・永住を予想させる中長期的・恒常的なものとなる一方で、二期目の後半に入った日系大統領アルベルト・フジモリの強権的な政治姿勢に対する国内外における批判、前年末に起こった MRTA による所謂「日本大使公邸人質事件」の影響などを受け、困惑と混乱の度を深めていた。

このような中で、短歌会の危機を救うことになったのは、リマに長期滞在している日本人の子女の為に設立されていたリマ日本人学校に派遣されて来ていた国語教師が、婦人会幹部の斡旋によってボランティアとして短歌会の指導にあたることになったことであった。まず同校の安斎弘幸が短歌会に参加し 1997 年 3 月に帰国するまで指導にあたり[36]、その後を一時校長夫人である下江泉がうけついだ。続いて橋詰典明は、1997 年 2 月 15 日の第 275 集会に参加し、2 月 27 日には、短歌研究会の新講師として紹介されている。そのことを伝えた『ペルー新報』の記事の末尾には、参加は自由で、性別も問わないという短歌研究会からのコメントが掲載された[37]。また、短歌会の名称についても、橋詰の提案でそれまで 30 年近く守られてきた「短歌研究会」から、親しみやすい「椰子の実短歌会」へと変更されることになった[38]。

「椰子の実短歌会」と改称された後も、中村歌子や雨宮松枝、小林ミツ子など戦前からペルーで生活を続けてきた一世は健康状態が許す限り短歌会への参加を続け、80 年代末から 90 年代初頭にかけ

て短歌会に参加するようになってきた日系二世の徳山緑、瀬上テレサ、野内いさえなどとともに短歌会を支えていった。また、例外的な存在ではあるが、日本語の継承に熱心な家庭環境で育ち、徳山緑の姪にあたる日系三世のリミ・タナカ[39]も1990年から4年間日本での滞在を終えペルーに戻ってから、叔母に誘われ短歌会の恒常的なメンバーの一人となり、ユニークな短歌を作り上げていた。

こうして、婦人会会員による文化活動の一環という創立当初の意図が薄れ、徐々に同好会的な性格が強くなってきた短歌会ではあるが、婦人会は、短歌会そのものの設立の経緯と、日本文化の継承という立場から、日本文化修養の場として短歌会を庇護し、できる限り幹部が例会に同席すべく努めていた。しかし、「日本語話者」でない戦後世代の二世層に婦人会の実質的な活動が引き継がれて行くにつれ、短歌創作に幹部達が関わることもほとんどなくなってゆくと[40]、婦人会の活動という位置づけはさらに薄れてゆかざるを得なかった。

橋詰が1999年3月に帰国すると、短歌会の指導は、後任の国語教師伊藤茂一に引き継がれた。伊藤の指導は、1999年5月8日の第302集会から始まり、彼が帰国するまでほぼ3年間に亘って続けられた。伊藤は2002年3月、ペルーを離れるに際し、『椰子の実短歌会』という簡易製本版の記録を作成し、彼が指導した第302集会から2002年2月の第334集会までの入選歌をまとめている[41]。そこには延べ14名の会員による439首が掲載された。

短歌会は伊藤の帰国後、3月、4月と連続して休会となった後、5月11日、後任である藤森卓麻が指導にあたることになり再開された。参加者を少しでも増やそうと、椰子の実短歌会は、「お茶を飲みながら気楽に短歌やおしゃべりを楽しむ」集まりとして、『ペルー新報』紙上で参加を呼びかけたが[42]、集会への参加者は常に一桁に留まった。藤森の日本人学校での任期は2006年3月までであったが、椰子の実短歌会は2005年3月12日の第369集会を以て、参加者自身の判断で休会という形で最後の時を迎えることになった。藤森による指導は2002年5月から2005年3月までの3年弱であった。藤森は、リマを離れる1月前の2006年2月に、自分が担当した第335集会から最後の集会となった第369集会までの入選歌をまとめて、『ペルーに息吹く』と題して刊行した[43]。同誌には12名の会員による234首が収録された。天野による「ペルーに息吹く」という婦人会「短歌研究会」歌集のタイトルの復活は、同時に、歌集と短歌会そのものの最後を告げるものとなった。

4. 里馬実科女子高等学校と小川長男

戦前期の二世教育は、日本人移民の錦衣帰郷の夢と、現実にペルーの地で展開しつつある彼等自身の生活とのせめぎ合いの中で、二世たちにどのような未来が開かれ得るのかという、極めて現実的な問題として一世達の心を悩ませていた。第一次世界大戦以降急速に展開しつつあった太平洋を挟んだ日米両国の緊張感の拡大、北米における排日運動の展開、1920年代末から30年代にかけての世界的な経済不況と各国におけるナショナリズムの成長、そしてアジアにおける拡張路線を進展させる祖国といった大きな歴史のうねりの中で、ペルーに限らず海外に生活する日本人の二世に対する教育問題は大きく揺り動かされていた。

前述のように、移住の初期から大衆層が形成されつつあるペルーの都市部、就中リマ首都圏において、大衆層の消費需要の拡大に合わせる形で展開していった日系人社会は、現地生まれの子ども達の増大と、現地社会の教育制度・施設の不備とを背景に、1920年、二世教育の為に秘露中央日本人会経営になる里馬日本人小学校を設立するに至る。里馬日本人小学校は、帰国の日を夢見て生活を続けていた移民達が、その子ども達に日本語による日本の教育課程に合致した形での教育を行い、日系二世に日本人としての精神を涵養する場として開設される一方で、「不知不識西班牙語ヲ習得シ

平常ノ会話ハ概ネ西班牙語ニ依リテ相通シ居リ中ニハ幾ント日本語ヲ解セサルモノ有之」[44]という現実を前に、ペルーの地で成長をとげている子ども達が「将来秘露ニ在テ活躍セントスル青年ニ必要ナル教育ヲ授」[45]け、二世層が良きペルー市民として成長してゆくための道を開いておくことにも腐心していた。このため、里馬日本人小学校は、1920 年の創立当初から、リマの在外公館を通じて日本の文部省に正規の日本人教員の推薦を求める一方で、ペルー人の教員を雇用し、二世がペルーの中等教育機関に進学できる資格を得させるため、ペルー文部省の公認を受けるのはもとより、スペイン語第５学年終了時には視学官の派遣を求め、児童にペルーの公的な卒業資格を与えてもらうべく努力していた。基本的な教育方針も、「日本精神を有する善良有為なるペルー市民の養成」というところに置かれ[46]、日本語と同時にスペイン語による教育が並行して進められていった。「日本語は日本内地の小学校と同程度に、西語はペルー国小学校と同程度に教授す」ることとなり、「日西両国語教授のため進度に無理を来たすを以て、教材の取捨選択に留意し、負担過重に陥らざる様留意」[47]されることになった。

こうした、「日西両国語教育」環境におかれ、日常生活では現地社会の真っ直中で成長していったペルー日系二世の中には、日米開戦以前から、ペルーの中等、高等教育へと進んでゆく者も僅かながら現れてきていたが、彼等の大部分は６年間（後に７年制に延長）の日本語による教育を通じて、日常会話においてはほぼ不自由のない日本語のレベルに達していた。しかしながら、日本語での読み書き、日本の社会や文化、習慣といった点における基本的な素養に関しては、スペイン語やペルーの文化、社会についてのそれとは比較にならず、小学校の課程しか開設されていなかったこともあり、多くを期待することができないのはむしろ当然のことであった。戦後、初等教育の現地化が一挙に進展してゆくと同時に、永住を決意した一世は積極的に子女をペルーの中・高等教育組織へ進学させるべく努力し、60 年代に入ると日系二世の大学への進学熱も高まり、それに反比例する形で、戦後一時期ささやかに復活した日本語教育熱も冷め、日本語教育への関心は急速に薄れてゆくことになる[48]。

里馬日本人小学校は初等教育課程だけであり、児童を中等教育に進ませるのであれば日本に子女を送り出すか、ペルーで進学させることになる。移民の中でも、ある程度の成功をおさめ経済的な余裕が出来た家庭では、二世の子ども達を日本で教育することを視野に日本語中心の教育を求める動きを取るようになってゆく。他方、統計的な数字を上げて議論することは困難ではあるが、ことペルーの日系社会に関する限り、実際に子女を日本に送り出すことのできる家庭は少数派であったと考えて間違いなく、自らの錦衣帰郷の夢と実際に二世が置かれていた位置とを考え、より現実的な「日西両国語教育」を受けいれていった。また、ペルーで生まれ育っていった二世自身は、成長してゆくにつれ、自らの生まれ故郷で生活の基盤がほかならぬこの国であるという事実を受けいれてゆくようになっていった。紀元二千六百年の奉祝行事として実施された二世による弁論大会では、次の様な二世の悩みが披瀝されていた。

「私達はペルーに生れペルーに育った。日本人である私達は勿論日本精神を持っている。然し善良なペルー市民として此の国に骨を埋める覚悟をしている。然るに一世は金を持って日本ニ帰ることを理想とする。一世よ我等を捨てて帰るな。我等と共にペルーの土になって呉れ」

「金力に恵まれた両親を持つ一部幸福な二世は教育の為とて日本に帰る。七ヶ年の教育を受けた我々に次に開かれて門は何処だ。否七ヶ年の教育さへ、此れ等少数の恵まれたる人々の準備教育である場合が多いのではないか」

「自然的環境の異なる国に生を享けた我々には確かに一世と異る或る種の性格の相違があらう。然し一世が綴り来つた苦闘史を受け次いで更に二頁三頁の輝かしい記録を残さうと努力する我々を正しく認識して適切な方針と指導を与へて欲しい」[49]

一方、日本政府とその意向を受けた在外公館員、また移民社会の指導者層は、世界的な不況を背景に、各国がそれぞれの形でナショナリズムを強めているいるという認識から、排日運動や国際的な緊張を不要に高めることなく海外に日本人の足がかりを作り上げる方策として、教育勅語に示された日本精神を持ちつつも、移住先国の良き市民としての二世教育を唱道していた[50]。

こういった日系社会各層の二世教育に向けた眼差しの差異は、開校当初からくりかえし議論を引き起こしていたが[51]、北米で排日移民法が施行された1924年の末には、移民の指導者層からなる里馬日本人小学校の学務委員会が、国際情勢を鑑み「日秘半々教育方針」を議決したのに対して、一般の移民層の中では比較的経済的に余裕のある人々から構成されていた同校の父兄会が「主トシテ日本語教育ヲ与フル方針」を採るべしとの修正決議をしたことから表面化し、公領事を巻き込む大きな論争へと発展していった。この議論は、現在の国際情勢下で日本語教育中心主義を主張する者は「在留国たる秘露を恥辱したるもので」「日本の文化を甚だしく傷くる非愛国的行動」であるとし、「将来日秘間に日米問題の如きを繰返す様なことがあったとすれば上は(ママ)陛下に対し、下は国民一般に対して、洵に申訳の無い話しではあるまいか」といった、領事荒井金太による一方的でほとんど恫喝に近い『アンデス時報』誌上の「年頭之辞」によって一応の終止符が打たれ、以後の日本人小学校の教育方針は「日西両国語教育」「日秘半々教育」へと方向づけられることになった[52]。

こうして、改めて里馬日本人小学校の基本方針として「日西両国語教育」が認識されてゆくことになるが、気候、風土、文化、習慣が大きく異なり、都市のペルー大衆の中で日常生活を続けていた日系二世の子供たちにとって、学校で教えられる日本の様々な知識を生活上の実感と繋げて理解することはそう容易なことではなかった[53]。ましてや、理想とされた日本とペルー双方における中等教育への道を担保する教育は、教える側にとっても教えられる側にとっても、6年間の修業期間を1年延長して7年としたところで、極めて困難なものであったこともまた言を俟たない。

結果的に、戦前期に里馬日本人小学校で教育を受けた大多数の日系二世は、教育勅語を暗誦し、日常的な会話についてはさほど不自由なくこなせる「日本語話者」として成長してはいったが、日本語での読み書きや、日本社会や文化についての基礎的な素養といった点においては、家庭などにおいて特別な教育や躾を施されない限り、かなり低いレベルにとどまらざるを得なかった。実際の移民社会の生活を見れば、大多数の子供達はペルー社会で未来を築いてゆくことになるのは、表だって認めることに抵抗があったとしても一世の両親、教師、そして、なによりも児童自身が認めざるを得ないところであった。教育は一義的には現地主義で行うべきであるという理想論[54]と、列強の一角を占めながらも国際社会で次第に孤立を深めつつある大日本帝国臣民としてのプライドを二世にも求めようとする意識、親たちの夢と現実の交錯、そういった揺らぎの場で、里馬日本人小学校に赴任して来た教員達は日々の教育を実践してゆかねばならなかった。

1934年、里馬日本人小学校へ赴任して来た小川長男は、そういった国語教師の一人であった。彼は、静岡師範学校在学中から斎藤茂吉に師事し、アララギ派の歌人としてその才を認められていた人物で、秘露中央日本人会側が求めていた青山師範学校出身ではなかったにもかかわらず、海外における国語教育を強く熱望し、里馬日本人小学校へと赴任してきた人物であった[55]。しかし、その歌人としての才能と、海外における日本語教育の夢とを、里馬日本人小学校での子供達への教育に積極的に活かせる場を見いだすことは容易ではなかった[56]。

いにしへのインカ帝国の国址(くにあと)に日本語教へてわが生きゐるか
第二世教育の理念と実践を誰か明確に説きくれよ吾に
第二世教育の困難さあげつらひピスコに酔ひて客は帰りぬ[57]

一方、里馬日本人小学校の正規の教育課程では不充分であったこともあり同校卒業生の進学準備の為に補習科も開設され、徐々にペルーの中等教育へと進んでゆく二世も現れたが、女子の中等教育についても、20 年代末から次第に関心が持たれるようになっていった。ペルーで社会的上昇を遂げつつあった日系社会を背景に、女子中等教育を望む一世の親たちの求めに応じて、良き家庭人としての人格や教養の形成と社会人としての実用的な技術教育を施す場として、里馬家政女学校が開設されたのは 1933 年のことであった [58]。里馬家政女学校の教育課程は 2 年間で、日本における実科高等女学校教科目（4 年制）に準拠し、その最初の 2 年間に相当するカリキュラムをこなすことを基準に組み立てられていた。修身、国語（講読、作文・文法、習字）、日本歴史、地理、数学、理科、音楽といった基礎科目とともに、家事（家事・作法・活花）、洋裁、手芸などの実用的な科目が設けられ、この他にスペイン語による修身、講読、文法、西洋歴史、簿記、タイプが教授された [59]。家政女学校は、里馬日本人小学校とは異なり、ペルーでの進学のためにペルー文部省のカリキュラムに準拠する必要はなく、一義的には日本における実科高等女学校教科目を日本語で教授していった。開校当初こそ、土日の午後のみの授業であったが、翌 1934 年からは毎日午後 3 時間の授業となり、更に 1938 年からは全日授業となるとともに、更に科目を増やしていった。そして 1939 年には在学期間を 3 年間に延長するとともに、家政女学校から実科高等女学校へと改称し、より日本での教育課程に近づけた教育を展開することになった [60]。

1938 年 2 月 24 日に大統領オスカル･ベナビデス、文部大臣エルネスト･モンタグネにより「ペルー共和国私立学校細則」が発布され、教員・授業時間数双方において、その八割をペルーのものとすることになった [61]。同細則は、「既存ノ外国人経営ノ学校」については除外規定があり、そのまま強制されるものではなかったが、日系社会は然るべき対応を迫られることになった。1940 年 12 月 17 日には私立学校教育八割制実施命令が出され、各地の日本人小学校も、教科の八割をペルーのものとしなければならなくなり、大きな混乱と打撃を被ることになった [62]。しかし、実科高等女学校については、上級学校への進学資格取得を目的としていないため、ペルー文部省による公認を必要とせず、従来通りの教育が続けられていった [63]。

この実科高等女学校で国語教育（他に日本歴史、地理、数学を兼担）を担当したのが、アララギ派の歌人で、二世への国語教育の現場で苦悩していた小川長男であった。

彼は、日西両国語教育が実施されていた里馬日本人小学校では実践し得なかった「国語教育」を、実科高等女学校の二世の女学生に対して行う決意をし、竹取物語を日本から取り寄せ、古典文法の授業を南米リマの地で実践したのであった。

二世らに竹取物語全巻を購ぜしはわが若き日の尊き思ひ出 [64]
日の本の言霊を得し乙女ぞと胸張り生きよインカの国に [65]

こうして、実科高等女学校となって初めての里馬日本人小学校第 13 期生を中心とする女子学生は、故国日本の本格的な古典文学の世界に触れる機会を得て成長してゆくことになった [66]。3 年の課程に拡充された里馬実科高等女学校の最初の卒業式が挙行されたのは 1941 年 12 月 28 日 [67] のことであった。日米開戦から僅か 3 週間後、前年までの華やかなものとはうってかわった、暗く緊張した雰囲気の中で卒業式を迎えた実科高等女学校の最初で最後の卒業生の中に、半世紀後に、一世が作り上げ育て上げてきた婦人会の短歌会を支えてゆくことになる田中緑や、松田いさえの姿もあった [68]。翌年には日系社会の主立った人物を中心とする北米への強制送還が始まり、ペルー日系社会は苦難と忍従の時代を迎えることになり、日系人へのあからさまな差別の中で、二世達はペルー社会へと出

て行くことになった。戦中期の不安な毎日を過ごす中、松田いさえは日記帳に次のような和歌を書きとめている[69]。

〈1942 年 6 月 15 日〉

今日もまた変る事なく過してし　今日一日の惜しくあるかな
先週のあわただしきかな四日間　此の世の果を感ずる我は
秋の色深くなりにし此の頃は　嬉しき色のうすくなりけり
南米の一国にあり我が家は　ゆかしくかほる大和なでしこ

〈時期不詳〉

あしびきの山の上に住む姉思ひ　三年の月日指折り数ふ
一日のつとめを終へて帰る路　一人足らぬを淋しく想ふ
平和といふ名をいただきて来る春を　その日くらしつひたすら祈る
墓参にて帰りに乗りたる自動車は　姉の旅しし自動車に似たり
右見れば真赤な夕日落ちんとし　静けき海の見ゆる左に

〈時期不詳〉

とつ国に雄々しく咲くや国の花　ここにも一輪南米の隅
幾千里へだたりたるや彼の地には　華と散りゆく同胞(はらから)多し
此処彼処ところは遠くへだたれど　心は同じ日の本の民
南米の一国にあり我が家に　ゆかしくかほる大和なでしこ
秋の色深うなりにし此の頃は　嬉しき色のうすくなりけり
今日も又変る事なく過ごしても　その一日の惜しくあるかな
教はるるところや多きくんぜんの　夫人の俤尊く偲ぶ
邦船の通はぬところとなりにけり　古き雑誌をくり返し読む
たのしみはたまの日曜家に居て　本を読んだり料理する時
たのしみに家の者等と皆して　森の近くを散歩する時
窓の辺の春の陽浴びるざくろの木　眺めて思ふ兄の事ども

図：日記帳に書き込まれたいさえの短歌

〈時期不詳〉

遠く居て如何に兵士を慰めむ　ただあるものは祈りの心
如何にせむ我も銃後の民なるを　慰問の文も許さぬ異国
朝早く通りすがりの窓辺より　かすかにもるる故国のラヂオ
足踏みて我が顔を見つあやまらぬ　排日男はチューインガムかむ
戦ひも早や一年を数ふなり　邦字の新聞よまぬ月日も
幼子に「居ない居ない」とあやすれば 「バァ」と答ゆる可愛ゆささかり

5.「椰子の実短歌会」の終焉

小川長男から古典文法を習い、日米開戦直後に里馬実科高等女学校を卒業した野内いさえ（旧姓松田）は、1989 年に長年連れ添った夫を失い、それまで夫とともに守ってきたリマ中心街の写真館の経営にも行き詰まりを感じ始めた頃、心の中の様々な思いが自然と歌となって浮かんでくることを感じ、それを書き留めるようになっていた。

ちょうどその頃、『ペルー新報』に短歌会で会員を広く募っていること、短歌会には二世の参加者が見られないことなどを書いた元ペルー新報社社長の飯田一夫による記事が掲載されたのを目にしたいさえは、婦人会短歌会への参加を決意する。実科高等女学校を卒業してからほぼ半世紀の歳月が過ぎようとしていた[70]。

久々のクラス会の集ひあたたかき　友の言葉が身に沁みるなり
ふと見れば孤独（ひとり）にあらずやさしはらから　心あたたかき友も待つ幸
手を取りて歩みし人生（みち）を今孤独（ひと）り　とぼとぼと行く旅路果なし
今一度、この現世（うつしよ）にかえりませ　いたらねど真心（こころ）こめてつくさん
世は移り変われど哀しく姿残る　移民史飾る我等の母校[71]

つつがなく今日も終わりぬ何故に　明日のみ気遣い日々を送るや
賑かに年越し共にといたわらる　晦日の夜の宴身に沁む[72]

一方、里馬日本人小学校、実科高等女学校を通じての同級生徳山緑（旧姓田中）もまた、同じ頃から積極的に短歌会に参加するようになっていた。

六十の手習ひわれも短歌の道　さぐり深めつ詠み進まんか
吾子はひとり留守居の淋しさに堪えんとか 「行ってらっしゃい」とうつむきて言う
未来の幸せ疑はざりし乙女我　夢もちてゐし戦ひの間も
朝露にめぐれる山は空にとけ　木木は墨汁（すみ）色晩秋のモリナ
慰問文送りて受けたる文はみな　うれしかりけり検閲の印ありしが
秋晴れを出稼ぎの子に手を引かれ　旅する日本列島美しかりしと
薄明の朝帰途は夕せまる教職に　清き瞳（め）の児（こ）童等は我が力なりしを
泣き笑いそのときどきの面影の　在はせし居間にしばし佇ずむ
三十一文字に魅せられ学びつアンデスに　息吹く一粒の種ともならむ[73]

緑はその後短歌会の終焉まで実質的なとりまとめ役として会の中心となり活動を続け、短歌会から一時離れていたいさえを再び短歌会へと誘うことになる。90 年代末から月例会で二人は、競うように歌を詠んで行った。

（集会不詳）

兄散りしボルネオ島もかくやありし　紛争ニュースに過ぎし日偲ふ　いさえ
手を掴み振りつゝ“先生つまんない”　児(こ)童の一途さになやみ広がる　緑
三部制予定躓き児童等の眼に　すまぬすまぬと繰り返しおり　緑[74]

（第 270 集会）

ためらひつたゝきつゞけし石橋を　渡る秋(とき)ぞと励まし聞こゆ　いさえ
抱き来し夢をも砕く窓口の　冷たき言葉に圧され黙せり　いさえ
悲憤の声受話器もつ手に伝わりぬ　われも無念の涙たぎりて　緑
兄も二世靖国神社に眠れるを　ビザ日本(くに)三月北米十年とは　緑[75]

（第 271 集会）

夫の旅異郷に土産ひとつずつ　ふえて君の名出ずるもおかし　緑
“ビザとらむは頭にくるぞよ”　窓口で白髪の人昏をかみて　緑[76]

（第 273 集会）

秋山の果てなき道のたそがれに　神々しく富士現はれ存す　いさえ
息をのみひととき言の葉忘れ去る　薄闇に浮かぶ真白なる富士　いさえ
すずろなるかなしみひそめつこの日頃　アンデス連峰ただ見入るなり　緑
もらい来しお守鈴の冴える音に　墓参の読経聞こゆるという　緑[77]

第 276 集会

なつかしき友と出会い重ねたる　新宿西口今は思い出　いさえ
公邸の主の如くに君臨す　テロの惨忍を神は許さじ　いさえ
渋柿と雪の母なる嘉穂(かほう)の里　緑の干し柿やわく甘かりき　緑
富有柿(ふゆうがき)の苗を賞にもらいいし　戦時下の児童等の浮かびくる柿　緑[78]

やがて、短歌会は日本人学校の国語教師による指導の下に置かれ、「短歌研究会」から「椰子の実短歌会」へと名称も、また会の性格も変化していった。

第 304 集会（1999 年 7 月 10 日）

さくら愛(め)でる人出のにぎわしく花見の宴(うたげ)わが故郷(くに)になし　いさえ
細やかな医師の言葉のぬくもりは生きるのぞみの泉なりけり　緑

第 306 集会（1999 年 9 月 11 日）

介護なる役目は難し今日も見るわびしさただようか細き肩に　いさえ
腰のばし苗床つくるこつこつと移植のごぼう食卓に香る　緑
園芸のやさしき師あり鍬とればわれ女学校三年生なり　緑

第 308 集会（1999 年 11 月 9 日）

信仰を説く遠来の友囲み黙し聞き入る春の夕べよ　いさえ
添削でみそひと文字は生きるなり互いに研鑽椰子の実短歌会　緑

第 309 集会（1999 年 12 月 11 日）
ひたすらにただひたすらに歩み来て残る道程(みちのり)長き短き　いさえ
春霞かかれる山々アンデスに連なりゆくやわが生(あ)れし里　緑
第 310 集会（2000 年 1 月 8 日）
神々しい富士の高嶺の初日の出我はテレビの前で拝む　いさえ
クローバーの四つ葉は花と咲きいたり文に添えれば心は青春　緑
第 313 集会（2000 年 4 月 8 日）
絵にあらず澄める夜空にさくら花美しきかなちちははの国　いさえ
亡き人の思いで語れば娘(こ)の瞳輝き増して問いも果てしなく　緑
第 315 集会（2000 年 6 月 10 日）
あの門は天国への道やすらかに御霊よ眠れやがて我が身も　いさえ
大地の詩摘まれた若葉の一つ一つ真心あるを知りて味わう　緑
第 316 集会（2000 年 7 月 8 日）
束の間の再会果たすも早(はや)別れ次の約束夜の空港　いさえ
いづこより舞い落ち来(きた)る黄水仙渋柿のもと春を告げる　緑
第 317 集会（2000 年 8 月 12 日）
桃の里ピンクに染まる花の下旧友(とも)と語らん腰を伸ばしつ　いさえ
若き日にたわむれ探せし河原道四つ葉のクローバー幸はリマにあり　緑
第 318 集会（2000 年 9 月 9 日）
いつになく見送ることの多かりき親しき人が相次いで逝く　いさえ
第 319 集会（2000 年 10 月 14 日）
若草の萌ゆるがごとく若人の力みなぎる五輪の舞台　いさえ
短歌(うた)の友声なく逝きしは従姉(いとこ)なり春の心に凩(こがらし)が吹く　緑
第 320 集会（2000 年 11 月 11 日）
まといつく痛み紛らす術(すべ)もなく夜は白々明け初めにけり　いさえ
手を握り六十年の絆脈あつし生徒に戻る学舎(まなびや)の友　緑
第 321 集会（2000 年 12 月 9 日）
師の美声未だに失せず高らかにペルー国歌を共に歌ひぬ　いさえ
二十一世紀よき年なれと祈りつつ病の娘に薬飲ませる　緑
第 322 集会（2001 年 1 月 13 日）
駆け足で齢を重ねる心地してめくる暦は二〇〇一年　いさえ
西念寺御院家自慢の浮遊柿苗は戦時の卒業賞品　緑
第 323 集会（2001 年 2 月 10 日）
古希過ぎて歩み始めぬぽつぽつと譜を読む道を音色探しつ　いさえ
山吹の色やわらかき十五夜と共に歩けば我が家も近し　緑
第 324 集会（2001 年 4 月 14 日）
にぎやかに週末過ごした後の日々戻り来たれば静けさ深し　いさえ
今遠き思い出となりぬサーブ打つ送る声援ワンツー、ソレー　緑
第 325 集会（2001 年 5 月 12 日）
眠りから覚めたる如く花ひとつ咲き出でにけり忘れし頃に　いさえ
「パパ」「来たか」満面くずれる目尻には感謝の涙丸く光れり　緑

第 328 集会（2001 年 8 月 11 日）

灰色の冬空仰ぐ紅き花そよろと揺れぬる姿美(うる)はし	いさえ
日本(にっぽん)にカタカナ言葉多くなり昭和の御代の床しさ偲(しの)ぶ	緑
散らぬ葉に混じりて満開桜花季節忘れし我が家のごとし	緑

第 329 集会（2001 年 9 月 8 日）

厳かな儀式に目頭熱くして大和心か四世にして	いさえ
桜花(はな)よりも柿を愛でたること多かりし戦い厳しき青春の日々	緑
どの人も愛でて尋ねり「サクラ」だと草取りやめて誇らかに答え	緑

第 330 集会（2001 年 10 月 13 日）

ある時は豊かな気分ある時は壁ある思ひ照る日曇る日	いさえ

第 331 集会（2001 年 11 月 10 日）＊当日配布資料あり

何時の世も悲惨な戦火絶えずして平和は遙か彼方に消ゆる	いさえ
三十一(みそひと)の文字は心の糧なりき涙は生(せい)への希望の泉	緑

第 333 集会（2002 年 1 月 12 日）

待ち遠し指折り数えし正月も齢(よわい)重ねて師走となれり	いさえ
戦にも若き生命(いのち)育みて宝珠山永久(ほうしゆやまとわ)に青春の里	緑

第 334 集会（2002 年 2 月 9 日）

前向きに健康体操針仕事目覚めのよき朝なべて明るき	いさえ
若き師のあたたかき教えはつらつと息吹くペルーの椰子の実短歌	緑[79]

第 338 集会（2002 年 8 月 10 日）

桜(はな)知らずも人の心に花知りて戦(いくさ)しずかに思うこの頃	緑

第 342 集会（2002 年 12 月 14 日）

弟の如く思えり同僚の命絶ち逝くあまりに悲し	緑
振り返り振り返りみる来し方を思ひ出話のみに終わりぬ	いさえ

第 353 集会（2003 年 11 月 8 日）

美しき桜知らずも雄々しさの花なりき戦わが青春	緑

第 358 集会（2004 年 4 月 10 日）

サイン帳悲喜こもごもと篭もれいる面影重なる人生の旅	緑

第 359 集会（2004 年 5 月 8 日）

リマ校の母校に寄せる心には恩師の面影永久(とことわ)にあり	緑

第 361 集会（2004 年 7 月 10 日）

大和なる心もちいし人逝きぬ君まつ星と七夕まつり	緑

第 363 集会（2004 年 9 月 11 日）

葉桜に霞ヶ浦の七つボタン歌い深山(みやま)の里友思う	緑

第 368 集会（2005 年 2 月 12 日）

離れても二〇〇五年寿(ことほ)ぎぬ日本でパネトンリマお雑煮で	緑

第 369 集会（2005 年 3 月 12 日）

ままごとのごとく遊びし三十一(みそひと)の文字は心の支えの泉	緑[80]

こうして、創立時には一世主体であった短歌研究会の活動は、「椰子の実短歌会」として、戦前期に遠く日本から離れた地で日本語による女学校教育を受けた「二世」女性に引き継がれ辛うじてそ

の活動が維持されてきた。しかし、他ならぬその二世の高齢化と絶対的な会員数の減少とにより、戦前期から現地化が進んでいたペルーで日本語による創作活動が可能である層がほとんど存在せず、更に次の世代へとその活動を引き継ぐことができず、2005 年 3 月、参加者自らが休会を決意することで 30 年以上にわたる活動の幕が下りることになったのである[81]。

6. まとめ

早足で、1972 年に設立された日本婦人会文芸部「短歌研究会」がその会員の構成を変化させながら、1997 年以降、日本人学校の国語教師に指導を受ける「椰子の実短歌会」となり、2005 年、その終焉の時を迎えるまでの軌跡をたどってきた。戦後日本からの集団移住者が存在しないペルーの日系社会では、一世達が作り上げた短歌創作活動は、後続の新しい日本人が加わることで豊かな姿を作り上げてゆくには至らず、一世層の会員の減少は、日米開戦直前の時期に例外的に日本の古典教育を受けた里馬実科高等学校の卒業生やその他ごく少数の特別な環境に置かれ日本語の読み書きを修得した人々によって辛うじて補われていったが、やがてそういった二世達自身が高齢化してゆくなかで、ペルーにおける日本語文芸として独自の熟成の機会を持つ事なくその最後の時を迎えることになった。

太平洋の時代を迎えた北・南米における排日運動の高揚と各国のナショナリズムの生成という大きな歴史のうねりを背景に、戦前期における移民内部の階層分化と、二世教育をめぐる軋轢・対立という日系社会の揺らぎの狭間で、教育勅語の普遍性というイデオロギーを背景に、逆説的にペルー化が進められていった二世への初等教育を背景に、一人の日本人国語教師が実科高等女学校で播いた種はペルーの地に根付き、その半世紀後に一世達の短歌会を引き継ぐ存在として、小さいながらもその花を咲かせた事実は見逃してはならないであろう。

同時に、遙か遠くの父母の日本（くに）を慕いつつ、「とつ国に雄々しく咲くや国の花　ここにも一輪南米の隅」と詠い生きてきた二世が、半世紀後女学校卒業の時に果たせなかった日本への旅を決意をした時、「抱き来し夢をも砕く窓口の　冷たき言葉に圧され黙せり」「兄も二世靖国神社に眠れるをビザ日本（くに）三月北米十年とは」と詠わせる歴史。また、強い愛国心を持ち外地での「国語」教育を熱望して、ペルーの地で古典文学を講じたことを「若き日の尊き思ひ出」と、また、ペルーで生まれ育った二世の女子学生には「日の本の言霊を得し乙女ぞと胸張り生きよ」と詠った小川長男が、同じ頃に「国こぞりアジヤ興すときほひゐる吾等に鎖国の歴史ありたり」[82]と詠み、交換船で帰国後二度と教壇に立とうとしなかった歴史。彼等によって、さまざまに詠われたこの日本（くに）を、個別具体的な一人一人の小さな近代史のなかに据えて読み解いてゆく作業を重ね、多文化主義やバイリンガル教育のもつ未来に向けた豊かな可能性とともに、それが内包し得る近代史の陥穽を見つめて行かねばならないとあらためて思う。

註

1 「ペルー移民と俳句　―創る俳句と想う俳句―」（『國文學』50-9、學燈社、2005年9月、pp.11-18）

2 「戦前期リマ首都圏における日系社会の人口分布と職業構成　―ペルーの国勢調査と日本側史料の分析」（柳田利夫編著『アメリカの日系人　―都市・社会・生活―』同文舘、1995年、pp.33-55）

3 『ペルー新報』1951年6月7日

[4] 『ペルー新報』1951年6月14日

[5] 1952年7月9日、1953年5月6日、1954年5月11日、恒例となっていた赤十字募金協力に対する感謝状の贈呈式と慰労茶話会が開催され、1953年以降は公使公邸での開催となっているが、婦人会結成に関わる議論が交わされた記録は見られない。『ペルー新報』1952年7月11日、1953年5月6日、1954年5月9日

[6] 「一九五五年度　議事録と会の動き」pp.5, 15-17（ペルー日系婦人会所蔵）

[7] 「一九五五年度　議事録と会の動き」pp.7, 17-19

[8] 「一九五五年度　議事録と会の動き」pp.7-13, なお、この第二回懇親会までの議事に限って、同議事録には修正が加えられた二つめの議事録が記載されており、その記録では婦人会創立の目的を「本会は在ペルー日本婦人及び日系婦人の親ぼくと生活の向上に努め日本及ペルーの親善につくし合せてペルーの社会事業に応分の協力をすることを目的とする」と改められている。p.21

[9] 「一九五五年度　議事録と会の動き」pp.33-43。ペルー日本婦人会『私たちの歩み　ペルー日本婦人会25周年記念誌』1980年12月、pp.15-17, 20, 50

[10] 創立の呼びかけから、種々の準備会議における司会、婦人会会則案の作成と、津田領事の強い関与が見られ、9月1日に開催された第2回委員会では「津田領事より会の組織と会則とについて説明があ」り、続いて「会則を読み上げ、承認を求められ」ている。「一九五五年度　議事録と会の動き」pp.63-65。『私たちの歩み　ペルー日本婦人会25周年記念誌』p.20

[11] 『私たちの歩み　ペルー日本婦人会25周年記念誌』、ペルー日系婦人会『私たちの歩み　ペルー日系婦人会四十周年記念誌』1996年3月、Asociación Femenina Peruano Japonesa『私たちの歩み　50 Aniversario』2006年、など参照。

[12] 創立時の運営資金捻出のための演芸会から演芸部が、1964年には婦人会に裏千家ペルー支部が発足し、1967年にはコーラス部が設置されている。その後手芸、書道、料理、ダンスなどの教室が開かれていった。それぞれの経緯については注11の婦人会周年記念誌を参照。

[13] 「議事録　第二十三回（筆者注：1977年度）会の動き」p.7（ペルー日系婦人会所蔵）ちなみに、野田末子は里馬日本人小学校第17期生で、小波津己代子や、戦後日系社会の代表的なリーダーの一人となるヘラルド・マルイらと同期生であった。（Ex-Escuela Japonesa Lima, *Album de Diamante*, Lima, 1996, p.308）

[14] 「一九七一年度　議事録及会の動き」pp.83-85 （ペルー日系婦人会所蔵）

[15] 「一九七一年度　議事録及会の動き」p.109

[16] 『ペルー新報』1952年9月21日、1956年8月8日、1956年10月19日、1958年8月8日

[17] 柳田利夫・義井豊『ペルー日系人の20世紀』芙蓉書房出版、1999年、pp.38-39

[18] 『ペルー日系人の20世紀』pp.34-35

[19] 初期のメンバーの一人雨宮松枝は、25周年記念誌に文芸部短歌研究会を代表して「三十一文字に心の糧を求めて」と題するエッセーを寄せている。（『私たちの歩み　ペルー日本婦人会25周年記念誌』p.41）また、中村歌子も、椰子の実短歌会会誌編纂などに家族ぐるみで協力を惜しまず、その逝去の数ヶ月前迄短歌会に参加し続けた。（ペルー日本婦人会文芸部短歌研究会『ペルーに息ふく』1992年10月、p.101）

[20] 1979年度に会長を勤めた遊佐智子、1981、87年度に会長を勤めた上地清子の二人は、初期の短歌会に参加していた数少ない二世である。

[21] 4月20日、ペルーに住み着くようになってから詠んだ短歌を個人歌集（『沙漠』をだまき社、1955年1月）として東京で上梓し、ペルー新報社を通じてペルーでも販売していた天野芳太郎宅を、小

波津会長、藤井副会長以下幹部4名が訪問し、短歌の添削を依頼している。「一九七一年度　議事録及会の動き」p.89。なお、1952年4月23日～5月13日にかけて、『ペルー新報』紙上に天野は「中米紀行の卵とその他」と題する、洒脱な文章に和歌を配した紀行文を寄せている。また、「トカゲの卵」（尾塩尚『天界航路　天野芳太郎とその時代』筑摩書房、1984年、pp.603-623）でも散文に巧みに短歌を配している。

[22] 野沢いねは、戦前のリマ日本人小学校付属幼稚園の園長を勤めた人物で、短歌集の出版準備が進められているさなかの1976年12月に、健康上の理由から短歌会の指導から離れており、以後は短歌会の実質的な指導は、藤井公子自身が担ってゆくことになる。「議事録と会の動き（筆者注：1976年度）」p.47（ペルー日系婦人会所蔵）。『私たちの歩み　日本婦人会25周年記念誌』p.41

[23] ペルー日本婦人会文芸部短歌研究会『ペルーに息ふく』1977年4月。

[24] 「議事録と会の動き（筆者注：1967年度）」p.33-135（ペルー日系婦人会所蔵）。『私たちの歩み　ペルー日本婦人会25周年記念誌』pp.34, 41.

[25] 「議事録　一九八一年度」p.19（ペルー日系婦人会所蔵）

[26] ペルー日本婦人会文芸部短歌研究会『ペルーにいぶく十年』1982年6月。

[27] 巻頭に「ペルー日本婦人会25周年記念を祝して」、巻末に「移住八十周年に寄せて」という題詠が、別仕立てで収録されている他は、第一巻同様、個人別に短歌が収録された。藤井公子の作品を冒頭に配した他は、ほぼ作者の五十音順に掲載されている。

[28] 「議事録　一九八一年度」p.261

[29] ペルー日本婦人会文芸(化)部短歌研究会『ペルーに息ふく』1987年7月

[30] 「議事録（筆者注：1987年度）」pp.31-33（ペルー日系婦人会所蔵）

[31] この時加わった会員のうち、会津出身の小林ミツ子はその後短歌会の終焉まで会員として活動を続け、優れた作品を残している。また静岡出身の稲葉梅子も、第4巻と合わせて100首近い作品を残している。

[32] ペルー日系婦人会文芸部短歌研究会『ペルーに息ふく』1992年10月

[33] 「（筆者注：議事録　1992年度）」p.41（ペルー日系婦人会所蔵）

[34] 田中百合子（旧姓三島）は1932年に日本で生まれているが、生後8ヶ月でペルーに渡り、ペルーでも出生登録がされた二重国籍者であり、ここでは日系二世として扱う。ちなみに、彼女はリマ市内にあったもう一つの私立日本人学校、時習寮の4年生在学中の1944年に強制収容により両親とともにテキサスに送られ、戦後再びペルーに戻りサン・シルベストレ学校でペルー人とともに中等教育を受けて成長した。田中百合子『水晶村の想い出』私家版、2003年11月。

[35] 宮里千枝子は、米軍基地で働いている時に、日系ペルー二世と知り合いとなり、彼と結婚して、その帰国に連れ添い1957年、ペルーへ渡航してきている。彼女と同じ様な背景で、50年代中頃から60年前半にかけて、日本からペルーに渡ってきた女性たちも少なくないが、短歌会の創作活動に参加する者はほとんど現れなかった。（2012年2月4日、宮里千枝子からの聴き取り、及び、同氏所有スクラップブックメモ）

[36] 「第四十一期（筆者注：1995年度）議事録」pp.61, 99（ペルー日系婦人会所蔵）

[37] 『ペルー新報』1997年3月4日

[38] 宮里千枝子「リマ日本人学校の先生方への感謝の記」（『ペルー新報』2006年5月12日）

[39] 『ペルー日系人の20世紀』pp.172-173

[40] Hasegawa, Martin, Fujinkai y la Cultura,（『私たちの歩み　50 Aniversario』p.26）

[41] 『椰子の実短歌会』には3月9日付で伊藤の編集後記が付されている。伊藤の送別会は、2月9日の

第334集会の終了後に開かれ、当時の会員8名のうち中村歌子を除く7名が参加している。『ペルー新報』2002年3月16日

[42] 『ペルー新報』2002年11月6日

[43] 藤森による簡単な編集後記には、椰子の実短歌会が休会となったこと、中村歌子が逝去したことなどについて簡単に記されている。ペルー日系婦人会文芸部椰子の実短歌会『ペルーに息吹く』2006年2月、p.71

[44] 大正8年6月13日、在里馬領事斎藤和より内田康哉外務大臣宛「小学校教師推薦方其筋ニ依頼ノ件」（外務省外交史料館、外務省記録3-10-2-10-41「在外本邦学校関係雑件」）

[45] 大正11年5月20日、在里馬領事森浩より内田康哉外務大臣宛「在留邦人ノ学校ニ関シ調査方ノ件」付属書「里馬日本人小学校ニ関スル調査（大正10年12月末現在）」（外務省外交史料館、外務省記録3-10-2-10-18「在外学校調査ノ件」第3巻）

[46] 秘露教育聯盟會學校要覧編輯委員會『在ペルー共和國日本人小學校要覽』秘露教育聯盟會、1940年8月、pp.4-5

[47] 『在ペルー共和國日本人小學校要覽』pp.4-5

[48] 増田義郎・柳田利夫著『ペルー　太平洋とアンデスの国　近代史と日系社会』中央公論新社、1999年、pp.250, 261-262

[49] 鎌田勉「新しい生活断篇」（秘露教育聯盟會『會報　昭和十四年度』pp.55-56。鎌田は「我々は最初から祖国の国語を知り、国語を知る人となり、その国語によつてさしたる苦労も無く同胞に共通な教養を修得して来た。そして今、此れと同様な国語修得の概念を以て第二世に不自然な強要をしているのではないか。言葉に伴ふ情調も心持の動きも省みず、実質的内容の伴はない標準語を発音せしめて、固有にして崇高な日本精神を純粋正確な国語によって養成するのだ、なぞと己ぼれているとしたら（中略）子守唄無き国に生まれ、変化無き気候に育った彼等に七ヶ年の小学校教育を与へて、第二世実力の不足を嘆じ、彼等の不勉強を責めんとする誤謬。生れ故郷に対する限りなき彼等の愛着を忘れんとする誤謬」と二世に対する国語教育の持つ本質的な問題に迫っている。

[50] 注53およびその本文参照。なお、二世エリートの言説を分析した前山隆「一九三〇年代サンパウロ市における日系学生結社　―国家・ひと・エスニシティ（その一）」（『アメリカの日系人』pp.57-86）は多くの示唆に富んでいる。

[51] 北米における排日運動の動きを背景に、現地社会への貢献を主張し「移住地主義」を唱える森本市太郎や橘谷精熊などの移民社会のエリート層からなる学務委員会と、五大列強となった祖国日本から招聘され「日本主義」を主張する横瀬五郎との間で大きな議論を引き起こしている。横瀬五郎『なつ草』私家版、1958年、pp.109-110

[52] 大正15年1月17日付、在里馬領事荒井金太より外務大臣幣原喜重郎宛「在秘日本人小学校ノ教育方針ニ関スル件」（外務省外交史料館、外務省記録B-3-10-2-10「在外本邦学校関係雑件／在外学校調査ノ件　第三巻」）『アンデス時報』大正15年1月1日（前掲史料添付）

[53] 「帰朝、日本遊学は同胞多数の希望であり、事実問題でもありますが、日系小学教育道の確立を期する上には、大多数の児童の現実並に将来性（日系市民としての将来性を担ふ）を拠所とし、他方、それ等の児童が在らねばならぬ理想の光に照らして、大道を決せねばならぬと思ふのであります。（中略）現行国語読本は、在秘日校学童にとり程度が高い（内容的にも吟味せねばならぬが）と思はれますが、仮に在秘日校国語材料が日本のそれに比べて、程度が低くなったとしても、それを十分修練体得し得ればその後力強い前進の可能であることが、形式陶冶論の上からも

断じ得るのであります。（中略）在るべき在秘日校を，一には、日（四）秘（六）以上の経営事情に当面して、尚且つ十分教育業績を挙げ得るやう、日系小学教育道確立を祈念する」（河南貞雄「在秘日系小学校教育道の確立を祈念す」、『會報　昭和十四年度』pp.12-18）。河南貞雄「小学教育の機構と情態」（秘露教育聯盟會『會報　昭和十三年度』pp.10-25）

[54] 関安太郎「小学校の本質と邦人小学校」（『會報　昭和十四年度』pp.19-24

[55] 昭和8年9月11日付、秘露中央日本人会長鈴木三郎より領事春日廓明宛て三名の教師選考斡旋依頼。同年11月9日付、来栖通商局長より長谷川青山師範学校長宛日本人教員三名の選考依頼。同年11月14日付、長谷川校長より来栖通商局長宛銓衡結果通知。（外務省外交史料館、外務省記録I-1-5-0-421「在外日本人各学校関係雑件／在米ノ部／里馬日本国民学校 第一巻」

[56] 「日本精神を持った第二世を教育するに、日本人は古代に於いても実に立派な人種であった事を立証している万葉集を教材に与へる事は決して無意義ではない（中略）これらの教材は外国生まれの第二世には、理解が困難であり、指導もむつかいしが、吾々の目ざしてゐる日本精神を持った第二世を養成するには、ゆるがせに出来ぬ教材だと思う」小川長男「忙中閑話」（『會報　昭和十三年度』pp.48, 55）

[57] 小川奈雅夫「教窓餘吟」（『會報　昭和十四年度』pp.92-93）

[58] 『在ペルー共和國日本人小學校要覽』p.3

[59] 前掲同書、pp.134-140

[60] 『在ペルー共和國日本人小学校要覧』pp.134-140

[61] 日本人ペルー移住史編纂委員会『日本人ペルー移住史』1969年、pp.316-318。小川長男「戦前のペルーにおける日本人教育施設」（ラテン・アメリカ協会『日本人ペルー移住の記録』1969年2月、p.277）

[62] 『日本人ペルー移住の記録』pp.278-279

[63] 『日本人ペルー移住の記録』p.279

[64] 平成萬葉集編纂委員会『平成萬葉集』短歌新聞社、1996年、p.71。『大アンデスと霊峰富士　小川奈雅夫遺稿集』私家版、1999年2月、p.26

[65] 『會報　昭和十四年度』1940年9月、p.92

[66] 1934年、小川長男らと同時に理科教師として里馬日本人小学校へ派遣され、同僚として過ごした関安太郎は「里馬日校での日本語教育（特に家政女学校に於いて）の実績は偉大なものでした。当時教えを受けた人々が、旧仮名遣いの立派な日本文の手紙が書けるのは、小川兄の優秀な指導力の賜にほかなりません。彼はまた、斎藤茂吉の高弟でアララギ派ではその人ありと知られた歌人でしたが、教育者であることの方に生き甲斐を感じていたようです」と述べている。（『大アンデスと霊峰富士　小川奈雅夫遺稿集』p.659）小川から係り結びを習った感動が、半世紀以上経った後も徳山緑の記憶には鮮明に残っていると言う。（*Album de Diamante*, p.170）

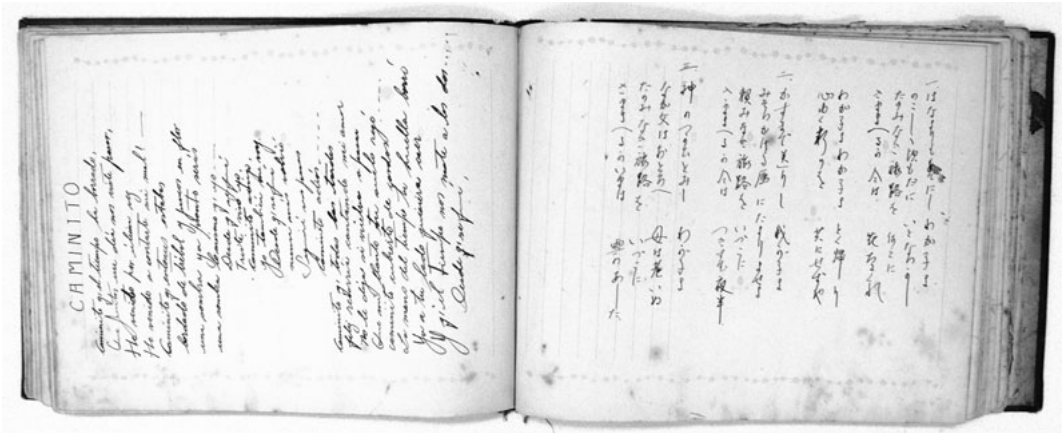
[67] *Album de Diamante*, p.171

[68] いさえはその四日前の二十四日に、次のような俳句を書き留めている。

学舎の友と語るも後僅か　　安らかないびきを立てる赤子かな
太平洋異國の兄はいまいづこ　初夏やさへづりわたる小鳥かな
花の露見つゝ待ちゐて落ちにけり　しとやかな娘になれよと言はれけり
卒業の旅行も今は夢の夢

[69] いさえは、博文館発行の昭和13年版『麗人日記』に、「流行歌全集　昭和十四年七月三十一日」とタイトルを付けて、日本の流行歌、手紙の下書き、創作短歌・俳句・自由詩などを書きとめて

いる。小川は歌人である姿を実科女子高等学校の生徒に見せることはなかったようであるが、彼に古典文法の指導を受けたいさえは短詩形文学の創作に手を染めていた。いさえは、百人一首を愛好し、崩し字の練習を兼ねてであろうか、好きな百人一首の歌をくりかえし書き連らねている。また、仏教主義に基づく女子の高等教育機関京都女子専門学校を設立し、関東大震災による負傷者・孤児らの救援活動に奔走し1928年に亡くなった九条武子夫人に憧れ、歌人としての才も長けていた同夫人の伝記を何度も読み返していたという。



写真解説：フォスター原曲の賛美歌「花よりも愛でにし」とラテンの名曲Caminitoの歌詞が見開きに書き写されている。

[70] 和歌を詠み始めたことを日本に住む小川長男のもとに手紙で知らせたところ、小川は歌を続けるよう激励しただけではなく、手紙による添削指導が何度か続けられた。しかし、小川の訃報を受け取るまで、彼が歌人であることをいさえは全く知らなかった。『大アンデスと霊峰富士　小川奈雅夫遺稿集』pp.689-691。2011年11月20日と22日、野内いさえからの聴き取り。

[71] 『ペルーに息吹く』（第4巻）pp.70-71

[72] 『私達の歩み　ペルー日系婦人会40周年記念誌』p.33

[73] 『ペルーに息ふく』（第4巻）pp.49-50, 62, 99

[74] 『ペルー新報』1995年6月28日

[75] 『ペルー新報』1997年3月18日

[76] 『ペルー新報』1977年3月26日

[77] 『ペルー新報』1977年5月1日

[78] 『ペルー新報』1977年7月4日

[79] 『椰子の実短歌会』所収

[80] ペルー日系婦人会文芸部椰子の実短歌会『ペルーに息吹く』所収

[81] いさえは体調の不良と、「歌がつくれなくなってきた」ということを理由に、2002年12月14日の集会で「振り返り振り返りみる来し方を　思い出話のみに終わりぬ」という歌を最後に、短歌会へ姿を見せなくなる。また、創立時から参加してきた中村歌子も、集会で「この後日は幾日限りの生命かと白き細腕伸ばして見入る」「長病みて笑顔埋もれしが気紛れに目覚め涙し笑ふ娘等」などの歌を残した数ヶ月後の2003年9月13日に逝去している。

[82] 『會報　昭和十四年度』p.93

この他に、2011年11月20日～22日（イサエ・ノウチ、リミ・タナカ）2012年2月4日（リミ・タナカ）2013年2月10日（ミドリ・トクヤマ、イサエ・ノウチ、リミ・タナカ）2013年2月11日（雨宮松枝）の聴き取りのノートとビデオ記録を利用した。

Tanka Poetry for Nisei (Second-Generation) Japanese-Peruvians and Prewar Japanese-language Education:The Lima Women's Vocational High School and the Tanka Poetry Circle "Yashi no Mi" of the Peruvian Japanese Women's Association

Toshio Yanagida (Keio University)

This paper reconstructs the trajectory of activities by a group of Japanese women who launched their tanka poetry-writing activities in May 1972 as members of the Tanka Poetry Study Group of the Peruvian Japanese Women's Association, and then ended their time as the Tanka Poetry Circle "Yashi no Mi" in March 2005, with a focus on their interaction with the women's association. The paper also outlines the nisei (second-generation) Japanese who came to uphold the tanka poetry group instead of the issei (first generation) during and after the 1990s, together with their works, against a background of discussion regarding prewar nisei education.

Keywords: Nisei education, bilingual education, women's education, women's association

日系移民学習の教材開発と実践（I）
― 移民学習教材としての「日本－ブラジル移民カルタ」の開発 ―

森茂岳雄（中央大学・教授）
中山京子（帝京大学・准教授）
福山文子（元財団法人海外日系人協会嘱託職員）

＜目　次＞

序　― 研究の目的
1.　移民学習の意義と移民学習教材
1.1 移民学習の意義
1.2 移民学習教材の種類
2.　日系移民カルタ教材の開発
2.1「移民カルタ」から「日本－ブラジル移民カルタ」へ
2.2「日本－ブラジル移民カルタ」開発の手順
3.　ブラジル移民をテーマとしたカルタ教材の意義
3.1 歴史・文化学習教材としての意義
3.2 日本語学習教材としての意義
結　語　―移民教材としてのカルタの教育的価値
付　録：「日本－ブラジル移民カルタ」一覧表

キーワード：移民学習教材、移民カルタ、ブラジル移民、日系ブラジル人児童生徒、継承日本語教育

序　― 研究の目的

今日のグローバリゼーションの進展の中で、トランスナショナルな人の移動は世界的な社会現象となっており、かつて移民の送り出し国であった日本においても、近年さまざまな目的で海外から移り住む人々が増えている。法務省の入国管理統計によれば、2011 年末現在の外国人登録者数は約 208 万人で、長引く不況や東日本大震災等の影響により 3 年連続で微減傾向が続いているものの、その数は日本の総人口の 1.63％を占めている。特に 1990 年の入管法の改正により、日系人に新たに国内での求職、就労、転職に制限のない「定住者」資格が付与されたことにより、多くの日系人が来日し、愛知、静岡、三重、岐阜、群馬などの県を中心に生活している。中でも日系ブラジル人を含めた在日ブラジル人の総数は 21 万人余りにのぼり、外国人登録者数全体の 1 割強を占めている。

また、公立小・中・高等学校、中等教育学校及び特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は 28,511 人で、そのうちポルトガル語を第一言語とするものは 9,477 人と、トップを占めている（文部科学省 2010 年度調査）。その背景には、約 150 万人ともいわれる世界最大の日系人人口を有するブラジルからの移住者が増えていることがあげられる。日本で学ぶ日系ブラジル人児童生徒にとって、日本語の習得は第一の学習課題となっている。

こうした状況の中で、現場教師や各教育関連機関が日本語学習のための教材を独自に開発し、学習支援に当たってきた[1]。しかし、日系ブラジル人児童生徒への学習支援の重点が日本語の習得にお

かれたために、彼らの集団としての歴史的経験や文化についての理解、及びそれを通してのエスニック・アイデンティティの育成については十分に対応してこなかったのが現実である。そこで、日本人ブラジル移民や日系ブラジル人についての歴史・文化学習（移民学習）と日系ブラジル人への継承日本語教育を兼ね、日本人学習者も共に学べる「日本－ブラジル移民カルタ」の開発を行った[2]。

以下、本研究のI部においては、これまでの研究で明らかにしてきた移民学習の意義について確認するとともに、移民学習に用いられる教材の中から特にカルタ教材を取り上げ、「日本－ブラジル移民カルタ」の開発の経緯や移民カルタ教材の特色や教育的意義について明らかにする。また、本「日本－ブラジル移民カルタ」を用いて、さまざまな教育の場で試行実践を行った。II部では、それらの実践の検討を通して、移民学習教材としてのカルタ教材の実践可能性を明らかにするとともに、その改善にむけての視点を提出する。（森茂）

1. 移民学習の意義と移民学習教材

1.1 移民学習の意義

今日、移民のグローバリゼーションの増大は一国家内の民族構成の多様性を生み出し、国民国家の虚構を露呈する上で大きな役割を演じている。一方、移民をめぐる人種主義が世界的にはびこり、すでに日本においても同様である。このような状況の中で、酒井直樹も指摘しているように、「移民政策や移民を含めた共同性の形成の議論が欠如した現在の状態」は大きな問題であり、今後移民がもたらす社会変化に対応した「新たな共同性」を作り上げ、身近な生活の中で隣にいる人（移民）との連帯を紡ぎ上げること（酒井 2012：13）、すなわち「多文化共生」は21世紀の人類的課題である。

これまで、著者らは多文化共生にむけた教育実践において移民学習の重要性について指摘してきた。すなわち、近代以降多くの日本人が海外へ移民したこと、彼らとその子孫の歴史的経験や現在の生活から、国民国家における基本的人権や市民権の問題、多文化社会におけるエスニック・アイデンティティの保持、異文化接触による文化変容の様相など、多文化共生をめぐる多様な問題を学ぶことができる。また逆に、日本に移民した外国人の歴史や、近年来日している移民の現状について、日本人移民や日系人の歴史的経験に重ね合わせて共感的に学ぶことは、「共生」に向けての資質を養う上で意義がある。

以上の主張を踏まえ、移民学習の教育的意義として以下の四つを示した（森茂・中山 2011：308-310）。

①グローバル教育と多文化教育をつなぐ
②多文化社会におけるシティズンシップを育てる
③国際理解教育における本質主義を乗り越える
④移民（児童生徒）のアイデンティティを確認する

これら移民学習の四つの教育的意義は、移民学習の内容構成や授業づくりの視点でもある。

また著者らは、これらの意義を教育実践に反映させる手だてとして、全米日系人博物館（Japanese American National Museum）やJICA横浜海外移住資料館（以下「海外移住資料館」と略）等と連携して、移民学習のための多くの教材や教師用の「学習活動の手引き」を開発し、それを用いた教育実践[3]を行うとともに、その成果を教員研修等を通して共有してきた[4]。

1.2 移民学習教材の種類

移民学習を効果的に実践するためには、特に年少の学習者にとって抽象的で、身近ではない「移民」

というテーマに興味を持って取り組ませるための教材の開発が不可欠である。それらの教材には、学校において一般に使用される教科書教材やその他の文書教材の他、次のようなものがある。

実物教材：農作業着、弁当缶等の生活用具、楽器など、学習者が実感を持って学べるように実際に操作したり、体感したりできるモノ（実物資料）。

読み物教材：児童図書（フィクション、ノンフィクション）、インタビュー記録、マンガなどがある。移民を扱った児童図書は数多く出版されている[5]。教材に使えるマンガには、『漫画　メキシコ榎本植民史―サムライたちのメキシコ―』（京都国際マンガミュージアム、2008 年）がある。ブラジルで出版されたものとしては、牛窪襄『ガン平氏―まんがブラジル移民の一生―』（私家本、1960 年）がある。また、在日外国人との多文化共生をテーマにしたマンガとして、「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会編『まんが　クラスメートは外国人―多文化共生 20 の物語―』（明石書店、2009 年）がある。

映像・絵画教材：写真、記録映像、証言映像、映画、テレビ番組、ドラマ、アニメなど。例えば、教材に使える写真・絵画資料として、藤崎康夫・山本耕二『日本人移民 ―写真・絵画集（1）～（4）』（日本図書センター、1997 年）がある。また、ブラジル移民をテーマにしたアニメーション教材として、浜松国際交流協会の作成した「100 年前へ、タイムスリップ ―アニメで学ぼう移民の歴史― 」がある。

音声教材：歌、インタビュー記録など。例えば、ブラジル沖縄移民 100 年を記念して、移民の歴史を歌で綴った CD として『移民 100 年の歩み』（作詞：安里幸永[6]、作曲：玉井政昭）がある。

紙芝居：例えば、海外移住資料館では、教材用として『海を渡った日本人』『弁当からミックスプレートへ』『ハワイに渡った日系移民』『カリナのブラジルとニッポン』の 4 編を貸し出している。また、沖縄 NGO センターでは、沖縄戦後、ハワイの沖縄移民たちが、食料のない故郷沖縄に生きた豚 550 頭を送った物語を紙芝居にした『うみからぶたがやってきた』を作成、貸し出ししている。

カルタ：例えば、広く北米・中南米を対象としたものとして海外移住資料館作成「移民カルタ」が、沖縄移民をテーマにしたものとしては聖田京子・大城明子作成「ハワイ・沖縄文化カルタ」、沖縄 NGO センター作成の「世界のウチナーンチュカルタ」がある。

シミュレーション教材：シミュレーションゲームや双六。例えば、富山大学教育学部「ハワイ学」研究開発プロジェクトチーム作成の「ハワイすごろく」には過去ゾーンの中に「移民」コースが含まれている（富山大学教育学部「ハワイ学」研究開発プロジェクトチーム編：2004）。その他、外国で作成された移民双六としては、ドイツからのブラジル移民をテーマにした双六「移民ゲーム」（O Jogo Do Imigrante/Das Einwanderspiel）[7] がある。本双六は、ブラジル最南部にあるリオ・グランデ・ド・スル州のゲーテ・インスティテュートが作成したもので、基本的には語学教材として使われている。

ワークシート教材：例えば、海外移住資料館では、博物館学習の補助資料として作成している。教師が学習内容に合わせて作成するものもある。

アウトリーチ教材：実物教材を中心に、複数の教材を集め、その解説やそれを用いた学習活動案例等をトランクやボックスにパックにしたアウトリーチ教材も作られている。例えば、多文化社会米国理解教育研究会作成の「ニッケイ移民トランク」[8]、海外移住資料館作成の「移民トランク」がある。また、ハワイ日本文化センターでは、アウトリーチ教材として「ディスカバリー・ボックス」[9] の開発、貸出を行っている。

これらの教材の他、教育現場ですぐに活用できるように教材と学習活動案例をセットにした指導者用の「教材集／学習の手引き」（Curriculum Resources Guide）も開発されている[10]。

本研究では、これら教材の内、カルタ教材の開発を行った。移民カルタについては、前述したように、これまでにも著者らが海外移住資料館と共同して開発した「移民カルタ」の他、沖縄移民をテーマにしたものが数種類開発されている。また、大学の教職課程の授業で移民カルタづくりを行った実践も報告されている（田尻 2008：246-263）。しかし、ブラジル移民や日系ブラジル人をテーマにしたカルタは開発されていない。ブラジルではパラナ日伯文化連合会日本語教育委員長の沼田信一作成の「教育カルタ」、及びその後作成された「教育カード」（写真 1）[11] がある。これらは、日本人ブラジル移民の歴史の理解を深めることを通して日系ブラジル人の子どもたちのアイデンティティを確認する日本語学習教材として作成されたものである。

日本において日本語教育を目的に開発されたカルタとしてハワイ大学、鹿児島国際大学、沖縄国際大学の教員、学生が共同で開発した「ハワイ・沖縄文化カルタ」（Oshiro, Sokei and Hijirida 2001：195-208）がある。今日、日本語指導が必要な外国人児童生徒の多くがポルトガル語を第一言語とする日系ブラジル人であることを考えると、日系ブラジル人の継承日本語教育をも視野に入れた「日本－ブラジル移民カルタ」の開発が必要であると考えた。（森茂）

写真1　「教育カード」

2.　日系移民カルタ教材の開発

2.1 「移民カルタ」から「日本－ブラジル移民カルタ」へ

筆者らは、2002 年から移民をテーマにした「移民カルタ」の開発に取り組んできた。このカルタの開発の手法として、ワークショップを活用した。より多様な視点とアイディアを含めること、ワークショップそのものを生産的な活動にするためである。

一般にワークショップでは、その場では楽しく学ぶがそこで生み出されたものやアイディアはその後、実際に活用されることは少なく、参加者自らの経験の中に葬り去られてしまうことが多い。そこで、ワークショップを開催する時、参加者によって生み出されたものがその後何かに継続的に生かされるようにと考え、2 回のワークショップを通してカルタを作成することにした。第 1 回のワークショップにおいて、カルタの読み札の数句（「横浜の港に戻る海越えて」「春の日に日系祭り大泉」「資料館お話し聞きます三世に」「ブラジルの食卓彩るいなりずし」など）をこちらから例示し、参加者

によって他の読み札を作成してもらう。第２回のワークショップにおいて、１回目で製作された句を加えて紹介し（「クラスにも日系人のお友達」など）、他の読み札を製作してもらう。最初の例示の句、その後２回目の研修会で製作された句を整理し、絵札の絵や写真を選定し、「カルタ」として試作品化する。そして、３回目ではワークショップの成果として紹介する。参加者からの意見や感想をふまえ、絵札の裏には解説をそえ、最終的に修正を加えた。

ワークショップでの作業が成果として「形」に残ることで、参加者のモチベーションも高くなる。編集したカルタには様々な立場の人の想いが反映されたものになる。「移民」をテーマにして製作したカルタであると同時に、移民学習の意義としてあげた「グローバル教育と多文化教育をつなぐ」ことを意識した「移民」の教材化をめざしたワークショップとして構成したため、多文化共生の視点が反映された次のような句も提案された。

写真2　「移民カルタ」

＜く＞　苦しみを　こえて手にした　市民権
＜そ＞　祖父母から　聞いてる日本は　どんな国
＜と＞　隣の子　ブラジルからの　転校生
＜み＞　ミックスプレート　お皿の上で　異文化理解

４回目のワークショップでは、完成したカルタを実際にどのように学びの場で使用するか、その可能性を検討した。（写真４）その後も繰り返し学習場面で使用し、教員研修等で意見を収集しながら、資料館と連携をして、教材として完成された。

完成したカルタ[12]では、日本から海外に移民した人々の歴史、日系二世三世の経験、在日日系人について学べる。ア行を紹介すると以下。

＜あ＞　阿波踊り　ブラジル風は　サンバかな
＜い＞　一杯の　コーヒーに想う　ブラジル農園
＜う＞　海を越え　ピクチャーブライド　夢いだき
＜え＞　エンシャーダ　引く手に落ちる　汗涙
＜お＞　お仏壇　神棚心の　支えとし

絵札の写真は海外移住資料館の展示からとりこんだ。資料館見学の事前事後学習にも効果的に使用できる。絵札の裏には読み札の句に関する解説があり、遊びながら移民の歴史について理解を深める事ができるほか、調べ学習にも活用できる。活用方法の工夫により、小学校中学年から大人までを対象とすることができる。

ここで作成した「移民カルタ」（写真２・３）は、広く一般的な使用者を想定していた。対象とした移民はハワイ、北米、南米を含み、主に歴史的事象を中心に構成した。句の言葉自体は平易ではあるが、内容や説明を理解できる年齢は中･高校生以上レベルになっていた。したがって、単に言葉カードとしては小学校高学年でも使用できたが、特に小学生や日本語を十分に習得していない外国人児童生徒にとっては実際にこの移民カルタを用いて句の内容の理解を深めるのは難しかった。また、内容は移民の歴史的経験を伝えることを重視していたため、「多文化社会におけるシティズンシップを育てる」と「国際理解教育における本質主義を乗り越える」に関わる句が多く、「グローバル教育と多文化教育をつなぐ」と「移民（児童生徒）のアイデンティティを確認する」に関するものが少なかった。

そこで本研究での「日本－ブラジル移民カルタ」では、日本の学校に多く在籍する日系ブラジル人児童生徒、教室内で彼らとともに学ぶ日本人児童生徒、あるいはブラジルにおいて日本語を学習

する生徒を主な対象として、ブラジル移民に関する内容に焦点化して教材開発を行った。また本研究の特徴の一つは、移民研究者、教育の専門家、日本語教育専門家、日系ブラジル人のバイリンガル教員によって開発チームが構成されていることである。このような専門を異にするメンバーの連携・協力により、多様な視点が反映され、より信頼性の高い教材が生まれ、教育現場での多様な利用につながると考えた。

写真3　移民カルタの例

写真4　完成したカルタを実際に使用して、授業でどのように使用するかを検討するワークショップ

カルタは、ことばに着目したハンズオン教材である。ことばに着目しつつ、楽しみながら絵札の写真や内容から多くを学ぶことができる。日本語学習者はことばの獲得だけでなく、歴史や文化保持／変容を学びながらエスニック・アイデンティティを高めことができ、共に学ぶ日本人生徒は日系ブラジル人の友人の背景を理解することができる。移民学習においてカルタの有用性は高い。

（中山）

2.2 「日本－ブラジル移民カルタ」開発の手順

「日本－ブラジル移民カルタ」（写真5）の開発にあたっては、まず、1.1で示した移民学習の理論に基づき、四つの教育的意義を念頭におきながら、カルタ教材に取り入れる日本とブラジル（あるいは他の中南米の国）両国に関連した要素を考案・選定する作業を行った。具体的には、「日本語学習を目的としつつ、日系ブラジル移民の歴史的経験を理解し、自尊心を高め、多文化共生にむけた資質を育てる」という本教材開発の目的を踏まえ、「移住者の思い」「努力・貢献」「生活・文化」「教育」「知識・事実」「苦労」「多文化共生・友好関係」「アイデンティティ」「文化変容」の要素を取り

入れることとした。この要素の考案・選定は、教材開発の目的に照らし、（日系ブラジル人学習者の）自尊心を高め、（日本人学習者の）多文化共生にむけた資質育成を念頭に置きながら、カルタの句（読み札）にどのような内容を盛り込めば教育活動に活用できるかを協議・検討した上で、仮説的な類型を産出する作業を繰り返す過程を経て行われたものである。

その後、各要素に関係する具体的な言葉（キーワード）を厳選し、その言葉を頭に置く句を作成した。句の作成にあたっては、まず各研究メンバーが神戸の海外移住と文化の交流センター、JICA横浜海外移住資料館の展示、資料を前にして創作し、それらの句をもとに、協議を繰り返す中で確定していった。そして、句に相応しい、写真の選定を行い絵札とした。

さらに、絵札裏には理解を深めるための日本語解説文と、ポルトガル語解説文を記した。ポルトガル語解説文の併記は、日本語初級学習者の理解を助けるだけでなく、日系ブラジル人児童生徒のエスニック・アイデンティティの尊重を意図したものである。教師の活用の仕方によっては、日系ブラジル人学習者の母語維持をはじめとし、教えられる立場に置かれることの多い日系人ブラジル人児童生徒をポルトガル語を教える立場に立たせることも可能となろう。

写真5　「日本ーブラジル移民カルタ」

写真6　「あ」の解説文、読み札、絵札

以上のような手順により、例えば、「努力・貢献」という要素に関係する具体的な言葉として、1929年にアマゾン地域へ日本人が移住してから80余年となる歴史的事実から、キーワードとして「アマゾン」を選定した。さらに、現在の現地における日系人の活躍を学ぶために「アマゾンで　森を守る　日系人」という句および、句に相応しいアグロフォレストリーに関係する写真を選定した。（写

真 6）さらに、「アマゾンでは日系人が行う環境に優しい農業が注目されています」といった各種文献に基づく[13]日本語解説文および、ポルトガル語解説文を作成した。そして、写真の選定にあたっては、広く使用できるように極力版権処理の必要ないもの、また一般的に書籍等で出ているものではなく、ファミリーヒストリーや個人的な記憶によりせまっていけるように、共同研究者のスエナガ一家（サンパウロ州ガブリエル・モンテイロ在住）の理解を得て全面的な協力を受けた。写真収集は、主にスエナガのブラジル調査により行った。さらに、カルタ試作版を用いた中山による大学授業で出た意見などを踏まえ、「暗い」印象を抑えるなど、改訂版作成にむけた写真選択や色づかいに役立てた。（福山）

3. ブラジル移民をテーマとしたカルタ教材の意義

3.1 歴史・文化学習教材としての意義

ここでは、日本人ブラジル移民をテーマとして歴史や文化を学ぶことについて、日系ブラジル人学習者および、日本人学習者にとっての意義という側面から検討する。田渕五十生は、日系ブラジル人児童生徒らニューカマーの子ども達は、祖国や過去と分断され、差別や偏見などの「心の壁」も深刻であると指摘している。そして、祖国からの分断という空間的な分断状況を超えるためには祖父母の実体験の歴史や祖国の文化と出会わせて「ルーツ」に繋げることが重要であると述べている（田渕 2007：52-53）。この指摘からは、日系ブラジル人学習者をはじめとした外国人児童生徒が歴史や文化を学ぶことで、祖国からの分断状況が改善される可能性を読み取ることができる。したがって、日系ブラジル人学習者が、「移住者の思い」「努力・貢献」「生活・文化」といった要素を含みこむ教材で学ぶことには意義がある。このような日系ブラジル人学習者のルーツにかかわる歴史的な事実や文化を学ぶ機会は意図的に提供される必要があるであろう。

一方、差別や偏見などの「心の壁」については、（外国人児童生徒が）「母国の文化を周囲から否定的にみられるために、自文化を自由に表現できないままに、自分で抑圧し潜在化させ、しかもそれをネガティブなものとしてとらえやすい」（佐藤 1998：486）との指摘がある。つまり、外国人児童生徒の「心の壁」の背景に、日本人児童生徒から向けられる母国の文化に対する否定的なまなざしが存在する。したがって、日系ブラジル人学習者とともに教室内で学ぶ日本人学習者が、日系ブラジル人学習者の文化的背景を受入れ、尊重する意識を獲得することは重要な課題といえる。
そして、そのために、日本人学習者が日本人移民の思いや努力、苦労までも含めた歴史的事実、さらには生活や文化などを学ぶことには意義がある。本教材では、例えば「沖縄の　人々世界に　目を向けた」（写真 7）、「土を耕し　努力で　信頼つかんだよ」（写真 8）、「祖先を思い　家族と行きます　お墓参り」の句の理解を深めるための解説文において、沖縄の人々の先見性や、ジャポネスガランチード（信頼できる日本人）といった言葉が現在もブラジルで使われている事実、および日系ブラジル人の習慣・文化に触れている。日本人学習者に対して、このような日系ブラジル人学習者にかかわる歴史や文化に関する肯定的情報が提供されることは重要である。これまで彼らが否定的に捉えてきた文化の相違を、評価や敬意の対象として捉えなおすことにつながるからである。

このように、本カルタのような、歴史・文化学習教材を活用することで、日系ブラジル人学習者にあっては祖国からの分断状況を改善すること、および、日本人学習者にとっては日系ブラジル人学習者の文化的背景を受入れ、尊重する意識を獲得することが期待されよう。

写真7　「お」の解説文、読み札、絵札

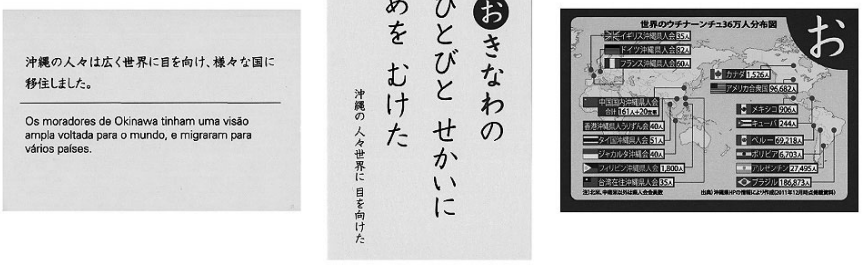
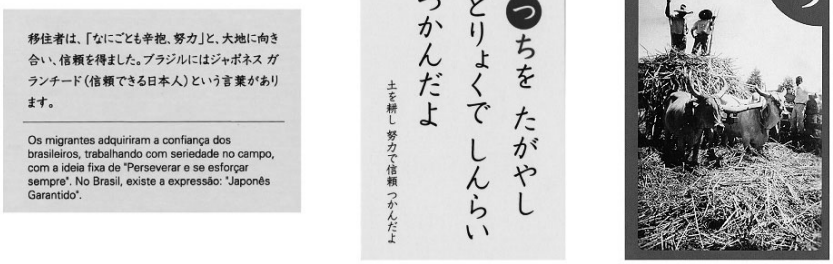


写真8　「つ」の解説文、読み札、絵札



3.2　日本語学習教材としての意義

日本語教育の視点からは、日系ブラジル人学習者の日本語学習、及び彼らを取り巻く継承語・母語維持・文化知識の獲得などの課題を意識した。そして、上述のような、日系ブラジル人の歴史や文化背景を学ぶという視点に加え、カルタを利用することによって日本語学習を行うことも念頭においた。具体的には、例えば「かさとまる」「せきどうさい」「トラホーム」「ひらのいじゅうち」などの、移民学習に関連する用語を使用した。さらに教育効果を考慮して、これらのキーワードは句の頭に置くようにした。

本カルタは、日本語初級学習者と中上級学習者の双方の日本語レベルを対象としていることが、その特徴の一つである。初級学習者や低学年の児童・生徒は、ひらがな学習を終えた者であれば、句頭のキーワードを読んでカルタを楽しむことができ、トピックベースの活動に発展させることもできる。また、分かち書きを取り入れ、できるだけ分かりやすい日本語や初級文法を使用するように心がけた。しかし、社会生活で自然な日本語に触れることの重要性も意識し、「てにをは」等スタイルに関しては統一せず、さらに５・７・５のリズムより、文型や言葉の形に合わせるほうを優先させた。例えば、「くろうして　こどもの　きょういく　かんがえた」「うんどうかい　ふねのうえで　たのしんだ」などでは、助詞の「を」や「は」は入っていないが、「ちからこめ　だいちを　たがやし　みのらせる」では「を」を入れている。また、議論の末、「ぬいばりは　きっと　やくだつ　ブラジルで」など、倒置の使用は採用した。

その他の留意点としては、「ふ」の句は「ブラジル」を句頭に置いたが、「フ」と濁音のつながりに気づく教育効果を意識した。「ハレのひ」「ブラジル」「マラリア」「メリケンはとば」などのカタカナ語もあえてそのままで記した。「を」と「ん」に関しては、「ろくだいが　たぶんかしゃかい㋫

いきてきた（六代が多文化社会を生きてきた）」や「にせⓐ　はちねん　ブラジルいみん　ひゃくねんさい（2008 年ブラジル移民百年祭）」のように、対象となる文字を句の中に埋め込んだ。例えば「ん」のように、なんども当該文字が頻出する場合には、色付けした。（写真 9・10）

写真9　「ん」の読み札、絵札

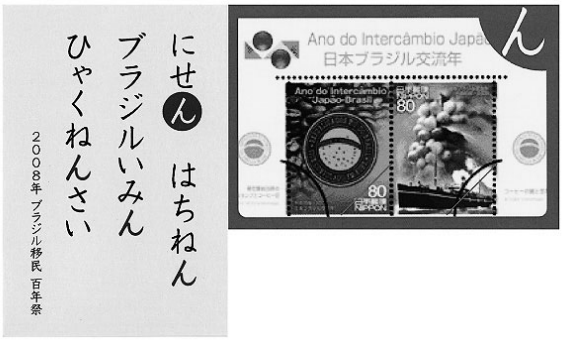


写真10　「を」の読み札、絵札

中上級の学習者は、漢字仮名まじりの日本語で書かれた日本語解説文をもとに内容読解に挑戦できる。同時に、ポルトガル語による解説文の助けを借りて、文化事象や祖先の経験などテーマに沿った発話機会を持ったりゲームをしたりなど、内容重視の学習を可能にする工夫をした。このように、さまざまな日本語レベルの児童・生徒たちの内容重視の学習を行えるという点で、そして自分のことを語る、インターアクションが可能になるように工夫されている点で意義深い。

一方、日本人学習者も、共に学ぶ日系ブラジル人学習者の発話を通し、日系ブラジル移民の歴史的経験などを知る機会を得ることが期待される。カルタで遊びながら、キーワードのポルトガル語を学べるという利点もある。ポルトガル語を知ることによって、クラスや地域にいる日系ブラジル人の人たちとのつながりを深めることも可能となろう。

さらに、日本語解説文の作成においては、短く平易な日本語を使用するよう留意したため、以前作成したカルタに比べて、低学年の児童をはじめ、活用可能性は大きくなったといえる。

このように本教材は、日系ブラジル人学習者の日本語学習を効果的に支援しながらも、同時に日系ブラジル移民の歴史的経験を理解し、日系ブラジル人学習者は自尊心を高め、日本人学習者は多文化共生に向けた資質を獲得する可能性を有するといえる。　（福山）

結　語　― 移民教材としてのカルタの教育的価値

「移民」という社会事象は、児童生徒の意識にとって身近で興味関心のある事象とはいいきれない。このように児童生徒にとって遠い事象に興味や関心を向けさせるためには、抽象的な事象を可視化したり、操作したりできる教材の開発が重要である。そのような意味で、カルタという教材は、事象の可視化や操作性という点で有効な教材である。

また、可視化だけでなく、カルタであれば読み札を読む、絵札の裏の解説を読む、聞くといった、可視化されたものを言語化することによって事象に対する認識が深まることにもなる。移民に関する知識を十分にもっていない指導者にとっても、子どもとともに学ぶことができる。

さらに、教材としてのカルタは、基本的には一人で使用するものではなく、集団との関わりの中で使用する教材である。カルタを用いた活動は児童生徒の人間関係づくりという点でも有効な教材であるとともに、活動中、活動後の意見交換を通しての自己意見の形成という点においても有効な教材である。（中山）

註

[1] 例えば、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターは「在日ブラジル人児童のための教材」を開発している。これには、四則計算や分数を学ぶ「算数」教材と、小学校1～3年生配当の漢字を学ぶ「漢字」教材が含まれている。同センターによれば、「日本において教科学習を進めるためには日本語が理解できなければいけませんが、現状は数多くのブラジル人児童が日本語に四苦八苦しながら学校で勉強をしています。そんな日本語を苦手とする子どものために、算数教材は日本語の修得と教科学習を結びつけたものとなっています。また、漢字教材は多くのイラストを用いることにより楽しく学習できる教材にしました。」としている。
http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/kyouzai/brazil/（2012 年 11 月 1 日確認）

[2] 本カルタの開発には、著者らの他、服部圭子（近畿大学准教授）、大舩ちさと（国際交流基金マニラ日本文化センター日本語教育アドバイザー）、スエナガ サンドラ テルミ（元群馬県太田市立太田小学校バイリンガル教員）が携わった。

[3] その実践の詳細については、森茂岳雄・中山京子編（2008）を参照のこと。

[4] 教員研修の概要及びプログラム開発とその評価の詳細については、中山京子・森茂岳雄（2008）、及び福山文子（2008）を参照のこと。

[5] 例えば、日本人アメリカ移民・日系アメリカ人に関する児童図書リストについては、森茂岳雄（2008：420-421）参照。また児童図書を用いた実践については、中山京子（2008b：95-101）参照。

[6] 安里幸永はサンパウロ在住で、作曲当時100歳。沖縄県本部町字具志堅出身で、1928年にブラジルに移住し、農業と縫製の仕事に従事した。詞は四行一連で7番まであり、「出帆」「航海」「耕地」「開拓」「地主」「収穫」「100年」とテーマが付され、ブラジル沖縄県移民の100年の流れがよくわかるものとなっている。尚、玉井政昭は沖縄在住の作曲家である。

[7] 本双六は、1990年頃作成されたものといわれているが正確な作成年は不明である。時代的には1860年代前後を想定し、ドイツの6都市からブラジルの3州へ移民した架空の個人史を追体験するストーリーになっている。JICA横浜海外移住資料館所蔵。本双六については、同資料館の小嶋茂氏から情報を得た。

[8] 「ニッケイ移民トランク」の開発と実践については、中山京子（2008：27-39）参照。

[9] 「ディスカバリー・ボックス」の開発とそれを用いた教育プログラムについては、森茂岳雄・中山京子（2008：309-318）参照。

[10] 例えば、沖縄県観光商工部交流推進課・沖縄NGO活動推進協議会（2006）、国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館（2007）、多文化共生教材プロジェクトチーム（ともいき教材グループ）編（2009）、特定非営利法人沖縄NGOセンター編（2012）がある。

[11] 「教育カード」作成の経緯について、沼田信一は、その序文で次のように記している。「昨年末、シニアの三浦先生から『来年の中ごろ私の任期が切れる前に、もう一度日本語教師の講習会をしていきたいと思っていますが、前回では沼田様の教育カードがありましたが、何かそれに代

わるものがありませんか』と尋ねられ、思いついたのは、折からパラナ新聞の二千年の新年号から連載しようと予定している、『顧みりゃ　移民懐かし　あいうえお』に、マンガを付けてカード式にしてみてはということでした。／そこで先生に相談して賛成を得、取り急いで作成したものです。／先生方に利用していただいて、生徒たちに、その昔移民で来た、親、先祖、あるいは先輩の当時の生活の一端を偲んでいただければ誠に幸いと思う次第であります。」尚、本「教育カード」については、ロンドリーナ・モデル校の斉木直美氏から情報を得た。

[12] カルタの最終的な編集作業においては、当時海外移住資料館勤務の飯野彩氏の多大なる協力を得た。現在、JICA横浜海外移住資料館にて貸し出しを行っている。

[13] 日本語解説文の作成にあたっては、日本移民80年史編纂委員会編（1991）、及びトメアスー開拓五〇周年祭典委員会編（1985）等を参考にした。

引用文献リスト

上野久・木ノ花さくや作画、メキシコ榎本殖民史漫画化プロジェクトチーム・京都精華大学事業推進室編 2008『漫画　メキシコ榎本植民史 ―サムライたちのメキシコ― 』京都：京都国際マンガミュージアム。

牛窪襄 1960 『ガン平氏 ―まんがブラジル移民の一生― 』サンパウロ：私家本。

Oshiro Tomoko, Sokei Hisako and Hijirida Kyoko 2001 “Making Dynamic Instructional Material: Okinawa and Hawaiian Cultural Karuta.” 『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』6、東京：国際交流基金。

沖縄県観光商工部交流推進課・沖縄NGO活動推進協議会 2006『参加型学習教材「沖縄移民 ―知ろう世界のウチナーンチュ」』那覇：第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会。

「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会編 2009『まんが　クラスメートは外国人 ―多文化共生20の物語 ―』東京：明石書店。

国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館 2007 『海外移住資料館　学習活動の手引き＜改訂版＞』横浜：国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館。

酒井直樹 2012「レイシズム・スタディーズへの視座」鵜飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳著『レイシズム・スタディーズ序説』東京：以文社。

佐藤郡衛 1998「在日外国人児童・生徒の異文化適応とその教育」江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』東京：明石書店。

多文化共生教材プロジェクトチーム（ともいき教材グループ）編 2009『考えよう　ともに生きる浜松の未来 ―はままつ多文化共生教材― 』浜松：（財）浜松国際交流協会。

田渕五十生 2007「日本の教師教育と異文化間教育」『異文化間教育』25、京都：アカデミア出版会。

田尻信壹 2008「移民の経験をカルタに ―ケータイでカルタづくり教職科目で実践して― 」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。

（特活）沖縄NGOセンター 2012『参加型学習教材「CHAMPURREAND ―世界のウチナーンチュ発！多文化共生― 」（改訂版）』那覇：第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会。

トメアスー開拓五〇周年祭典委員会編 1985『トメアスー移住開拓五〇周年史　みどりの大地』パラー：トメアスー文化協会。

富山大学教育学部「ハワイ学」研究開発プロジェクトチーム編 2004『中学校・高等学校における

「総合的な学習の時間」の学習プログラムの開発 ―「ハワイ学」を通した日米理解の促進―』東京：国際交流基金日米センター（一般助成事業報告書）。
中山京子 2008a「移民学習を支える教材の開発」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。
中山京子 2008b「ブックトーク ―日系アメリカ人の経験を読もう―」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。
中山京子・森茂岳雄 2008「海外移住資料館における教員研修の意義と可能性」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。
日本移民80年史編纂委員会編 1991『ブラジル日本移民八十年史』サンパウロ：移民80年祭祭典委員会・ブラジル日本文化協会。
福山文子 2008「移民系博物館における教員研修のプログラム開発と評価」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。
藤崎康夫・山本耕二 1997『日本人移民 ―写真・絵画集（1）～（4）』東京：日本図書センター。
森茂岳雄 2008「日本人アメリカ移民・日系アメリカ人に関する参考図書・映画」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。
森茂岳雄・中山京子 2008「ハワイ日本文化センターの教育活動とアウトリーチ教材の開発」森茂岳雄・中山京子編（2008）所収。
森茂岳雄・中山京子 2011「移民学習論 ―多文化共生の実践にむけて―」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』東京：御茶の水書房。
森茂岳雄・中山京子編 2008『日系移民学習の理論と実践 ―グローバル教育と多文化教育をつなぐ―』東京：明石書店。

付　録：「日本ーブラジル移民カルタ」一覧表

ここでは、50 音順に移民学習に関連する用語であるキーワード、要素、句（読み札）、日本語解説文、およびポルトガル語解説文を一覧にして提示する。

	キーワード（要素）	句（読み札）「日本語解説文」	ポルトガル語解説文
あ	アマゾン（努力･貢献）	**アマゾンで　森を守る　日系人** 「アマゾンでは、日系人が行う環境に優しい農業が注目されています。」	Na Amazônia, está chamando a atenção a agricultura ecológica praticada pelos nikkeis.
い	移住（知識･事実）	**移住とは　遠い土地に　移り住むこと** 「移住とは開拓・植民などのために、国内の他の地あるいは国外の地に移り住むことです。」	A migração é o deslocamento da população para outra região ou outro país, com o objetivo de exploração ou colonização.
う	運動会（生活･文化）	**運動会　船の上で　楽しんだ** 「初期の移民船の環境は悪く、船上で行われた運動会は、移住者にとってストレス発散の場でもありました。」	As condições dos primeiros navios de migrantes japoneses eram precárias, e a gincana esportiva *undokai* realizada durante a viagem era uma oportunidade para descontração.
え	エンシャーダ（努力･貢献）	**エンシャーダ　コーヒー園で　使います** 「エンシャーダは、開拓やコーヒー栽培で最も役立った農具のひとつです。除草に使いました。柄が鋭角なのが特徴です。」	A enxada foi uma das ferramentas mais úteis para o cultivo do café e a derrubada de matas. Era utilizada para capinar. Uma de suas características é formar um ângulo agudo em relação ao cabo.
お	沖縄（知識･事実）	**沖縄の　人々世界に　目を向けた** 「沖縄の人々は広く世界に目を向け、様々な国に移住しました。」	Os moradores de Okinawa tinham uma visão ampla voltada para o mundo, e migraram para vários países.
か	笠戸丸（知識･事実）	**笠戸丸　目指せサントス　海を行く** 「1908（明治41）年、笠戸丸は第1回契約移民781名を乗せてサントスへ向かいました。」	Em 1908, o navio Kasato-maru, que transportava 781 migrantes contratados, partiu rumo a Santos.
き	希望（移住者の思い：希望）	**希望を持ち　神戸のみなとへ　向かいます** 「神戸には1928（昭和3）年に国立移民収容所（現海外移住と文化の交流センター）が建てられました。移住者が日本を発つ直前の1週間から10日間をすごした建物です。」	Em 1928, foi inaugurado o Centro de Emigração de Kobe. Os migrantes permaneciam no Centro por um período entre uma semana e dez dias, antes de deixar o Japão.
く	苦労（教育）	**苦労して　子どもの教育　考えた** 「1930年代、ブラジルでは日本語（外国語）学校が閉鎖されるなど、外国文化は制限を受けました。」	Na década de 30, a difusão de algumas culturas estrangeiras foi reprimida no Brasil. Por exemplo, as escolas japonesas (estrangeiras) foram obrigadas a fechar suas portas.
け	経験（アイデンティティ）	**経験を　聞いてみたいな　祖父母から** 「身近な人に昔の経験をたずねてみましょう。新しい発見があるかもしれません。」	Vamos perguntar sobre experiências do passado para as pessoas ao nosso redor. Podemos descobrir coisas novas.

こ	コーヒー （努力･貢献）	**コーヒー園で　朝から晩まで　働いた** 「コーヒーは、植えて3年目から少しずつとれだし、5年目から本格的な収穫ができます。1920年代になると、車を買えるほどの成功者も出てきました。」	Um pé de café começa a produzir frutos em pequena quantidade no terceiro ano após o plantio, e a sua produção plena começa no quinto ano. Na década de 20, alguns japoneses já estavam bem-sucedidos e possuíam até um carro.
さ	サッカー （生活･文化）	**サッカーで　大活躍の　日系人** 「日本のプロサッカー界では、トゥーリオ（闘莉王）選手をはじめ、多くの日系人が活躍しています。」	No futebol profissional japonês, muitos nikkeis estão se destacando, dentre eles o jogador Túlio.
し	幸せ （移住者の思い：希望）	**幸せを　祈って船に　乗り込んだ** 「移住者はみな、幸せになることを祈りながら、船（移民船）に乗ったことでしょう。」	Todos os migrantes devem ter embarcado no navio (de migrantes), orando para que um dia encontrassem a felicidade.
す	相撲 （移住者の思い：望郷）	**相撲大会　遠い日本を　思い出す** 「相撲は、用具もいらず、場所もあまりとらないこともあり、　移住先でさかんに行われました。」	A luta de *sumo* era praticada com frequência nas colônias, pois não exigia ferramentas nem muito espaço.
せ	赤道祭 （生活･文化）	**赤道祭　海の上の　楽しい祭り** 「赤道祭とは、船が赤道を通過するときの祭りです。移住者は仮装などで楽しみました。」	O *Sekidosai* era um festival realizado quando o navio cruzava a linha do Equador. Os migrantes faziam festa, alguns chegando a usar fantasias.
そ	祖先 （生活･文化）	**祖先を思い　家族と行きます　お墓参り** 「お墓参りなどの日本の習慣は、日系の人々に今も引き継がれています。」	Um dos costumes japoneses, o de visitar o túmulo dos antepassados, é mantido pelos nikkeis até os dias de hoje.
た	多文化 （多文化共生･友好関係）	**多文化が　きっと日本を　豊かにする** 「様々な文化や考え方が、社会を豊かにすると言われています。」	Dizem que culturas e ideias diversificadas tornam a sociedade mais rica.
ち	力 （努力･貢献）	**力こめ　大地を耕し　実らせる** 「多くの移住者は、原始林の開拓など想像を超える大自然と向きあいました。」	Muitos migrantes depararam com uma natureza adversa, muito além da sua imaginação, enquanto desbravam a mata virgem.
つ	土 （努力･貢献）	**土を耕し　努力で　信頼つかんだよ** 「移住者は、『なにごとも辛抱、努力』と、大地に向き合い、信頼を得ました。ブラジルにはジャポネス　ガランチード（信頼できる日本人）という言葉があります。」	Os migrantes adquiriram a confiança dos brasileiros, trabalhando com seriedade no campo, com a ideia fixa de "Perseverar e se esforçar sempre". No Brasil, existe a expressão: "Japonês Garantido".
て	手紙 （移住者の思い：望郷）	**手紙がつなぐ　日本と　ブラジル** 「日本人移民の一世は、日本語で書かれた手紙を心待ちにしています。かつて、手紙はふるさとの様子を知る大切な手段でした。」	A primeira geração dos migrantes japoneses (issei) aguardava ansiosamente a chegada das cartas do Japão. Antigamente, a carta era um importante meio de receber as notícias da terra natal.

と	トラホーム （知識･事実）	**トラホーム　治れば海を　渡れます** 「トラホームは、目の伝染病です。トラホームにかかっていると移民船に乗ることができませんでした。」	O tracoma (conjuntivite granulosa) é uma doença contagiosa dos olhos. Quem tinha o tracoma não podia embarcar no navio de migrantes.
な	南米 （努力･貢献）	**南米に　こしょうの苗を　持ち込んだ** 「南米（アマゾン）にこしょうの苗を持ちこんだのは日本人です。1950年代にはこしょうの値段が上がり、『黒いダイヤ』と呼ばれました。」	Os japoneses introduziram a muda de pimenta-do-reino na América do Sul (Amazônia). Na década de 50, houve elevação no seu preço, e ela foi chamada de "diamante negro".
に	日本語学校 （教育）	**日本語学校　古い歴史が　あるんだよ** 「日本人は教育に熱心でした。移住地ができて2，3年も経つと日本語学校ができました。」	Os japoneses valorizavam muito a educação dos filhos. Dois ou três anos após a formação de uma comunidade, já surgia e escola japonesa.
ぬ	縫い針 （生活･文化）	**縫い針は　きっと役立つ　ブラジルで** 「移住者は、トランクに縫い針や辞書など、現地での暮らしに役立つと思うものを詰めていきました。」	Nas malas, os migrantes trouxeram utensílios como agulhas de costura e dicionários, que acreditavam ser úteis no dia a dia no Brasil.
ね	根を張る （多文化共生･友好関係）	**根を張って　日本に暮らす　日系人** 「たくさんのブラジル人が、日本の中で大切な役割を担っています。」	Muitos brasileiros desempenham papel importante dentro do Japão.
の	農業 （努力･貢献）	**農業は　大事な仕事だ　がんばった** 「ジュート、こしょう、ジャガイモ、トマト、果実、花の栽培など、日本人移民は生産規模を拡大するだけでなく、作物の多様化にも力を尽くし、農業分野で大きな貢献をしました。」	Os migrantes japoneses contribuíram para o desenvolvimento agrícola, não só aumentando a produção de juta, pimenta, batata, tomate, frutas, flores, etc., mas também exercendo papel fundamental na diversificação agrícola.
は	ハレ （文化変容）	**ハレの日の　食卓に並ぶ　二つの文化** 「ブラジルでは、結婚式などのおめでたい日には、よくお寿司を食べます。具や盛りつけに二つの文化があらわれています。」	No Brasil, é comum servirem *sushi* nas festas de casamento e em outros eventos comemorativos. A culinária dos dois países está presente tanto nos ingredientes como no arranjo dos pratos.
ひ	平野移住地 （知識･事実）	**平野移住地　苦難をこえて　続いています** 「1916（大正5）年以降、マラリア、イナゴ、干ばつが次々と平野移住地を襲いましたが、乗り越えました。」	Desde 1916, a Colônia Hirano foi vítima de epidemia de malária, ataque de gafanhotos e seca, mas conseguiu superar todas as adversidades.
ふ	ブラジル （アイデンティティ）	**ブラジルも　日本も私の　大切な国** 「日本にも、複数の国にルーツをもつ子どもたちが増えています。」	No Japão também, tem aumentando o número de crianças de origem estrangeira.
へ	平和 （移住者の思い：平和･幸福、生活･文化）	**平和な日　幸せいっぱい　笑顔です** 「ブラジルでの結婚式で配られたおみやげです。ついている折り鶴は、花嫁さんの手作りです。」	É uma lembrança distribuída em uma festa de casamento realizada no Brasil. O origami de *tsuru* (grou) foi feito manualmente pela noiva.

ほ	邦字新聞 （苦労：差別偏見を含む）	**邦字新聞　読めない時代が　ありました** 「1941（昭和16）年から1947（昭和22）年まで、コロニアにおける邦字新聞は禁止されました。」	Entre 1941 e 1947, foi proibida a publicação de jornais em japonês destinados aos migrantes.
ま	マラリア （苦労）	**マラリアで　たくさん人が　亡くなりました** 「マラリアは蚊が媒介する感染症です。移住地では、この病気でたくさんの人が亡くなりました。」	A malária é uma doença contagiosa transmitida pelo mosquito. Nas colônias, muitas pessoas morreram por causa desta doença.
み	港 （移住者の思い：惜別）	**港から　見送る人も　つらかった** 「かつてブラジルまでは、船で1か月以上もかかりました。一生の別れになることを覚悟した人もいたことでしょう。」	Antigamente, a viagem ao Brasil era feita de navio, e demorava mais de um mês. Muitas pessoas se despediram de seus entes achando que nunca mais voltariam a revê-los.
む	村づくり （努力·貢献）	**村づくり　定住目指した　アリアンサ** 「アリアンサ移住地は、永住目的の移住地として誕生しました。」	A Colônia Aliança foi fundada para ser um local onde os migrantes pudessem fixar residência.
め	メリケン波止場 （移住者の思い：望郷）	**メリケン波止場　遠い国で　思い出す** 「神戸のメリケン波止場（メリケンとはAmericanの意味。アメリカからの船など外国船が出入りする波止場や、アメリカ関係の建物などが近くにある波止場はメリケン波止場と呼ばれました）の近くには、「移民宿」といわれる、海外へ渡っていく移民の宿泊施設がありました。」	Havia uma instalação conhecida como *Imin yado* (Hospedaria para Emigrantes), onde se hospedavam as pessoas que migrariam para o exterior, perto do Cais Meriken de Kobe ("Meriken" vem do inglês *American*. Deu-se este nome porque muitos navios estrangeiros, entre eles americanos, atracavam neste cais, e também porque haviam prédios relacionados aos Estados Unidos por perto).
も	もちつき （文化変容）	**もちつきで　暑い正月　迎えます** 「もちつきとは、もち米を蒸し、臼でついてもちを作ることです。正月など祝事に多くつきます。日本ではお正月は冬ですが、ブラジルでは季節が逆になり、夏となります。」	*Motitsuki* é o ato de fazer o doce moti,　socando no pilão a massa de motigome (arroz glutinoso) cozido em banho-maria. Geralmente é feito no ano novo ou em datas comemorativas. No Japão, o ano novo é no inverno, enquanto no Brasil, como as estações se invertem, é no verão.
や	柳行李 （生活·文化）	**柳行李　トランクにもなり　ゆりかごにもなり** 「移住者が荷物をつめた柳行李は、移住先ではゆりかごとしても役立ちました。」	O cesto feito de varas de salgueiro *(yanagigori)*, utilizado como mala pelos migrantes, servia também de berço para bebês.
ゆ	夢 （移住者の思い：希望）	**夢と勇気　胸に抱いて　ブラジルへ** 「内務省は、1920年代にはいると人口問題、失業問題などの対策として、渡航費手数料の負担や、渡航費の補助を行いました。」	Na década de 20, o Ministério do Interior do Japão passou a subsidiar a passagem e a fornecer auxílio para as despesas de viagem dos migrantes, como medida para combater os problemas populacionais e desemprego.

よ	横浜 （知識･事実）	横浜発の　最後の船（移民船）は「にっぽん丸」 「1973年、にっぽん丸は船による最後の移住者を乗せて横浜を出航しました。」	Em 1973, o navio Nippon-maru, que transportou os últimos migrantes a viajar de navio, partiu do porto de Yokohama.
ら	落書き （移住者の思い：不安）	落書きに　不安と希望を　感じます 「海外移住と文化の交流センターには、旅立つ前に移住者が書き残した落書きが今も残っています。」	No Centro de Emigração e Intercâmbio Cultural de Kobe, ainda hoje restam os rabiscos que os migrantes deixaram antes de partir.
り	リベルダーデ （生活･文化）	リベルダーデ　大きな鳥居が　たっています 「サンパウロのリベルダーデには大きな鳥居が建っています。東洋人が多く集まるところです。」	Em São Paulo, no Bairro da Liberdade, há um enorme portal (*torii*). No bairro se reúnem muitos orientais.
る	ルーツ （アイデンティティ）	ルーツをたどると　もっと自分がみえてくる 「ルーツとは英語のrootsのことで、祖先や起源という意味です。ルーツをたどることで、自分自身をより深く理解することができるかもしれません。」	A palavra *rutsu* vem do inglês roots (*raízes*), e significa antepassado ou origem. Conhecendo as nossas raízes, podemos nos conhecer melhor.
れ	歴史 （多文化共生･友好関係）	歴史から　きっと未来が　みえてくる 「かつてブラジルが多くの日本人を受け入れたように、日本も現在たくさんのブラジル人を受け入れています。共に協力して暮らすことが求められています。」	Da mesma forma como o Brasil acolheu os japoneses no passado, o Japão acolhe hoje muitos brasileiros. Precisamos viver colaborando mutuamente.
ろ	労働 （努力･貢献）	労働の　あとの収穫　うれしいな 「子どもたちも畑仕事を手伝いました。収穫の時は、とてもうれしかったです。」	As crianças também ajudavam na lavoura. Colheita era uma época que trazia muita alegria.
わ	わたし （アイデンティティ）	わたしはサンドラ　ブラジル生まれの日系人 「現在日本には、たくさんのブラジル生まれの日系人が暮らしています。多くの人が、日本とブラジルのかけ橋として活躍しています。」	No Japão, vivem atualmente muitos nikkeis que nasceram no Brasil. Muitos deles se destacam atuando como ponte de ligação entre o Japão e o Brasil.
を	（ジョーカー）	六代が　多文化社会を　生きてきた 「150万人ともいわれるブラジル日系人社会では、すでに六世が生まれています。日本人移民とその子孫は、100年以上にわたりブラジル多文化社会を生きてきました。」	Na sociedade nikkei do Brasil, com cerca de 1,5 milhões de pessoas, já nasceram descendentes de sexta geração. Os migrantes japoneses e os seus descendentes vivem na sociedade multicultural brasileira por mais de cem anos.
ん	（ジョーカー）	2008年　ブラジル移民　百年祭 「2008（平成20）年は、ブラジル行きの第1回移民船出港から100年目の年でした。ブラジルと日本の各地で記念行事が行われました。」	Em 2008, completaram-se 100 anos desde a partida do primeiro navio de migrantes rumo ao Brasil. Foram realizados eventos comemorativos em várias regiões do Brasil e do Japão.

Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (I): Development of "Nihon-Burajiru Imin Karuta" as a Teaching Material for Migration Studies

Takeo Morimo (Chuo University)
Kyoko Nakayama (Teikyo University)
Ayako Fukuyama (The Association of Nikkei and Japanese Abroad)

Nowadays, students speaking Portuguese form the largest group of students of cultural diversity here in Japan. This is due to the historical background of Japanese emigrants to Brazil.

It has been stressed ever since that an important point in educational assistance to Japanese-Brazilian students here is to teach them the Japanese language. Moreover, not enough focus has been placed on allowing these students understand their own history and culture, knowledge that may help them in developing their identity. Therefore, the authors developed "Nihon-Burajiru Imin Karuta", which could allow Japanese-Brazilian students learn not only the Japanese-language, but also help enhance the development of their identity, and on the other hand make the local Japanese students understand their history and culture.

In the first chapter of this paper, the authors chose a teaching material called "Karuta" (cards) which is beneficial for both Japanese-Brazilian students and the local Japanese students. Also, the development process of "Nihon-Burajiru Imin Karuta" was presented, together with its educational features and significance for migration studies.

In the second chapter of this paper, the authors revealed the practical value of "Karuta" as an educational material for migration studies by analyzing its various usages. In addition, some viewpoints to improve "Nihon-Burajiru Imin Karuta" were also presented.

Keywords: Educational Material for Migration Studies, Imin Karuta, Japanese, Emigrants to Brazil, Japanese-Brazilian Students, Japanese as a Heritage Language

日系移民学習の教材開発と実践（Ⅱ）
―「日本－ブラジル移民カルタ」を用いた実践 ―

服部圭子（近畿大学・准教授）
大舩ちさと（国際交流基金マニラ日本文化センター・日本語教育アドバイザー）
中山京子（帝京大学・准教授）
スエナガ サンドラ テルミ（元群馬県太田市立太田小学校バイリンガル教員）

＜目　次＞

序　「日本－ブラジル移民カルタ」を用いた教育実践にむけて
1.　日本とブラジルをつなぐ教材
2.　「日本－ブラジル移民カルタ」の活用法：日本語教育の視点から
3.　大学授業における実践 ―「移民カルタ」と「日本－ブラジル移民カルタ」の比較から「神奈川多文化共生カルタ」づくりへ ―
4.　地域日本語活動における実践の可能性
5.　ブラジルの日本語学校における実践
6.　フィリピン日系人会インターナショナルスクールにおける実践
結語　「日本－ブラジル移民カルタ」活用の普及にむけて

キーワード：日系ブラジル人、日本語教育、アイデンティティ形成、ルーツ、カルタ教材、多文化共生

序　―「日本ーブラジル移民カルタ」を用いた教育実践にむけて

近年のグローバル化に伴い多言語・多文化化する日本社会において、ポルトガル語を第一言語とする外国人児童生徒数が増加している。そのような中、多文化共生にむけた教育実践を念頭に「移民カルタ」（JICA 横浜海外移住資料館）が開発された。その成果と課題を元に、日系ブラジル人にテーマを絞り、日本語学習にも活用しやすい教材を目指して「日本－ブラジル移民カルタ」を開発した経緯[1]は本紀要同号「日系移民学習の教材開発と実践（Ⅰ）」でも述べられている。つまり、「移民カルタ」は一般的な使用者を想定した歴史学習教材であったため、生活言語としての日本語学習者および継承語としての日本語学習者にとっては難しいものであった。そこで同カルタを利用した日系ブラジル人が、日本語学習にも活用でき、かつ自分たちのルーツを扱ったカルタ教材を希望したことを契機に「日本－ブラジル移民カルタ」の開発を始めたのである。その射程は、①在伯の日系ブラジル人の子どもたちの継承語としての日本語および文化学習、②滞日する日系ブラジル人の子どもたちの第二言語としての日本語学習および母語維持としてのポルトガル語学習、さらには③日本人の子どもたちの歴史・文化学習である。

本稿では、まず、日系ブラジル人のための教材の必要性とその理念について述べ、また語学教材としてのカルタの有用性について述べる。そして、「日本－ブラジル移民カルタ」教材の特徴について言及し、開発時に想定したモデル使用案を紹介した上で、日本語学習だけに限らず、さまざまな教育や活動の現場でのカルタ教材の実践例について報告する。　（服部・大舩）

1. 日本とブラジルをつなぐ教材

1.1 教材の必要性

日系ブラジル人に関する調査・研究には、共生社会を目指す日本における課題という視点からのものや（渡辺 1995ab、鐘ヶ江 2001、小内･酒井 2001、山本 2011 他）、学校現場におけるニューカマーの名前や教育の観点からのもの（ハタノ 2009、志水・清水 2001 他）、ブラジル日系移民社会における言語接触の実態を扱ったもの（工藤他 2009）などさまざまな研究が存在する。言語学習だけでなく、日系ブラジル人のアイデンティティや祖先の文化・歴史学習の課題も指摘されている。例えば、広島県東部地域で日系ブラジル人のコミュニケーションについて、「教会」「家庭」「学校」「地域社会」「職場」の五つのドメイン（領域）で行われたフィールド調査によると、家庭内では母語保持に対する親や子どもの希望があり、職場では日本語学習機会の増加を期待する声があった。しかし、「祖先の文化」に対する思いの強さも浮き彫りにされる一方で、ブラジルの文化や言語を学ぶ機会が十分に提供されていないことが、結局、日本永住以外の選択を阻んでいるという指摘もあった[2]。また、小島（2012）は、異文化間教育学会第 33 回大会 2012 年度特定課題研究「ルーツからルートへ：ニューカマーの子どもたちの今」で、学校から離脱する外国人の子どもたちの増加が可視化されるようになってきたが、その背後にはことばやアイデンティティの問題があることを指摘した。そして、当事者自身が自らのトランジション過程をどのようなものとして生きているかに注目し、自前の「自立」のコンテクストやモデル構築を試みることが大切であると述べた。

宮島（2003：136-140）[3] もまた、母語保持がアイデンティティ形成および親子コミュニケーションの側面で重要であることを述べ、社会が「母語を奪う」ことの課題を指摘している。このように、言語の学習と学習者自身のアイデンティティの形成を支援することは切り離せないものであるにもかかわらず、その双方を支える教材の開発は多くは進んでいないのが現状である。

1.2 カルタ教材

カルタとは日本で昔から親しまれているカードゲームであり、読み人によって読まれた内容に合う絵札を取るゲームである。日本古来の貝殻合わせとヨーロッパから伝わったカードゲームが融合されて、江戸時代に今とほぼ同じ形式になったと言われており、子どもから大人までグループで楽しめるカードゲームとして数多くの種類が存在する。語学学習の観点から見ても、絵札を取るために読み句を積極的に聞き、絵札に書かれた文字を探して取るという行為で反応すること、読み上げられた語句の理解が絵札の写真やイラストから媒介語を介さずに促進されること、繰り返し同じ語句を学習する機会が提供されることなど、有効性が高い[4]。

日本語教育の分野で開発されたカルタ教材としては、草分け的存在の「日本語カルタ」（水谷 1988）のほか、大宮市立教育研究所と大宮市国際理解教育研究協議会が共同で開発した外国人児童・生徒対象の「たのしいこどものにほんごかるた」（2000）[5] などが挙げられる。両者共に日本語学習のために開発されたカルタであり、濁音及び半濁音の札の存在や日本の生活や学校文化への適応をサポートするための語彙や表現を取り入れるといった配慮が見られる。文化学習と言語学習の両者を目標に掲げたものとしては、「沖縄ハワイ文化カルタ」（Oshiro et al. 2001）が挙げられる。これは、沖縄ハワイ移民 100 周年を記念して制作されたカルタで、沖縄及びハワイで日本語を学ぶ学習者が、それぞれの地域の文化や言語（方言）について学ぶ機会を提供している。そして、学習者がその地域についての知見を深め、地域コミュニティとのコミュニケーションを活性化させ、コミュニティとのつながりを深化させることが目指されている。沖縄カルタはひらがなの語から始まる読み句、

ハワイカルタはカタカナの語から始まる読み句がつけられており、抽出された沖縄の社会文化及び言語にまつわるキーワード、ハワイの社会文化及び言語にまつわるキーワードが読み句の中に散りばめられている。絵札の裏には読み句の英訳があり、その下に日本語で補足解説がつけられている。中上級の日本語学習者はこの補足解説を読むことで日本語学習が進められるように制作されている。

このように、カルタは初級から上級レベルの幅広い層の学習者に有効な教材であり、絵札で視覚的にもさまざまな情報を提供することのできる、多くの可能性を秘めた教材であるということができる。つまり、前段で指摘したとおり、日系ブラジル人の支援として必要とされる言語学習とアイデンティティ形成の双方を支える教材として、カルタという形態は非常に適しているということができる。

1.3 「日本ーブラジル移民カルタ」の開発理念

「日本－ブラジル移民カルタ」の開発にあたっては、移民研究者、教育の専門家、日本語教育専門家、日系ブラジル人のバイリンガル教員によって構成された研究チームで議論を重ね、語学学習のみならず、歴史や文化保持・変容を学び、民族的アイデンティティを高めることを意図した教材の実現を目指した。そのことにより、日系ブラジル人の子どもたちが自らのルーツを知り、誇りを持ち、そのルーツについて語ることばを持つことを支えると同時に、多言語・多文化化する日本においてホスト役となる日本人の子どもたちがクラスメートの文化的背景を尊重する態度を養うことも視野に入れた。

そこで、開発の際には日本とブラジル両国に関連した「移住者の思い」「努力･貢献」「多文化共生･友好関係」「生活・文化」「教育」「知識・事実」「アイデンティティ」「文化変容」「苦労」の９分野を抽出し、多様な視点から日系ブラジル人の歴史を捉えるよう配慮した。絵札の裏にはポルトガル語で背景説明を加えて情報の量と質を高める工夫をしている。（大舩・服部）

2. 「日本ーブラジル移民カルタ」の活用法：日本語教育の視点から

2.1 「日本ーブラジル移民カルタ」の特徴

ここでは開発時に想定した、日本語学習の側面からのさまざまな活用例について紹介する。カルタに添えた「使い方の手引き」にも掲載したが、本教材の開発においては、入門レベルから上級レベルまで多様なレベルの学習者の日本語学習を支えられるよう配慮した。例えば、読み札のキーワードを太字にすることで際立たせ、キーワードのみでも遊べるよう配慮することで、文字学習を終えたばかりのレベルの学習者でも使用を可能とした。また、中上級であれば、読み句をそのまま使った通常のカルタゲームを行い、読み句の日本語の表現を用いて、さまざまな学習活動を行うことが可能である。また、絵札の裏にある解説を日本語で読むことに挑戦することもできる。解説にはルビがふられていないので、漢字の読み方を調べて学ぶといった活動に発展させることも考えられよう。表現形式や語句だけに注目した学習ではなく、絵札や読み句の内容をトピックに、内容重視の言語学習活動を行うことも可能である。また、上述のとおり、読み句の作成時には上述の９分野からのキーワードが取り入れられているため、学習者は教科書では学ぶことのできない自らのルーツを語るために必要なことばを学ぶことができる。次節からは、開発時に想定した具体的なモデル活用例を紹介する。

2.2　モデル活用例：内容重視の学習

①キーワード・カルタ

通常のカルタと同様の遊び方だが、読み札のキーワードだけを読み上げるスタイルで行う。よって、文字学習を終えた段階であれば、だれでも楽しむことが可能である。まず、15 枚程度の札を選び、教師がキーワードを読み上げる。学習者はキーワードを聞き、カードを取得し、いちばん多くのカードを取得した学習者が最初の勝者となる。次に学習者に取得したカードの写真を観察するよう指示を出す。そして、何の写真か、いつ、どこで撮影された写真だと思うかといった問いかけをし、そのカードのキーワードを覚えているかを問う。学習者の反応を聞いてから、教師はカードを机の上に出すように言い、2 回目はキーワードの意味を推測しながらゲームを楽しむ。ゲームの途中で、あるいはゲーム終了後に各キーワード、その意味について学び、その背景情報について、絵札の裏にある解説などを使って、学習者の第一言語で理解を深める。

選ぶカードによって、ゲーム後に日本語を使って情報を伝えるアクティビティにつなげることも可能である。例えば、「う：運動会」、「サ：サッカー」、「す：相撲」、「せ：赤道際」といった行事にかかわるカードを選び、通常のカルタの要領でゲームを行い、日本人移民が楽しんだ活動や、現在日系人が活躍する活動についてなどの背景情報を第一言語で学ぶ。その後、自分たちの学校や町にはどのような行事があるか、その行事はいつ行われるかといった問いかけをし、「9 月に運動会があります」、「2 月にカーニバルがあります」のように自分たちの生活に関連する情報を日本語で表現する活動を行うこともできる。行事名はポルトガル語のままでもかまわない。

②「ブラジル生まれの日系人」（読み句の活用1）

まず、「け」「サ」「て」「わ」の絵札を選び、その写真に写っている人たちについて、学習者に想像させる（ポルトガル語可）。その後、学習者の日本語のレベルによって、キーワードのみ、あるいは読み句全文を使って、通常のカルタの要領でゲームを行う。その後、「わ」の読み札の文章を取り上げ、「わたしはサンドラ。ブラジル生まれの日系人」という表現に注目させ、名前と出身地を自分の情報に置き換え、自己紹介の練習をする。自己紹介なので、文末に「です」をつけさせ、「わたしはマリアです。ブラジリア生まれの日系人です」のように言わせる。学習者のレベルに応じて、家族の紹介などのトピックを追加して、自らについて語る活動に発展させることもできよう。

③「大活躍の○○くん／さん」（読み句の活用2）

上述の「ブラジル生まれの日系人」と同様に、人物の写っているカードを何枚か選び、カルタゲームを行った後、「サ」のカードを取り上げ、「サッカーで大活躍の日系人」という表現に注目させる。その後、クラスメートの得意なことを探し、「運動会で大活躍のルーカス君（です）」のように褒めながら友人を紹介する活動に発展させる。生徒自身に写真を持参させる、あるいは学校で写真の印刷が可能であれば、それらのクラスメートの写真の下に、日本語で文章を書いて紹介するアクティビティにすることも可能である。

④ポルトガル語を学ぼう！（日本人生徒向け）

日本人児童･生徒の場合は、カルタで遊びながら、移民の歴史について学ぶことに加え、キーワードをポルトガル語で何と言うかを学ぶことができる。ポルトガル語を知ることにより、クラスや地域にいる日系ブラジル人とのつながりの深化が期待される。

2.3　モデル活用例：文字学習

絵札のみを用いて、文字学習の活動を行うことも可能である。例えば、バラバラにおいた絵札を50音順に並べ直す活動が考えられる。また、トランプの七並べと同様のルールを設定し、ゲーム性を持たせることもできる。絵札をグループメンバーに均等に配付し、い段のカードを持つメンバーがそのカードを机の上に順に並べる。その後、い段の文字を中心にその前後の文字のカードを所持していれば、カードを置いていく。「わ」「を」「ん」のカードを持っていれば、トランプのジョーカーのように使い、例えば、「う」のカードはないが、「ん」のカードと「え」のカードを所持している場合、「ん」のカードを「う」の位置に置いて、そして、「え」のカードを出す。いちばん早く、手持ちのカードが無くなった人が勝ち、最後に「わ」「を」「ん」のカードを所持している人が負けとなる。

このように、絵札を文字学習の教材として活用する場合には、活動を始める前にまず、絵札の中からカタカナのついている札を探させ、そのひらがなを付箋に書いて絵札の上に貼らせるとよい。「ブ」の札には「ふ」を書かせておくと、スムーズに進められよう。

以上、開発時に日本語学習の観点から想定したモデル活用例を挙げたが、時と場に応じて、より多様な活用の可能性があるものと考える。そこで、次章からは、日本語学習のための実践だけでなく、より多様な場での活用の可能性を探って行った実践例について報告する。　（大舩）

3.　大学授業における実践 ―「移民カルタ」と「日本ーブラジル移民カルタ」の比較から「神奈川多文化共生カルタ」づくりへ

3.1　二つのカルタの比較の目的と方法

カルタの制作意図、使用目的、内容の違いによって、それぞれのカルタのよさと課題がある。制作者の意図や効果などは、実際に使用し、感想を集約してはじめて見えてくることが多い。そのため、「日本−ブラジル移民カルタ」制作では、試作と教育現場での仮使用を完成までのプロセスに組み込んでいる。ここでは、2011年度帝京大学春期科目「多言語多文化社会日本」（日本語教員養成課程の必須科目）のうち日系移民をテーマにした講義において、実際に学生がカルタを用いて学習をし、その感想を集め、改善の視点を抽出することとした。その方法として以下の手順をおこなった。

①筆者が制作に関わったJICA横浜海外移住資料館編「移民カルタ」と、カルタ研究会編「日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）を手にとって、グループで二つのカルタを自由に使う。
②ワークシートに、印象に残った句とその理由について、それぞれのカルタについて書き出す。
③移民カルタの句を自分でつくってみる。
④双方のカルタについて自由記述で感想を書く。

①の活動の前に、すでに学生は数回の授業において、日本人移民、日系人に関する概要を学んでいることから、カルタの内容について理解しやすい状態にある。しかし、初めて知ることも多く、新鮮な感覚は十分にあったようだ。②については、印象に残った句について聞くことによって、使用者がカルタから得る印象やポイントを把握しやすいと考えたことと、直接そのカルタの評価を聞くことよりも具体的な個別の考えを引き出すことができると想定した。③については、カルタ使用の感想を求めるだけでは、使用者の創造的な活動にはならないこと、また、カルタを使用した後につくる句において、制作者が整えた句よりもよいものが生まれる可能性があること、を考えた。④は率直な意見を聞くためである。90分の授業時間の中では受講者全員が④まで活動をすすめられた

わけではないが、カルタの再編集のための意見収集として役にたつコメントを得ることができた。ここでは、学生から出された感想を報告する。

3.2　JICA 横浜海外移住資料館編「移民カルタ」から印象に残った句と理由

以下に、JICA 横浜海外移住資料館編「移民カルタ」から印象に残った句と理由について、多く書かれた句を中心に紹介する。

表1：JICA横浜海外移住資料館編「移民カルタ」印象に残った句

1	礼儀こそ 日本の宝と 守り抜く	ハワイの日系人の中で、「オカゲサマデ」という日本語が今でも大切にされているということから。「イタダキマス」など外国の人が理解しづらい日本人特有の考え方をしっかり守っているところに誇りを感じた。
2	豊かさを つかんだ移民 数知れず	「ゆ」ではなく「を」を選ぶ言葉になっていた。「数知れず」となっているけれど、その陰にはそれ以上に夢破れた人びとがいるのだろうと思うと寂しい気持ちになった。
3	パスポート 江戸の昔は 筆書きだ	現在パスポートを利用している私にとって、この文章は面白かったです。さすが江戸幕府に今の機械化までは無理だとしても「鼻、高い方小さい方」などで表したのがパスポートだということに驚きました。
4	ミックスプレート お皿の上で 異文化理解	授業でミックスプレートのことを学んだことがあり、「これだ！」と思ったのが選んだ理由です。いろんな国の人たちがおかずを交換して、一皿の上にいろいろな国の料理が乗っている文化というのは、さまざまな地域の人が働いているハワイ特有のもので、食文化を通して交流することはすばらしいことだと思いました。
5	隣の子 ブラジルからの 転校生	この句とカルタの写真を見て、「自分の隣にブラジルの子が来た」ということを自慢しているような雰囲気で、とてもいい環境だと思いました。異文化の子、外国から来た子を迎え入れる気持ちをみんなにもってほしいと思いました。
6	阿波踊り ブラジル風は サンバかな	移民というと苦しい思いをしたことや成功したり、そうでなかったりということが主に言われていますが、その中でも楽しみを大切にしていたのだと感じられました。
7	しあわせと 夢を求めて 新世界	移住するときは幸せと夢を求めて行って、当然多くの不安があったと思う。言葉の壁、食文化の違い、挑戦した人たちのおかげで今の何世にもつながっているんだと思った。
8	洋館が たった噂が 村めぐり	日本に帰ってきたのになぜ洋館を建てたのか。「私は海外で成功した」というようなことのアピールなのかわからなかったが、周囲の人は「この人は成功者」なのだと刺激を受けて海外に行った人もいるので、すごい影響力であったと考える。
9	ルンルンルン 今日はのり巻 シュラスコだ	写真の料理がとってもおいしそうに見えて、食べてみたいと思った。母国の食べ物と移住先の食べ物を同じ食卓に出すというのは移民ならではだと思う。

10	キャベツの上 お刺身だけは 譲れない	日本食がなかなか手に入らない状況でも、代用品を使ってでも故郷の食事に触れようとしているところに「日本を愛している気持ち」を強く感じた。
11	ララ物資 移住者からの 贈り物	ララ物資という意味が分からず解説を読んで理解できたので印象に残った。移民した人たちは決して豊かな生活を送っていないのに、戦災にあった日本人を助けるために物資を送るというところに感動した。しかも、日本人という考えではなく、「仲間」と呼んでいるところがすごくよかった。
12	マラリアに 倒れた移民 数知れず	やはりマラリア等の病気がとても印象に残った。昔は今と違って治療方法はなかったのかが気になるし、昔の人はとても大変だったと思う。でもそういう移民した人たちがいたから昔の環境の悪い奥地でも今は過ごしやすい環境になっているのかな、と思った。
13	盆ダンス 常夏ハワイで 大人気	日本で行われている盆踊りが海外でも親しまれていることを知って嬉しかったのと、写真からとても楽しそうな雰囲気が出ていていいかなと思いました。

3.3　カルタ研究会編「日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）から印象に残った句と理由

カルタ研究会編「日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）から印象に残った句と理由について、多く書かれた句を中心に紹介する。

表2：カルタ研究会編「日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）から印象に残った句

1	2008年 ブラジル移民 百年祭	ブラジルに第一回の移民船出航から100年もたったとわかって驚いた。移民のことなどあまり考えたことがなかったので100年も前に政策として行われたのが不思議でした。驚きました。印象的でした。
2	苦労して 子どもの教育 考えた	1930年代、ブラジルでは日本語（外国語）学校が閉鎖されるなど外国文化は制限を受けた。そのような中でも子どものことを考えてあげていたのは、将来大人になって社会に出る子どもが困らないような工夫なのだと感じた。
3	ハレの日の 食卓に並ぶ 二つの文化	日本とブラジルの二つの食文化が一緒の食卓に並ぶというのは、二つの国が協力しているということの現れなのかなと思い選んだ。絵が印象的だった。
4	サッカーで 大活躍の 日系人	私の国を代表する人の中にも日系人の方がいることは、日本はたった一つ国の人の国ではなくて、いろいろな人がいる国なんだと思えたのがとても嬉しかったからです。
5	アマゾンで 森を守る 日系人	アマゾンの森を守っている人の中に日系人もいるという所が印象に残りました。日系人たちのおかげで今のアマゾンがあるのかな。自分にはできないことを日系人はやっていることを尊敬する。
6	幸せを 祈って船に 乗り込んだ	移民斡旋会社が移民する土地のことを楽園などと言って豊かな所と信じて船に乗り込んだけれど、実際は過酷な現実が待っていたんだなと思うと胸が痛んだ。

7	ブラジルも 日本も私の 大切な国	この句の解説にあるように様々な国にルーツを持っている子は増えているということを実感しています。これからもそのような子はさらに増えると考えますが、お互い文化を受け入れて楽しく生活していきたいです。
8	土に向かい 努力で信頼 つかんだよ	「何事も辛抱、努力」という言葉と大地に向き合っていたそうです。「ジャポネスガランチーノ」という「信頼できる日本人」という言葉があることを知りました。日本人は昔から真面目な人が多かったんだろうと感じました。
9	ルーツを たどると 自分がわかる	これを読んで、移民をした人たちに限らず、誰にでも当てはまる言葉だなと思った。だからこそ、自分のアイデンティティの確立のため、移民の人たちには大切なのかなと思った。
10	歴史から きっと未来が 見えてくる	かつてブラジルが多くの日本人を受け入れたように、日本でもブラジル人をたくさん受け入れていた。日本と他国が共に共存して暮らしていくことで様々な歴史や特徴が見えてくるのではないかと感じた。
11	根を張って 日本に暮らす 日系人	多くの日系ブラジル人は、現代も日本で重要なポストとして働いているということに納得したから。
12	トラホーム 治れば海を 渡れます	トラホームはどこかの場所のことかと思ったけれど、伝染病だとは思わなかった。トラホームというものを調べてみたいと思った。
13	労働の あとの収穫 嬉しいな	畑仕事は力も体力も必要で、とても大変だけれど自分たちが育てたものを収穫することの喜びや自分たちが育てたものがどれだけおいしいかも知っているので、共感してこれを選びました。どんなことも頑張れば報われるとう意味も感じました。

3.4　二つのカルタの比較

以下に二つのカルタを比較したコメントをあげる。

「移民カルタ」のよい点＜＋点＞

・めくった裏にすぐ説明がありすぐに調べられ、説明もわかりやすい。
・句の完成度が高く、盆踊り、蓄音機などの文化面も細かく触れていて多くを学べると思った。
・文章を聞き、写真を見ていろいろ考えさせられる感じがした。率直でなおかつ曖昧な意見ですが、もう一つのかるたよりもうわてである気がした。
・生活感が出ていて移民先でも頑張ろうという気持ちが伝わってくるものだった。悲しいものもあるが全体的に文化を紹介した説明が詳しくてよかった。
・中学生から大学生にとってはこちらのカルタの方が使いやすいと思う。カルタに使われている単語の意味が分からなくても詳しく説明が載っているので、知識がなくてもある程度感じが読める中学生以上はこちらの方がよいと思う。
・「学習」するのに適している。
・箱の中にパンフレットが入っていてよかった。

「移民カルタ」の課題点＜－点＞

・文字が細かくて見づらい。

・内容が難しいものもあるので、もう一つのカルタをしてからの方がよいと思う。

「日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）のよい点＜＋点＞

・短い言葉で要点だけを端的に伝えている。
・ポルトガル語で、日本語が上手くなくても読める。
・移民についてまったく知らない人がすると、少し移民のことがわかり、導入に向いている。句のレベルが小学生低学年のように感じた。
・日系人、または子どもでまだ日本語をうまく読むことが出来ない子どもが遊ぶ場合はこちらのカルタがよい。平仮名で書いてあって読みやすく、文字数も少ないので。
・移民の歴史を知らない人がカルタをするのなら、内容がシンプルなこちらのカルタがよい。
・移民した人びとが経験した問題点や移民する際の情景などを思い浮かぶことが出来てリアルに感じることが出来た。移民した人びとの苦労や実態を初めて知る人にはすぐに理解できるのではないかと思った。人びとの発言したことがそのままカルタにされているような感じでよい。
・初めて日本語を学習する人にとっては文章も内容も易しいと思うのでよい。話題が少し現代に近いので、親しみやすい。特にサッカーの闘莉王など。

「日本−ブラジル移民カルタ」（試作版）の課題点＜－点＞

・言葉に細かい説明がないため、興味を持った言葉があっても、よくわからないまま終わってしまう。細かく調べられる冊子がついていると便利。
・全体的に暗い気がする。トラホームとい伝染病の子どもの写真などあったりして、悲しい気持ちになった。
・情報が少ないので、移民の知識がないと理解できないものもあった。
・日本で生活しかしていない人にとって建物の写真などはよくわからない。食べ物や人の表情などが移っている写真はわかりやすい。

両カルタについて

・移民をしてよかったことなどをもっと入れてほしい。移民をすることは辛いし楽しくないものだと思ってしまう。

こうしたコメントを「日本－ブラジル移民カルタ」改訂版に反映させるようにした。特に「日本－ブラジル移民カルタ」は学んだ結果、「暗い」「悲しい気持ちになる」「移民は辛く楽しくないもの」という印象が残ってしまうという意見をもとに、文言の修正、写真の差し替え、カルタ全体の色づかいになどについて再検討を加えた。

3.5 「神奈川多文化共生カルタ」づくりへ

2012 年度の同授業では、移民の歴史、日本国内の日系人の様子と日本社会の問題を学んだ後、二つのカルタを体験し、オリジナルの「移民カルタ」もしくは「多文化共生カルタ」の製作を試みた。本学の学生は東京、神奈川在住の学生が多く、神奈川在住の学生 14 名（含む中国人留学生）で「神奈川多文化共生カルタ」を作成した。移民に関する句としては以下のものが作られた。

海原を　進んで行った　日本丸
永住を　したくなる町　つくろうよ
沖縄区と　呼ばれる場所が　鶴見区に
鶴見区に　たくさん住んでる　ニューカマー

日系人　尊敬抱く　二宮さん
平塚に　いながらにして　ブラジルへ
プロサッカー　ペルー出身江陽卒　ロメロさん
ボリビアを　食すは横内　クレマカンバ
ルーツ知る　日系人の　資料館
移住船　経験あった　氷川丸

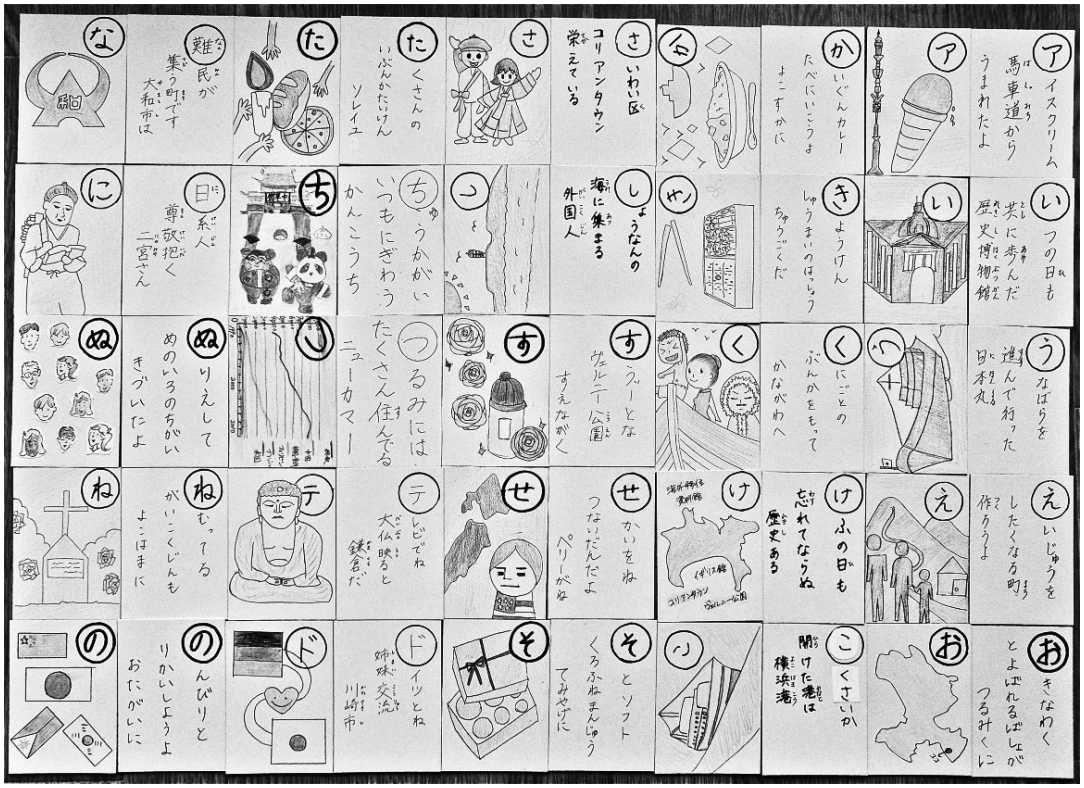


写真1：学生が作成した「神奈川多文化共生カルタ」あ行～な行

カルタづくりを通して学生同士交流をもち、地域の多文化社会に理解を深め、カルタとして全体のバランスを考えながら句を選定することができた。カルタ作りの活動は、カルタの製作だけを行うのではなく、事前学習として視野を広げ知識を増やすことも必要である。また、日本語を母語としない留学生と「ことば」を考えながら活動をすることで、「言語への気づき」が深まっていく様子が留学生にも日本人学生にも見られた。そうした学びがあるからこそ、カルタづくりが楽しく、また主体的に取り組むことができる。作られたカルタを他のチームの人が遊べば、そこにまた新しい学びが生まれる。

事前に学び、さらにカルタで学び、カルタで交流し、カルタをつくり視野を広げる、というサイクルが効果的な学習活動であろう。（中山）

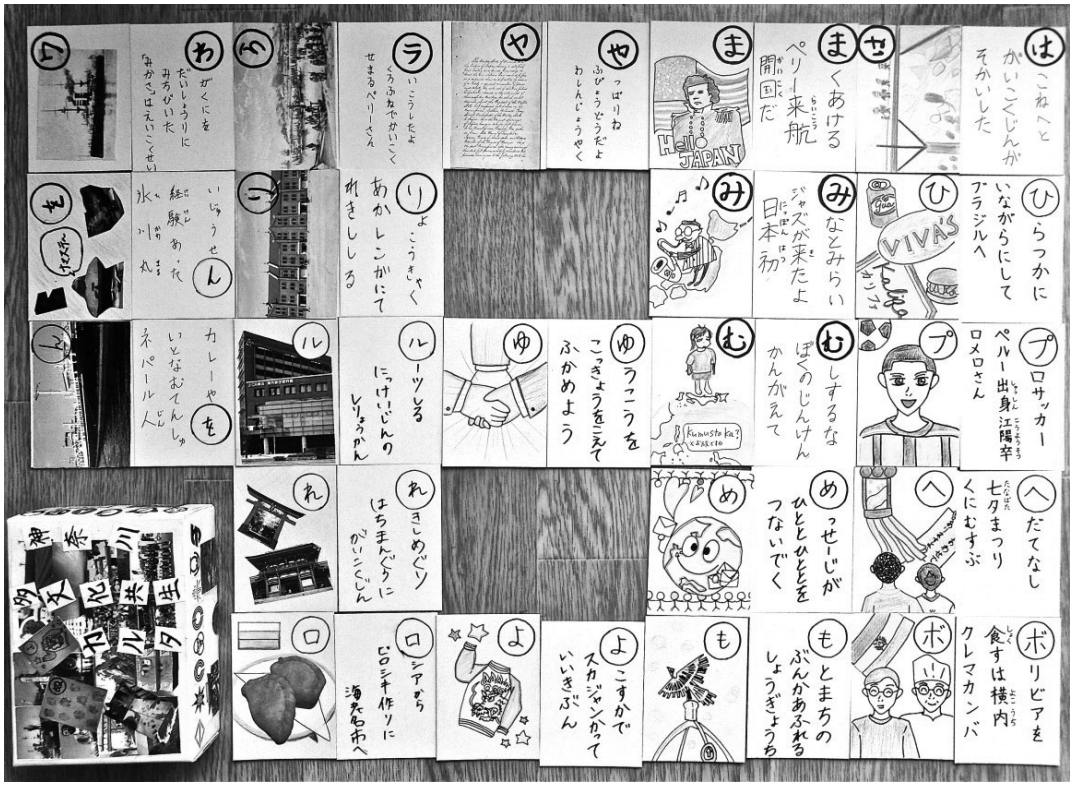


写真2：学生が作成した「神奈川多文化共生カルタ」は行～ん

4.　地域日本語活動における実践の可能性

4.1　カルタ実施の対象と方法

日本で生活者として滞在する外国人のための学習支援・生活支援の活動が全国的に展開している。大阪府岸和田市においても、国際親善協会による「日本語サロン」が毎週、市内５箇所で開催され、外国人住民と日本人ボランティアが日本語学習や日本語を通じた活動を行なっている。それらの活動に参加を希望する者は、事前に２年間の「日本語指導者養成講座」を受講しており、地域における日本語教育や日本語ボランティア活動についての基本知識を学んでいる。この講座で「日本－ブラジル移民カルタ」実践を行うことにより、近い将来地域の日本語活動に関わる人々が、多文化社会の一構成員である日系ブラジル人の背景知識を得るとともに、日本語学習・ポルトガル語維持の課題などについて考える機会を提供できるのではないかと考えた。

写真3：カルタ研究会編
『日本・ブラジル移民カルタ』（改訂版）

カルタ実践は、教材研究に関する講義を行った際に、一部の時間を利用して､2 度行った｡2011 年度のクラスでは｢日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）を利用し、2012 年度のクラスでは改訂版（写真 3）の「日本－ブラジル移民カルタ」を用いた。受講者たちにカルタを使ってみた感想を聞き、地域における日本語活動に参加する日系ブラジル人やその子どもたちを対象として利用することを想定した場

合に、どのように現場で活用できるかを考えてもらった。また、この実践で得た感想やコメント、日本語ボランティアとしての活用方法のアイデアなどを尋ねた。カルタ利用の後には、参考資料1に示したアンケートに記述してもらい、カルタの改善にも役立てた。実施概要および手順については、表3を参照されたい。なお、手順は、2011年度、2012年度のどちらも同じである。

既に講座の1年目に「外国人をめぐる諸問題：外国人の想いを知る」というテーマで、多文化化する日本に生活者として住む外国人の課題について触れていた。本実践は講座の2年目に行った。受講者たちは主に活動の模擬授業を行なっていたが、滞日外国人の課題について再び考える機会を持ち、課題解決の1つの方法として利用可能な「日本－ブラジル移民カルタ」（試作版）や「日本－ブラジル移民カルタ」（改訂版）を教材開発の事例として紹介した。カルタ実践の前に、日系ブラジル人の背景説明を行い、「読み物資料」[6]を利用して日系ブラジル人の想いに触れた。

表3：カルタ実践概要

目的	滞日外国人の課題について考える。日系ブラジル人の移民の歴史、子どもたちの日本語学習や母語維持の問題も取り上げる。そして、カルタを使用して、実際の日本語ボランティア活動の現場でいかに利用できるかについて考える。
日時	2011年10月27日20:00～20:45、2012年9月20日 19:45～20:30
場所	岸和田市内
対象	日本語指導者養成講座受講生（日本語ボランティア）
参加人数	25名（2011年）、18名（2012年）
手順	①カルタを使用する前に、多言語・多文化社会における滞日外国人の課題について考える。 ②日本で生活する日系ブラジル人の子どもたちの日本語学習の問題、ポルトガル語維持の問題、学校現場での課題について説明する。 ③日系ブラジル人の歴史について話すとともに、ブラジルの日系ブラジル人の子どもたちの継承語としての日本語学習の課題について触れる。 ④日系ブラジル人へのインタビューをもとに作成した「読み物資料」を配布する。その中から1つ選んで読み、グループの他のメンバーに自分が読んだ資料について説明し、感想を話しあう。 ⑤カルタの基本的な使い方の説明をする。 ⑥数人のグループで一人が読み札を読み上げ、他のメンバーはカードを取る。 ⑦各々のカルタの裏書をグループ内で読みあげ、内容を共有し感想を述べる。 ⑧カルタを終えて、カードの利用方法に関するアイデアを出しあったり、実際に試してみたりした後、アンケートに記入する。

4.2　印象に残った句と理由

表4では、カルタ利用後のアンケートで、「日本－ブラジル移民カルタ」の試作版およびその改訂版から印象に残った句とその理由について書かれたものを挙げる。特に1の「トラホーム　治れば海を　渡れます」は多くの者が印象に残ったと答えている。また2の「ハレの日の　食卓に並ぶ二つの文化」を選んだ者も複数おり、写真の色の鮮やかさだけではなくブラジルの日系人の食卓に表れるハイブリッド性が印象に残ったようである。

表4：印象に残った句とその理由

No.	印象に残った句	印象に残った理由
1	トラホーム 治れば海を 渡れます	トラホームという目の伝染病など、今では知らない言葉と当時の様子を知ったから。ドラマで家族のうち一人（子ども）だけがトラホームで家族と一緒にブラジルに行けなかったのを見たことがあり可哀想に思った。初めて聞いた言葉でした。
2	ハレの日の 食卓に並ぶ 二つの文化	ハイブリッドなお寿司が印象的だったから。 お寿司の中にオウムがいるのがおもしろい。
3	根を張って 日本に暮らす 日系人	日本での現在のブラジル人を表している。一生懸命溶け込もうとしている様子にじんときます。
4	ルーツをたどると 自分がわかる	移民には、人種差別があると思うので、ルーツ・自分が何者かを意識すると思うから。
5	日本語学校 古い歴史が あるんだよ	日本人の教育熱心さが勤勉で真面目な日本人を作ったことがよくわかる。
6	2008年 ブラジル移民 百年祭	移民から100年もたったとわかってびっくりした。
7	赤道祭 海の上の 楽しい祭り	自分では知り得ない、そんな体験をされたのかという印象です。
8	南米に こしょうの苗を 持ち込んだ	こしょうの苗をアマゾンに持ち込んだのが日本人だったというところ。こしょうは元々あったものだと思っていたので。
9	見る人も 送る人も 辛かった[7]	移住は一大決心だっただろうし、気持ちがよくわかります。移住者はみな、幸せになることを祈りながら移民船に乗ったことでしょう。風景が浮かんできます。その後の歴史を知るにつれ、移民前の気持ちが痛いほどわかります。
10	もちつきで 暑い正月 迎えます	季節が逆だったことをあらためて知った。
11	コーヒー園で 朝から晩まで 働いた	移住した人たちの苦労がしのばれるから。

これら以外にも、「落書きに　不安と希望を　感じます」「サッカーで　大活躍の　日系人」や「力こめ　大地を耕し　実らせる」という句から多くの移住者たちの気持ちを想像した者もいる。また、「平和な日　幸せ一杯　笑顔です」という句からは、平和を連想させる鶴の折り紙を見て「昔の考え方が残っていると思った」という感想を述べた者もいた。そして、「縫い針は　きっと役立つ　ブラジルで」という句をもとに、自分の知っている縫い物の知識を披露する機会になったと喜んだ参加

者もいたが、このようにカルタと実体験を結びつけて、日本語の活動現場で会話を拡げて行く視点は非常に大切であると考える。

4.3　カルタを使った感想やコメント

カルタを使ってみた感想には、純粋にカルタ遊びを楽しんだことに対する感想に加え、以下に紹介するように、日系ブラジル人の背景を学んだことに対するものや、日本語教育の観点からのコメントなどがあった。

①感想

まず、「日系人の苦労や感情を知ることができ、歴史の勉強にもなりました。日系移民について歴史的な学びの機会になると思います」「一緒に楽しめて、歴史にも目を向けられるので、教材としては良いものに思えます」など、歴史学習としての有効性に言及する意見が多かった。そして、「当時の日本人は根性があったと思います」「移民された方々は本当にご苦労されたようですね。時々、テレビでも見たりもしますが、今の私は幸せだと実感しました」「昔の苦労と汗を今懐かしく思い出し、喜びを一緒に分かち合うブラジル移民の姿が目に浮かびます」と、現代の自分たちと比較しつつ当時の苦労に思いを馳せているものもあった。それらは「実際の写真で実感」できたことにもよる。さらに、「古い歴史（移住の）から新しいトピック（サッカー選手）まで、どの年代の人でも参加できる」ことが良い点として挙げられていた。「大人が札を読むだけでも楽しい」「カルタに関する話題で会話がふくらみ、参加者の知識や考えを共有できて良いと思いました」「お手つきになったりすると笑顔がはじけます。取り札の説明があり、とても良い。読み札に漢字表記があり学習の進展にも役立つと思います」「作成は大変だったろうなと思いました」などの感想もあった。特に、「移民の人が身近におられたら、もっと色々と話してみたい」という意見は、日本人側の国際理解教育にも有効であることを示唆する貴重なものだと考える。

これらに加え、「写真はカルタいっぱいに大きくしたほうが、写真が見やすいのでは？」など、カルタの改善に関する具体的なコメントもあった。日本語養成講座の受講者の年齢層は学生から年配の方々まで幅広いが、その特徴も感想から窺えたといえる。

次に、アンケートの「もっと知りたいなと思ったことはどんなことですか。また、カルタが扱っている内容についてのコメントがあればお聞かせください」という問いに対して寄せられた意見を紹介する。

②もっと知りたいこと

受講者の一番の関心は、移民当時の状況であるようだ。「第二次大戦中の日系ブラジル人の様子」や「移民当時の大変なことをもっと知りたく思いました（原文ママ）」または「日系移民が胡椒を最初に持ち込んだのでしょうか」など、移民の歴史をもっと知りたいという声が出た。そして、「初代の日本人がブラジルに移住した当時の様子や暮らしぶり」や「結婚の様子」も知りたいし、「子どもの学校風景などもあれば良い」など、日系ブラジル人の実際の生活や文化、現地でのコミュニケーションなどについてのさらなる関心が示された。特に、「絵札で２つの文化の混ざったお寿司の写真がありましたが、そういうブラジル移民の文化を知りたいと思いました」「日本食材が手に入らない時はブラジル食材で代用した」のかなど、ブラジルに移住した人々の食文化への関心は強いようだった。また、「日系ブラジル人はブラジル社会でどのような立場に立っているのか。もちろん成功した人もいるが少数ではないかと思う」という社会での位置づけについての疑問やコメントもあった。

一方で、カルタを通して得た情報を契機に、自分たちの所属する地域の情報や具体的な行動に対する興味が出てきたことも窺える。コメント例としては、「関西の方でも、移住した人がいたのだろうかなど、考えてしまいました」「カルタのコメントについて、出来れば日系ブラジル人と話がしたい」などが挙げられる。

③カルタが扱っている内容についてのコメント

全般的には、扱っている内容や「読み札」の表記の問題などに触れていた。内容に関しては、「1世の話より、日本で活躍している３世の内容のほうが良いのではないか」「もう少し新しいトピックがあってもいいかもと思う。写真が古いので少々さみしげなので」と、現在の情報を取り入れたほうが良いという意見があった。そして、「『読み札』と写真・絵が、もう少しピタッとわかりやすいものであれば良い」「絵を見るとカルタの頭をさっと連想させるもの。日系ブラジル人なら、そうでなくてもわかるのでしょうかね」とのコメントも見られた。他方、「カルタは遊びの中でいろんなことが学べる。年齢に応じて、やさしいのから難しいのまで作れたらいいなと思う」「古い時代のことも書かれているので、その時代を全く知らない世代にもっと広がり知ってほしい」という期待を述べたものもあった。

表記などについては、「カタカナ・平仮名の頭文字が分けてあるので、カタカナの横にもその平仮名があってもいいかなと思った」「文化の違いを読み札で感じた。句読点がないと、読み方でかなり意味が変わってしまう」という意見に加えて、「『カルタ』の語呂・音韻等、もう少し洗練すれば」カルタ遊びの仲間入りができるというコメントもあった。具体的な句に関しては、「2008年　ブラジル移民　百年祭」の札は「ん」を扱ったものだが、「ん」が文頭にきていないので「に」と紛らわしいとのコメントもあった。語頭に置きにくい「ん」や「を」に関しては、議論の末、今回は太字表記で示したが、さらなる工夫が必要である。

最後に、内容に関する提案として、「カルタの中に年代を入れたほうが子どもの勉強になると思う」「日本の歴史も曖昧なところがあるので詳しい説明書があったらいい」という要望や、「同じように、日本文化、岸和田文化などをカルタに出来ればと思う」という前向きの意見も述べられた。ここでも、当該の地域とカルタを関連付けることへの気付きが起こっており、この発想を実際の活動現場で今後いかに発展させていけるかが期待できる。

4.4　地域日本語活動での利用方法に関する提案

上述のように、カルタ実践を行った講座は地域日本語活動のボランティア養成を目的としたものである。そこで、参考資料１の④にあるように、「このカルタは、日系ブラジル人児童・生徒（在ブラジル、日本）を対象として作られたものです。日本語活動の側面から、通常のカルタ以外の利用方法（日本語学習・ゲームなど）があればご提案ください。」という質問をして、現場での利用方法について考えてもらったところ、さまざまな側面からのアイデアが出された。

まず、具体的な使い方に関しては、「書いている内容を理解し、古いと思われる順に並べたり、地図を利用してカードを置いていくなど」や「カルタを引いて、引いた文字を使った文を自分で作る」「絵札と字札のセットをすばやく作る」などが挙げられていた。そして、今後の方向性として、日系の子どもたちにとっては「絵札のほうにポルトガル語と日本語の対訳が載っているので、普通の日本人のポルトガル語の勉強にも使えると思う」「日本で生まれ育った子どもたちに日系ブラジル人のことを勉強するのに使ってほしい」というコメントがあった。日本人にとっても、「ブラジルに限らず、移民した人たちの生活や苦労など、歴史の勉強にもなる」し、「ブラジルと日本との生活習慣の違い

などを一緒に学べるように使いたい」という意見もあった。

課題に関しては、「写真が最初の1語に当たっていると使い方が広がると思う」「食べ物札、人物札、景色札など、明確なジャンル分けがあると、坊主めくりのようにしたり、トランプのようなゲームの中に言葉を入れていけると思う」「子どもにとっては少々内容が難しいかも。小さい子どもには写真ではなく絵でも良いかも」という具体的な提案があった。

さらに、「実際知人の日系人の人に試してもらいたい」と、今後のカルタ活用の可能性に関わるコメントもあった。だが続いて、「ただ本人たちが日系であることや本人の存在について、どう思っているかがわからないので考え中」と、活動の現場以外で広く利用するためは、アイデンティティとも深く関わる課題に向き合う必要があることへの指摘もあった。ニューカマーの子どもたちの「ルーツ」ではなく、これまでに生きてきた「ルート」にも心を配って支援していくことの重要性も指摘されているが（ホール 1998）、これは重要な課題であるといえる。

別の機会に大学生にカルタ実践を行った際には、取ったカルタの頭文字を並べて知っている単語や文を作る遊びを楽しんでいた。当初は、日系ブラジル人の子どもたちを対象とすることを念頭に開発を始めたカルタであるが、子どもに限定せず広く利用する可能性もあるだろう。そして、日本語学習や継承語学習に加えて、ポルトガル語を学習する日本人を対象にしたり、本実践でも扱った地域日本語活動に関わるボランティア養成や、国際理解教育に関わる教員研修においても利用可能だと考える。

4.5　カルタのコンセプトに関するコメント

最後に、本カルタのキーワードだと思われることを挙げてもらったところ、次のようなキーワードが出された。なお、質問に答えやすいように、キーワードには、「学べること」「知れること」「楽しめること」などがあることを例示した。

> 歴史／日本人の移民の歴史／農業／世界／文化／成果／ブラジル日系の人たちの歴史・文化（ブラジルにこそ残されている日本文化）／苦労／日本人移住者の方々の苦労／祖先／日本人の優れた国民性／日本人の勤勉性・順応性／平仮名の確認／国際理解／楽しめる・楽しみ／知れること／話し合えること／考えられること／ふれること／思い起こすこと／興味を持つ／知るきっかけになる／新たな知識を得る／学べる／相手を知る／コミュニケーション／情報周知

以上のように、受講生たちが挙げたキーワードは、カルタ開発の折に想定したコンセプトを表す「移住者の思い」「努力・貢献」「生活・文化」「知識・事実」「苦労」などの要素と関連するものである。

4.6　今後に向けて

今回の実践は、多くの受講者が初めて知る情報に関心を示し、ブラジルへ移民した人々の想いを知り考える機会になった。また、カルタの活用方法を考える時間を設けることで、地域日本語活動の現場をこれまでとは異なる角度から想像し、活動現場の参加者との具体的な交流を想定するきっかけとなった。したがって、日本語ボランティア養成講座を対象とした実践としても意義のあるものになったといえる。時間制限もあったのでアンケート記入の後、十分な意見交換を行うまでには至らなかったのは残念だが、大人でも楽しめる教材であり、知識注入だけではなく地域日本語活動で重要な、外国人との「おしゃべり」[8]のきかっけ作りとしても有効であることが分かった。今回はカルタを楽しんでもらった上で意見や感想を述べ合ってもらったが、日系ブラジル人をテーマとし

て詳しく扱い、カルタの前に絵札や読み札を用いた予備学習を設定することもでき、今後研修用としても利用可能であると考える。様々な対象者に対して、ことばの学習だけではなく歴史・文化の学びの側面での発展も期待できる。受講者の中には、自分たちが住む地域のカルタづくりにも関心を示す者もいたので、今後の発展が楽しみである。

1回目（2011年）の実践後、受講生から写真や絵の提示の仕方の改善に関する指摘も得たので、修正版ではカード一面に写真や絵を掲載するように改善した。写真が古いという指摘もあったが、日系ブラジル人1世が実際にブラジルで生活する様子を示した貴重な資料なので、今後はその意義も十分に説明して利用していきたい。同時に、現在日本で生活する日系ブラジル人の様子をさらに取り入れていくことも検討したい。

今後は、カルタをツールとしてどのような活動が展開できるのかを模索するためにも、実際の活動現場で実践していく必要がある。日本語学習者（学校の日系ブラジル人の子どもたちや地域日本語活動における日系ブラジル人参加者）および継承語学習者（ブラジルにおける日系の子どもたち）に対して実際に使用する機会を持つことが最も重要である。その上で、彼／彼女ら自身に活用方法を考えてもらうとともに、初級・中級・上級レベルに対応した使用方法、大人と子どもの各々を対象とした利用方法などを提案できればと考えている。今後も協力者を募り、実践の機会を増やし、より多くの利用方法を考えて行く予定である。まずは、ボランティア活動の現場において日系ブラジル人とともにカルタ実践をし、フィードバックを得て、今後の改善に役立てていきたいと考え、計画中である。（服部）

5.　ブラジルの日本語学校における実践

5.1　実践の背景

「日本－ブラジル移民カルタ」を用いた授業実践をサンパウロの日本語クラスで行った。サンパウロ市は、ブラジルの南東部に位置するサンパウロ州の州都である。サンパウロ州には、70か国にも及ぶ国からの移民とその子孫が在住し、130万人以上とも言われる日系ブラジル人の80％程度が集中している。中でもサンパウロ市には約100万人もの日系人が在住し、商業、工業など多岐にわたって活躍している。「日本－ブラジル移民カルタ」に出てくる「アリアンサ」や「平野植民地」はサンパウロ州の北西部に、そして、第二次世界大戦前後から日本人街が形成された「リベルダーデ」はサンパウロ市の中心部に位置する。

本実践は、日本へ働きに行く人たちの支援を行う（社）国外就労者情報援護センター、通称CIATE （Centro de Informação e Apoio ao Trabalhador no Exterior）が設けている成人向けのCIATE日本語基礎コースで行なった。当センターは、リベルダーデ地区に所在するブラジル日系人の代表機関であるブラジル日本文化福祉協会内に設置されている。

5.2　移民カルタの実践

CIATE日本語基礎コースは、学習者が日本での生活で必要とする最低限のコミュニケーション能力を身に付け、日本人の生活習慣に関しての基礎知識を伝授することを目的としている。初級の日本語文型を1から8のモジュールに分け、各モジュールを15コマ（週一回、3コマ）で終えるといったコースである。モジュール1ではひらがな及びカタカナの学習、モジュール2から自己紹介や指示詞、疑問詞、助数詞の学習がスタートし、モジュール3で動詞の導入、モジュール4で形容詞、願望を表す動詞の「V＋たい」、授受表現といった文型積み上げ形式になっている。それと平行して

各モジュールには副教材として「日本人の習慣（スリッパの使い方、洋式トイレ）」、「ゴミ分別」、「日本の主な乗り物」等、読み物教材がついている。

本実践は、モジュール 8 の 10 コマ目の授業の学習者 3 名（日系 2 名、60 代男性及び 40 代男性・非日系 1 名、20 代女性）を対象に行った。モジュール 8 では、自動詞・他動詞の学習や完了を表す動詞「V ＋てしまう」、状態の継続を表す「V ＋てしまう」等が主な学習項目である。

日本語学習の面においては、コース全体の学習内容をほぼ終えた段階であったため、全てのカルタを使用し、聴解能力を高めることも視野に入れて実践を行った。また、読み札のキーワードとなっている用語は定着させることを心がけた。

移民学習の面においては、日本人ブラジル移民について興味･関心を持ち、それを通して自分のルーツを考えるきっかけを作ることを目的とした。実践の手順は表 5 を参照されたい。

表5：カルタ実践の概要

目的	日系人学生は、カルタで遊ぶことを通して、自分のルーツについて考える、また非日系人学生は、日本とブラジルの移民の歴史を知ることによって自分のルーツを考える。
手順	①カルタ遊びを始める前に、日系人学生には自分の祖父母や両親の移民としての経験を聞く。非日系人学生には、日本人ブラジル移民について知っていることや自分のルーツについて聞く。 ②カルタの基本的な遊び方を説明する。 ③教師が読み札を読み上げ、学習者はカードを取る。「ん」のカードについては、読み上げはなし。 ④学習者がカードを取ったら、教師が読み札の文章についてポルトガル語で説明する。 ⑤学習者は、絵札の裏の説明（ポルトガル語）を読み、それについて話し合う。 ⑥ゲームを終えて、感想を話し合う。

①日本人ブラジル移民に関する学習者の知識

カルタゲームを開始する前に、日本人ブラジル移民について知っていることを聞いた。特に日系人の二人は、両親や祖父母が移民としてブラジルに来ているため、様々なことを語ってくれた。

60 代の男性は、両親が構成家族としてブラジルに来て苦労をしたということを詳しく語ってくれた。40 代の男性は、初めての移民船が笠戸丸で、日本人はポルトガル語が話せなかったので苦労をしたなど日本移民の歴史について自分の知っていることを語った。また、自分のお母さんは 3 歳でブラジルに来て長年ブラジルで生活したにもかかわらず、今でもブラジル人ではなく日本人だと強く思っていると語った。

このように、日系人学習者にとってはブラジルへの移民は自分の家族の歴史でもあるため、日本人移民に関しての一般的な知識はあった。しかし、非日系の学習者は日系人の友だちや日本人の友だちを通して、多少は日本人移民のことは聞いたことがあるとのことだった。

②写真やカルタの内容に関しての学習者のコメント

教師が読み札の説明を行った後、学習者は絵札の裏の説明を読み、それについてのコメントや写真について様々なコメントをしていた。日系人の二人は、特に昔の写真に対して、自分の家にも同じようなものがあるとコメントをしていた。中でも「コーヒー園で　朝から晩まで　働いた」の絵

札のコーヒー園の写真は、自分達の家だけではなく、多くの日系人の家庭にあるのではないかとのことだった。

40 代の男性は、「力こめ　大地を耕し　実らせる」の大きな切り株の上に人が座っている絵札を見て、自分の叔父でこのように木を切って土地を開き苦労した人がいると懐かしそうに語っていた。また、「祖先を思い　家族と　墓参り」の読み札では、「子供の頃は両親と一緒によく墓参りをしていたが、長い間していないので計画を立てて行かなければ」と、つぶやいた。

60 代の男性は、「ほ」の邦字新聞の写真を見て、自分は「サンパウロ新聞」で印刷の仕事をしたことがある。昔は、日本語が読める人が大勢いたので、「サンパウロ新聞」は今とは違って大きな会社だったと語っていた。

非日系人の女性は、「夢と勇気　胸にいだいて　ブラジルへ」の絵札に書かれている「さあ行こう一家をあげて　南米へ」の説明をした時、日本ではこんな宣伝をしていたんだと驚いた様子であった。そして「こんな宣伝を見るとブラジルに行きたくなるよね」とコメントをしていた。

③学習者の発見と感想

今回の実践で発見もあったようだった。「運動会　船の上で　楽しんだ」を読み上げたとき、「運動会」はブラジルの日系社会で行われる行事であるため、キーワードにはすぐに反応したが、船の上で運動会が行われていたことは知らなかった。その他にも、「植民地」という用語は聞いたことがなく、平野植民地という所で多くの人たちがマラリアなどで大変苦労をしたということに驚き、日本人移民の苦労が具体的にどのようなものだったのかを知り悲しい気持ちになったようだった。

また、こしょうの苗をブラジルに持ち込んだのが日本人だったということに対しても驚いていた。それに、日本人移民がアマゾンでも活躍していたという事実も知らなかった。

カルタ遊びが終わってからの感想では、日系人の学習者は「色々と自分の家族のことを思い出すことができた」と語っていた。また、非日系人学習者は「自分が知らなかった日本人移民のことがたくさんあった。勉強になった」と話し、自分は外見は白人だが、アフリカ系の祖先がいる」と語った。

「農業は　大事な仕事だ　がんばった」の読み札が印象に残っていたらしく「良く考えてみれば野菜や果物など、日本人がブラジルに持ち込んだ物はたくさんある」と、三人で話し合い、日本人移民が農業に大きな貢献をしたことを再確認しているようだった。

5.3　ブラジルでの実践から見えたこと

日本語の学習面においては、「エンシャーダ　コーヒー園で　使います」「コーヒー園で　朝から晩まで　働いた」「ブラジルも　日本も私の　大切な国」など、易しい語彙や文型が使われている読み札は、一度聞いただけで意味が理解でき、学習者は満足そうだった。

キーワード「移住」「赤道祭」「多文化」「トラホーム」「縫い針」「柳行李」などは聞きなれない言葉であったため、ポルトガル語の説明無しでは理解できなかった。しかし、学習者のコメントや感想から見られるように、この実践を通してブラジルへの移民の歴史や、日系社会に関する用語を学習することができたことに大きな意味があると考えられる。

移民学習の面においては、本実践はわずかな時間で行われたにもかかわらず、学習者は移民の歴史を知るだけではなく、自分の人生や家族の歴史そのものについて考え直すよいきっかけになったことは確かである。日系人にとっては、学習者自身が語ったように、日本人移民についての知識を深めるだけでなく、自分や家族が辿ってきた歴史を振り返ることができたことは間違いない。また、

非日系人の学生は、実践を行う前は詳しいことを知らなかったが、カルタゲームを通して自分の周りに存在する日系人に関しての理解を深め、自分のルーツそのものについて考えることができたと考えられる。

ブラジルは移民国家であり、多くの移民の生活習慣や文化が入り混じって構成された多文化社会であるにもかかわらず、学校教育では移民学習は強調されておらず、ブラジル社会全体でほとんど意識されていないのが現状である。

ブラジルで「日本－ブラジル移民カルタ」を使用することは、読み札「た」の「多文化が　きっと日本を　豊かにする」のように、ブラジルではもう既に様々な文化や考え方により、社会が豊かであるということを再確認する良いきっかけとなると考えらえる。（スエナガ）

6.　フィリピン日系人会インターナショナルスクールにおける実践

6.1　カルタ実践の対象と方法

「日本－ブラジル移民カルタ」はここまでに述べてきたとおり、主として在ブラジルの、そして滞日する日系ブラジル人児童生徒の日本語学習、そして日系ブラジル人児童生徒のホスト役となる日本の児童生徒の学びを支える教材として作成したものである。しかし、この教材は、ブラジル以外の国にルーツを持つ日系の子どもたちにも日本語を学びながら自分たちのルーツやアイデンティティについて考える機会を提供できうるのではないかと考え、フィリピン南部の中心的都市であるミンダナオ島のダバオ市において、実践を行った。

ダバオ市には日本からの移民が20世紀初頭から入植し、その多くが麻栽培に従事したという。最大で2万人近い日本人が滞在していたといわれている[9]。今では日系2世､3世が暮らしており､「フィリピン日系人会」という組織が作られている。この「フィリピン日系人会」ほかが共催で毎年「日比祭り」というイベントを開催しており､その祭りの行事の一環として､フィリピン日系人会インターナショナルスクールに通う高校生[10]を対象とし、カルタの実践を行った。

実施概要については、表6を参照されたい。

表6：カルタ実践実施概要

日時	2011年10月6日　13:00～15:00　　各セッション約30分
会場	フィリピン日系人会インターナショナルスクール（PNJKIS） 教室：Yokohama
対象	PNJKIS 高校生
人数	1回目：22名　　2回目：8名　　3回目：4名

参加した34名の生徒の中には日本国籍の生徒もおり、また、国籍を問わず日本滞在歴のある生徒が多く、日本語のほうが堪能な生徒も数名見られた。校長によると、近年、同校では日本語のほうが堪能な生徒が増加傾向にあるという。また、日系人ではない児童・生徒の入学も受け入れているため、同校で行われている日本語教育についても、継承語教育のみならず、外国語教育、母語保持教育と幅が広がってきている段階にある。

同校におけるカルタ実践では、ブラジルの日系人をテーマにしたカルタで遊ぶことを通して、ブラジルを初めとする世界の日系人についての興味・関心を持つことを目的とした。また、同時に、

ひらがな及びカタカナの復習も目的の一つとして掲げた。実践の手順は表７を参照されたい。

表7：カルタ実践の手順

目的	（1）ブラジルの日系人をテーマにしたカルタで遊ぶことを通して、ブラジルを初めとする世界の日系人についての興味・関心を持つ （2）日本の遊び「カルタ」を体験する （3）ひらがな、カタカナの復習
使用札	い、う、お、コ、サ、す、せ、そ、な、に、ぬ、の、ブ、ほ、み、も、や、ゆ、よ、ル、ろ、ん、以上計22枚
手順	①カルタをやったことがあるかどうか、経験を聞く。 ②カルタの基本的な遊び方の説明。（今回は、キーワードのみで実施） ③参加者をグループに分け、絵札22枚を各グループに配付し、机の上に並べるように指示を出す。 ④報告者が読み札のキーワードを読み上げ、学習者はカードを取る。「ん」のカードについては、読み上げはなし。 ⑤取得したカードの枚数を数えるように言い、いちばん多くのカードを取得した参加者に拍手を送る。 ⑥もう一度、カルタで遊ぶことを告げ、もう一度カードを並べさせる。 ⑦ゲームを始める前に、写真に注目するように言う。写真はいつ頃のものか、どこで撮られたものだと思うか、参加者の意見を聞く。その後、報告者から、これらの写真はブラジルの日系人の生活の様子を撮ったものだということを伝える。 ⑧もう一度、キーワードのみでカルタゲームをする。今回は1枚ずつ、キーワードを読み上げ、参加者が絵札を取ったところで、写真をグループで観察し、気づいたことをクラスで共有しつつ、報告者から適宜解説を加える。 例：どこで運動会をしていますか／どうして船の上で運動会をしていると思いますか、などの質問を投げかけ、ブラジルまで船でどのくらいの日数がかかるかを伝える。そして、それだけの期間を船の上で過ごすのはどんな気持ちか、などを想像する。 ※生徒の集中力に応じ、個別の絵札にかける時間は調整。 ⑨ゲームを終えて、感想を評価シートに記入。

事前準備の段階では、通常のカルタゲームをした後に、日本語学習に発展させる実践を計画していたため、人物にまつわる札、行事にまつわる札を中心に 22 枚を選んだが、母語が日本語である生徒とヴィサヤ語である生徒が混在していたため、日本語学習への発展はせずに、上記の通り、絵札の内容に注目していく実践に変更して実施した。

6.2　実践参加者の様子

実践に参加した生徒たちの多くが、ブラジル在住の日系人の歴史に関心を持った様子であった。特に、表７の手順⑦の時点で絵札の写真の種明かしをすると、次々に絵札を手に取り、見入る生徒が多かった。そして、写真から運動会が船の上で開かれていることなどに気づいた瞬間には、自分の発見を仲間に告げ、絵札を取り合いながら見入っていた。農場の写真では、何を作っているのかに関心を示し、更に、ダバオに入植した日系移民は麻を作っていたという情報が生徒同士で交換された。ブラジルの日系人をテーマに据えたカルタではあるが、日系人とゆかりのあるダバオという町に住む生徒たちにとっては、ブラジルの日系人が歩んできた道はより強く興味関心を喚起される題材であったようだ。また、「お」の札のように、世界に散らばる日系人を扱った絵札からは、ブラ

ジルやフィリピンだけでなく、世界中で多くの日系人が今を生きていることに関心を持ったようであった。小さな絵札を奪い合うように見入り、数字を読み、その数の大きさと散らばり具合に驚きの声を上げていた。

6.3　実践参加者による評価をもとに

以下、生徒が記入した「評価シート」（参考資料 2）を基に、本実践及びカルタ教材について、考察を試みたい。

カルタゲーム自体が初めての生徒は、参加した生徒の 4 分の 3 弱にあたる 25 名であった。評価シートの Q3 については参加者全員が「Yes」を選んでおり、ゲーム自体を楽しんでいたことがわかる。自由記述欄には、「文字の復習になった」、「新しい日本語を覚えた」等の記述が見られ、本実践を通して日本の遊びを楽しみながら体験すると同時に、日本語の学習にも役立ったと考えている生徒がいることがわかった。

また、Q4 では 34 名中 32 名が、本実践を通して新たなことを学んだと答えている。実践を通して自らが学んだことを自由に記述する欄には、多くの生徒がブラジル及び世界の日系人の存在について記述していた。その他、学校教育や日本語教育に関心を寄せたもの、日系人の歴史や経験に関心を寄せたものが見られた。もちろん、日本語自体に関するものも見られた。以下に生徒が記述したものの一部を挙げる。

生徒の記述例：

- 「写真がブラジルの日系人の歴史についてで、それがとても興味深かった」（13歳、女子、日本語学習歴4ヶ月）
- 「世界中の日本人（日系人）について、もっと知りたい。また、フィリピンにいる日本人（日系人）について知りたい」（13歳、女子、日本語学習歴2年）
- 「ブラジルにも日系人の学校が古くからあることを知った」（12歳、男子、日本語学習歴6年）
- 「どうして日本人は日本語学校を作ったのか、どうやって作ったのかを知りたい」（14歳、男子、日本語学習歴4ヶ月）
- 「日本人が外国で働いてどんな経験をしたのかを知った」（13歳、男子、日本語学習歴4年）
- 「どうして日本人が移住したのかを知りたい」（15歳、女子、日本語学習歴4年）
- 「日本に住んでたけど、あんまりよく分かんない事あるので、もっとれきしを知りたいです（原文ママ）」（17歳、女子、日本語学習歴16年）

これらの記述から、本実践は日系人に対する興味関心を十分に喚起するものであり、新たな知への好奇心を刺激される内容であったということができる。日系人インターナショナルスクールという日系人にゆかりのある学校に通ってはいても、学校では一般的な教科教育を受ける時間が圧倒的に多く、他国の日系人についてはもとより、フィリピン国内の日系人についても、目を向ける機会は多くはないのであろう。フィリピンに日系人がいることは知っていたが、「ブラジルに日系人がたくさんいることを知った」のは今回が初めてだったという生徒が少なからずいたというわけだ。「もっと多くのカードを使って、遊びたかった」という感想もあり、ゲームを楽しむだけでなく、他の札にはどんな写真が、どんな情報があるのかといった内容にも関心を持っていたのではないかと推察できる。複数回にわたる実践が可能であれば、喚起された知的好奇心を満たすために、調べ学習等へ発展させていくことができただろう。そして、その中で、フィリピンの日系人の歩んできた道、

ダバオの日系人が歩んできた道について学び、自らのルーツについて考えるきっかけとすることも可能であっただろう。

6.4　多様な活用の可能性と課題

このように、ブラジルにおける継承語としての日本語学習者、日本に滞在する日系ブラジル人児童生徒、及び日本人児童生徒を対象に開発されたカルタであるが、それ以外の国の児童生徒対象でも、十分に活用しうるだけの内容を備えた教材であるということができる。また、日本語が母語である生徒から日本語学習歴が数か月しかない生徒まで日本語力に非常に大きな開きがあったが、参加者全員がQ3に対して「楽しかった」と回答し、Q4で大半の生徒が「新たに学んだことがあった」と回答している通り、日本語力を問わずにゲーム性の楽しさ、知的好奇心を刺激される楽しさを得られる教材であるということができる。これは、このカルタが日本語の初級学習者から母語話者にまで対応できるように配慮されて開発されているためである。今回はキーワードのみを読み上げる形式で実施したが、キーワードの中から新たな語を学んだ生徒もおり、日本語学習としての効果も幾分かあげることができた。また、日本語の堪能な生徒は、日本語とポルトガル語の２言語で併記されている絵札の裏書からも情報を得ていた。よって、日本語教育としての活用も可能な教材となっていると評価することができよう。

一方で、裏書が日葡２言語であったため、日本語力が不十分な生徒にとっては、「分からない」という諦めのムードを作ってしまっていたように見受けられた。イベントの中での30分程度の実践ではなく、授業としての実践であれば、この日本語力のギャップを利用し、情報の共有などのアクティビティにも発展させていったり、「読めない」から「読めるようになりたい」という気持ちへの転換を図れるようなアクティビティに発展させていったりすることが考えられよう。また、ポルトガル語に関心を示していた生徒もいたので、多言語学習への発展の可能性もあるように感じた。

今後、可能であれば、複数回にわたる実践の機会を得て、今回の実践で報告者自身が発見した発展活動の可能性について実践を試みたい。（大舩）

結語　―「日本–ブラジル移民カルタ」活用の普及にむけて

本論においては、まず「日本–ブラジル移民カルタ」の開発理念や特徴を記し、モデル活用例として、日系ブラジル移民の歴史や経験などの内容を重視した活動と文字学習を重視した活動を示した。そして本カルタの活用の可能性や課題について、大学授業での活用、地域日本語活動での活用、ブラジル日本語学校での活用、フィリピン日系人会インターナショナルスクールでの事例を通して検討した。

大学授業では、「移民カルタ」と「日本–ブラジル移民カルタ」（試作版）を使用した感想から改訂版へポイントを抽出するだけでなく、留学生も交えた２年目の取り組みでは「神奈川多文化共生カルタ」づくりに発展させた。日系ブラジル人への理解を深めるだけでなく、「ことばへの気づき」を深め、地域の多文化共生へと視野をひろげることができた。

日本語指導者養成講座受講生を対象とした地域日本語活動における実践では、印象に残った句と理由、感想を聞くだけでなく、利用方法を提案してもらうなど、カルタの活用を広めることの可能性を示した。これは、日本語教育のボランティアとして教育活動に携わる人々への啓蒙や普及の意味をもっている。

ブラジルの日本語学校における実践では、実際にブラジルで継承日本語として日本語を学んでい

る人、日本への就労の可能性がある人を対象にカルタを使用している。カルタの内容がまさに自分たちの歴史であることもあり、他の場面での使用の感想とは異なる傾向が見られ、内容への共感的理解が大きかったようだ。同時に、語句が難解なものについては実践者であるスエナガの適確な説明もあり、学習が深まっていた。

フィリピン日系人会インターナショナルスクールにおける実践では、日本語への興味関心がカルタという手法で深められ、新たなことばの獲得があっただけではなく、フィリピンのダバオに入植した日本人移民と日系人のことも語られるなど、ブラジルに関わりをもたない地域や学習者にも活用の効果があることが示された。

以上のことから、本「日本－ブラジル移民カルタ」は、ブラジルにおける継承語としての日本語学習者、日本に滞在する日系ブラジル人児童生徒、及び日本人児童生徒を対象に開発されたが、ブラジルと日本に限定せずに、異なる国や地域、日本人や日系人が学習対象でなくても活用しうる教材であるということができる。

今後は地域や海外の日本語指導者にカルタを認知してもらい活用法をともに考えたり、日本国内の学校教育場面で活用してもらうための教員研修会を開いたりするなど、普及活動の場が求められる。普及活動においては、本論で述べた実践事例とその効果が先行実践として意義をもち、より効果的に活用する実践が期待される。また、「世界のウチナーンチュカルタ」を開発した沖縄 NGO センターなど、移民をテーマにした教材を開発している組織と連携をし、普及に努めたい。　（中山）

参考資料1：アンケート

お名前：

①カルタを使ってみた感想を教えてください。

②印象に残っている読み札はどれですか。それはなぜですか。

③もっと知りたいなと思ったことはどんなことですか。また、カルタが扱っている内容についてのコメントがあればお聞かせください。

④このカルタは、日系ブラジル人児童・生徒（在ブラジル、日本）を対象として作られたものです。日本語活動の側面から、通常のカルタ以外の利用方法（日本語学習・ゲームなど）があればご提案ください。

⑤このカルタの代表的なコンセプト（学べること、知れること、楽しめる事など）のキーワードを3つ挙げるとしたら何ですか。

参考資料2：評価シート

Sex:_____School:_____Age:_____

Q1. How long have you studied the Japanese language?

Q2. Have you ever played the game before?
☐ **Yes** ☐ **No**

Q3. Did you enjoy the activity as a whole?
☐ **Yes** ☐ **Somewhat yes** ☐ **Relatively No** ☐ **Not at all**
***please write the reason briefly.**

Q4. Did you get any new information through the activity?
☐ **Yes** ☐ **No**
*** If your answer is "yes", please write what you discovered.**

Q5. Did you have anything that you want to know more after the activity?
☐ **Yes** ☐ **No**
*** If your answer is "yes", please indicate briefly.**

Q6. Your comments/suggestions ☺

註

[1] 本研究プロジェクトは、森茂岳雄（中央大学）を中心として進められ、筆者らの他に、福山文子（元財団法人海外日系人協会嘱託職員）が携わった。

[2] 『言語の接触と混交―日系ブラジル人の言語の諸相』（大阪大学21世紀COE プログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書）の中の高阪香津美（140-149）、服部圭子（169-179）論文に詳しい。

[3] 宮島喬（2003：136-140）『共に生きられる日本へ― 外国人施策とその課題 ―』、東京：有斐閣選書。

[4] 西垣千佳子・中條清美・内山将夫（2008、2009）は英語の生活語彙の学習を目指した携帯型ゲーム機を用いたカルタ教材開発を行っており、そこでも語学教育におけるカルタの有効性を挙げている。

[5] 日本に滞在する外国人児童・生徒の日本語学習用に開発されたもので、内容及び語彙は日本の学校内で使用される語彙・表現・場面を配慮して作成されている。絵札はぬり絵スタイルとなっており、児童生徒がぬり絵を楽しみながら協働できる点など、工夫がされている。また併設のワークブックも開発されており、カルタに登場する表現や語彙が使えるその他の場面等が紹介されている。

[6] 服部圭子（2012：148）に他の滞日外国人に関する読み物教材とともに資料として掲載している。

[7] 改訂版では「港から　見送る人も　つらかった」に修正されている。

[8] 西口光一・新庄あいみ・服部圭子（2007）では、地域の日本語活動において、日本語を教えるのではなく、相手の日本語力に寄り添って、相手の人格を尊重しながらおしゃべりをしたらどうかと提案している。

[9] 「沖縄移民2世の『古里』」まにら新聞「移民1世紀　第2部：ダバオに生きる」（2003年4月14日掲載）＜http://www.manila-shimbun.com/award131436.html＞2012年10月20日閲覧

[10] フィリピンでは小学校6年、高校4年、大学4年という学制を採っており、フィリピンでいう「高校生」は日本の中学生から高校1年生の年齢に当たる。

引用文献リスト

OSHIRO, Tomoko., Keiko Sokei and Kyoko Hijirida. 2001 “Making Dynamic Instructional Material: Okinawan and Hawaiian Cultural Karuta”『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』6、東京：国際交流基金。

大宮市立教育研究所・大宮市国際理解教育研究協議会 2000『たのしいこどもの にほんごかるた』、埼玉。

大宮市立教育研究所・大宮市国際理解教育研究協議会 2001『たのしいこどもの　にほんごかるた　ワークブック』、埼玉。

工藤真由美・森幸一・山東功・中東靖恵 2009『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』、東京：ひつじ書房。

小内透・酒井恵真著 2001 『日系ブラジル人の定住化と地域社会－群馬県太田・大泉地区を事例として』、東京：御茶の水書房。

鐘ヶ江晴彦編 2001 『外国労働者の人権と地域社会－日本の現状と市民の意識・活動』、東京：明石書店。

志水宏吉・清水睦美編著 2001『ニューカマーと教育 ―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって―』東京：明石書店。
高阪香津美 2003「日系ブラジル人の家庭をとりまく現状 ―ことばの問題を中心に―」『言語の接触と混交-日系ブラジル人の言語の諸相』、大阪大学21世紀COE プログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書、140-149。
小島明 2012「見えないトランジッション ―在日ブラジル人青年に見る『自立』の行方―」、異文化間教育学会第33回大会2012年度特定課題研究「ルーツからルートへ：ニューカマーの子どもたちの今」発表レジュメ。
西垣千佳子・中條清美・内山将夫 2008「携帯ゲーム機の特性を活かした語彙学習教材の開発」『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』電子情報通信学会、13-16。
西垣千佳子・中條清美・内山将夫 2009「多言語運用能力養成のためのマルチ・ランゲージ語彙学習教材の開発 ―カルタと携帯型ゲーム機を使った教材―」『千葉大学教育学部研究紀要』第57巻、253-259。
西口光一・新庄あいみ・服部圭子 2007「共生を育む地域日本語活動に向けて」『言語の接触と混交』、大阪大学21世紀COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006、第6巻、59-97。
ハタノ、リリアン・テルミ 2009『マイノリティの名前はどのように扱われているのか ―日本の公立学校におけるニューカマーの場合』東京：ひつじ書房。
服部圭子 2003「職場における共生に向けて ―日本人と日系ブラジル人従業員の意識調査から―」『言語の接触と混交―日系ブラジル人の言語の諸相』、大阪大学21世紀COE プログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書、169-179。
服部圭子 2012『日本・韓国・ブラジルを結ぶ移民学習教材の開発とカリキュラムモデルの構築』、平成21年度～平成23年度　科学研究費補助金基礎研究（C）課題番号21530997。
ホールスチュアート 1998「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』vol.26-4
水谷信子 1988『日本語カルタ』、東京：凡人社。
宮島喬 2003『共に生きられる日本へ ―外国人施策とその課題―』、東京：有斐閣選書、136-140。
山本かほり2011「『多文化共生施策』が見落としてきたもの ―経済不況下におけるブラジル人―」『JICA横浜　海外移住資料館　研究紀要』5、33-44。
渡辺雅子編 1995a『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人上　論文編 ―就労と生活―』、東京：明石書店。
渡辺雅子編 1995b『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人下　資料編 ―体験と意識―』、東京：明石書店。

Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (Ⅱ): Practical Reports on Application of "Nihon-Burajiru Imin Karuta"

Keiko Hattori (Kinki University)
Chisato Ofune (The Japan Foundation, Manila)
Kyoko Nakayama (Teikyo University)
Sandra Terumi Suenaga (Former Bilingual Teacher at Ota Elementary School, Ota City, Gunma, Japan)

There have been various studies on Japanese-Brazilians, some of which have pointed out issues related to the development of Japanese-Brazilians identity and the lack of knowledge of their historical and cultural background. However, most of the available teaching materials for Japanese-Brazilians are focused on simply developing their language proficiency. There was a need to create teaching materials which could not only support language learning, but could also increase knowledge of history/heritage and acculturation, which in turn would enable Japanese-Brazilians to enhance their ethnic identity. Moreover, even Japanese users of the material deepened their international understanding. Thus, the authors of this paper have developed the material entitled "Nihon-Burajiru Imin Karuta".

In this paper, the authors first state the necessity for teaching materials for these Japanese-Brazilian students and the principles behind the material development. Then, some practical applications of this developed material are introduced, which aims to teach the history of Japanese migrants to Brazil and their experiences, as well as Japanese language. Moreover, the possible applications and the practical value of this developed material are discussed after having been used in several educational settings such as a university, an assembly of language supporters in a west Japan, a Japanese language school in Brazil, and the Philippine Nikkeijinkai International School. In addition, some viewpoints to improve the "Nihon-Burajiru Imin Karuta" are also presented.

Keywords: Japanese-Brazilians, Japanese-Language Education, Development of Identity, Roots, "Karuta" as a teaching material, Multicultural Co-existence

〈研究ノート〉

愛媛県海外移民史研究の現状と資料状況

木村健二（下関市立大学・教授）

＜目　次＞

はじめに
1.　研究状況
1.1　県史、市町村史
1）全般的な諸規則・資料等
2）朝鮮出漁・移住漁村
3）ブラジル移民
4）オーストラリア採貝移民
5）満洲移民
1.2　島津豊幸編著『愛媛県の百年』山川出版社、1988 年、376p.
1.3　村川庸子『打瀬船物語　アメリカの風が吹いた村』愛媛県文化振興財団、1987 年、177p.
1.4　日本コリア協会・愛媛編著『植民地朝鮮と愛媛の人びと』愛媛新聞社、2011 年、394p.
2.　資料の状況
2.1　外務省外交史料館
2.2　愛媛県内県政史料、役場文書
1）愛媛県立図書館所蔵資料
2）東宇和郡旧俵津村からのブラジル移民関係綴
3）東宇和郡旧魚成村役場文書（満洲移民ファイル）
2.3　名簿・人名録、発展史、回顧録
1）太宰正夫『在米愛媛県人発展史』（米国）大陽堂書店、1913 年、337p.
2）西村綠也編『朝鮮満洲南支四国人発展史』京城四国人発展史編纂社、1924 年、605p.
3）愛媛県『海外移住者県人名簿』1970 年、427p.
4）田中幸一編『ブラジル愛媛俵津移民四十五年史』在伯俵津会、1978 年、185p.
5）『ブラジル愛媛県人 100 年の歩み（1908-2008）』在伯愛媛県人会、2008 年、167p.
2.4　海外移住組合刊行物
1）愛媛県海外移住組合『時報』創刊号、1931 年、136p.
2）愛媛県海外移住組合『年度別市町村別ブラジル移住者概要』1940 年、12p.
2.5　県内遺跡類
1）東宇和郡旧明浜町俵津公民館前：（ブラジル移民）「拓魂」碑
2）南宇和郡旧西海町内泊：（朝鮮）「迎日湾遭難者弔魂碑」
3）八幡浜市お四国山愛染堂：「西井久八像」
4）西宇和郡旧三崎町串：「加藤太郎松翁頌徳碑」
5）松山市護国神社：「拓魂」碑
おわりに

キーワード：愛媛県、アメリカ密航、ブラジル移民、オーストラリア移民、朝鮮出漁、満洲移民

はじめに

これまで、いわゆる「移民県」と呼ばれる地域に関しては、広島県、山口県、和歌山県、長野県、沖縄県などにみられるように、海外移民に関する多くの研究蓄積があり、また移民資料館などが整備されて資料の保存・掘り起こしや聞き取り調査などが実施されている[1]。しかし全国的に海外移民の資料を調査し、研究史を整理していく作業は緒についたばかりであり、ひとつひとつ積み上げていく作業が待たれているところである。

以下では、そうした作業のひとつとして、従来あまり取り上げられることのなかった愛媛県に着目し、そこでの研究動向や資料の残存状況について紹介してみたい。

なお、対象とする移民の範囲は、時期的には明治以降から現代まで、方向としては日本の旧植民地・勢力圏地域も含めた海外全般とし[2]、さらに移民の種類としては、自営的な農業移民や出稼ぎ労働移民にとどまらず、商工業者や下級官公吏、教員なども含めている。

1. 研究状況

1.1 県史、市町村誌

これまで刊行された愛媛県史や県内の市町村史において、海外移民関係にふれたものがある。それを地域別にみると、朝鮮、ブラジル、オーストラリア、「満洲」に分けられよう。以下ではまず全般的な法令・規則に関する資料をみたうえで、これらの地域別の記載状況についてみておこう。

1）全般的な諸規則・資料等

『愛媛県史』資料編　社会経済、下（1986 年）には、第 4 章として「海外移住」を設定し、約 100 頁にわたり法令・県布達等、海外移住組合等の事業団体に関するもの、そして統計資料が付されている（845-950 頁）。さらに『愛媛県史』部門史、社会経済 5 社会（1988 年）では「愛媛の海外移住」という項を設定し、約 200 頁にわたり、第一章概況、第二章各国への移住（米国、ハワイ、中南米、オーストラリア、アジア地域）、第三章国内への移住についての論考が置かれ、最後に年表が付されている。

とくにアジア地域に関しては、朝鮮や満支で活躍した人びとについては、著名な商工業者や医師、満鉄社員、東洋拓殖会社総裁、全羅南道知事、満洲国官吏などが並び、満洲開拓団では愛媛県人の加わった 9 次にわたる開拓団が一覧表とともに示される。とくに愛媛県人のみで構成された第九次諾敏河愛媛村開拓団については、喜多郡御祓村村長の長男であった西沢香寿美と久万町青年学校教師の朝光芳明によって企画・推進されたこと、その資料に関しては、鹿島智夫『愛媛村開拓の先駆者たち』（松山市拓友会、1967 年、71 頁）や三根生幸也『赤い夕陽 ―愛媛の元満州開拓団記録―』（愛媛新聞社、1973 年、253 頁）、『元諾敏河愛媛開拓団の団員名簿』（西沢団長宅所蔵、1980 年調査）などの資料があるという[3]。

2）朝鮮出漁・移住漁村

朝鮮出漁に関してふれたものとしては、まず県史では『愛媛県史』社会経済 2 農林水産、(1985 年) がある。

また多くの出漁者を出したのは西宇和郡三崎町であって、その点が三崎町誌編集委員会編『三崎町誌』三崎町（1985 年）に記載されており、また論文では武智利博の一連の研究がある[4]。なお、

越智郡旧魚島村『魚島村誌』（2004 年）は朝鮮出漁に関する詳細な記述や手記が掲載されていて貴重である。

移住漁村（愛媛村）に関しては、南宇和郡西海町内泊が著名であって、鈴木泰助編『西海町誌』（西海町公民館刊、1959 年、大正初期本の復刻）や町誌編集委員会編『西海町誌』（西海町、1979 年）でふれられている。

3）ブラジル移民

戦前期のブラジル移民に関しては、後でもふれるが、東宇和郡明浜町が集中的に出しており、その点は明浜町誌編纂委員会編『明浜町誌』（明浜町役場、1986 年）や、愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史』社会経済５でもふれられている。

戦後の南米移民に関しては、後藤連一（日本大学教授）『海外移住不振の潜在的要因に関する考察（調査の手がかり）愛媛県野村町における調査事例』（社団法人農業拓殖協会、1966 年）があり、また野村町誌編纂委員会編『野村町誌』（野村町、1997 年）とあわせて読むと理解が深まる。

なお、上浮穴郡久万町では、1955 年から 61 年までのあいだにブラジル 20 戸、パラグアイ 18 戸、1 戸不明、合計 39 戸 274 名の移民を出しており、その世帯主の平均年齢は 35.2 歳、世帯人員の平均は 4.5 名、職業は全員兼業農家（第１種が９名、第２種が 29 名）、経営耕地面積の平均は田畑あわせて約５反というものであった（『久万町誌』増補改訂版、1989 年、382-383 頁）。最初は独身雇用者が、のちには家族による自営移住となり、全町的な移住推進協議会が組織され、役場による助成金や移住振興会からの融資を得たうえでの移住であったという。

4）オーストラリア採貝移民

オーストラリアへの真珠貝採取業移民は和歌山県が多いことで知られているが、愛媛県も多く、とくにブルーム地区へ西宇和郡・南宇和郡の漁民が多く移住した。それは在ブルームの三瀬ハウスの経営者であった三瀬豊三郎が三瓶町出身であったことによっていたという。

これらは『県史』でもふれられているとともに、それぞれの地元の内海村史編纂委員会編『新訂内海村史』（南宇和郡内海村、2004 年）や『西海町誌』（西海町、1979 年）及び『伊方町誌』（790-792 頁）にもふれられている。後述の外務省外交史料館に所蔵する海外各地の日本人会の資料にもブルームの日本人会の資料が含まれており、そうした資料と付き合わせることによって、より総合的な位置づけが可能になると考えられる。

5）満洲移民

荘河伊方開拓団の事例が伊方町誌改訂編集委員会編『伊方町誌』（1987 年、302-311 頁）に記載されている。すなわち当時の伊方村は、狭い耕地に人口が多く、また自然増も１ヶ年で 100 人を超えるという状況にあって出稼ぎ者が多かった。この打開策として前の伊方実践農業学校長が県の指名を受けて 1939 年に満洲視察を行い、分村計画を立てて翌年に 20 名の先遣隊を派遣し、その後 43 年 12 月までに 50 家族 170 名が入植したという。その出身地は大浜集落がもっとも多く 14 家族に達し、ついで亀浦地区８家族、河内地区の５家族と続く。1944 年８月には職員を派遣し現地視察を行っている。荘河は黄海沿岸に面した地方で、半農半漁のできる場所でもあったという。

1.2　島津豊幸編著『愛媛県の百年』山川出版社、1988 年、376p.

本書では、海外移民に関しては、愛媛県からの満洲移民についてふれている。1935 年９月の第４

次から始まり、1945 年 3 月の第 14 次まで、初期には他県と混成で、後期には単独で毎回 11 次にわたって 1,977 名の開拓移民を送り出したことを一覧表に示している（213 頁）。このほかに、1944、45 年に在満報国農場へ勤労奉仕隊 217 名、1938 年 6 月以降に青少年義勇隊として 1,942 名を送り出したという。

これらは、分村（伊方）、分郷（伊予郡）や商工業者（壬生川、双遼宇和島、万陽郡中）の開拓団であった。その動機は、農家二・三男で村では食えない、満洲は魅力、お国のために村のためになどがあり、とくに村のためにという場合は、1 戸当たりの耕作面積をふやして残留農家の経営を安定させるという目的があった。要するに、昭和恐慌で打撃を受けた零細漁民や養蚕農家、統制経済下で転業を余儀なくされた商工業者の問題など、送り出し側の事情についてみれば、1930 年代に現出した諸矛盾の解決策として満州移民が企画・実施されたのである。

本書では、前掲『伊方町誌』や三根生幸也前掲書といった自治体史及び引揚げてこられた人びとの手記などのほか、『県政事務引継書』（1941 年）なども活用されており、そうした県レベルの資料や、分村・分郷に関わった地域の役場文書の発掘も待たれるところである。

1.3　村川庸子『打瀬船物語　アメリカの風が吹いた村』愛媛県文化振興財団、1987 年、177p.

本書は、明治末から大正初年にかけて、愛媛県西宇和郡真穴村穴井地区からアメリカに打瀬船で密航した人びとに着目し、アメリカや地元の新聞記事、外務省報告書、そして実際に密航した移民の航海日記、地元の役場文書などによりながら、その実態、背景、アメリカでの就労、そして母村への影響に関して分析したものである。

密航の背景に関しては、近隣からの先駆者の存在（西宇和郡矢野崎村向灘出身の西井久八など）、アメリカにおける排日による門戸閉鎖（正式ルートの不可能性）、進取の気象、旺盛な好奇心、海辺の村の解放性などの精神的要因、「耕して天に至る」といわれる平地の少ない自然環境、それに規定された半農半漁半商という独特の産業構造（農業は米麦のほかに甘藷、桑と蚕、そしてのちに柑橘、漁業は鰯と煎子製造、商業は木綿織物の製造販売）、そのもとでの商品貨幣経済の展開と出稼ぎ慣行の存在をあげる。また密航者の家族内の地位については、長男が多く数年のうちに帰国することを想定していたものが多かったこと、出身階層については、県税（戸数割税か？）の等級別でみると、10 ～ 14 等の部分がもっとも多く（全戸数の 39.5％）、全体としても中から上層に属する人びと[5]、あるいはそこから下落した家が多かったと指摘している点は興味深い。

最後に母村への影響という点では、お金をはじめとして有形無形のものを村にもたらし、そして後続者を送り出したとし、この穴井地区を「アメリカの風が吹いた村」と表現してしめくくっている。

なお、西宇和郡三瓶村出身の宮内牧太郎の伝記（山下草園『スマドレ化粧品の由来　宮内牧太郎氏の多彩な略伝』米布時報編集部、1967 年）や「宮内牧太郎航海日記」、「橋本菊太郎日記」、井上直吉『亜米利加密航記』などからの引用もされており、そうした貴重な資料をいかに保存していくかも重要な課題であろう。

1.4　日本コリア協会・愛媛編著『植民地朝鮮と愛媛の人びと』愛媛新聞社、2011 年、394p.

近年、日本の植民地であった朝鮮に渡った愛媛県人に関して取り上げた研究書が刊行された。全体としては、愛媛県人の移民に限定したものではなく、愛媛県と朝鮮との関係や愛媛県にやってきた朝鮮の人びとに関する記述もあるが、ここでは朝鮮へ渡った愛媛県人にのみ限定して紹介しておく。

第 1 部の植民地朝鮮と愛媛では、移住漁村について取り上げられている。伊地知紀子「全羅南道・

莞島に設営された移住漁村－伊予村・加馬九味」と金秀姫「民衆主体の朝鮮進出と内泊漁民の三千浦での移住漁村経営」である。前者は、松山市高浜、西宇和郡伊方町、三瓶町などから移住した人びとに関する聞き取り調査と文献をもとに移住のプロセスや現地での生活、敗戦後の引揚げに至るまでをたどった論考である。本書では引用していないが、東洋拓殖株式会社の『移住民名簿』（1921年６月１日現在）によれば、木浦支店の箇所に第５回移民として西宇和郡二木生村民を主体とする宇和団体の14戸が莞島面郡内里に、また第７回移民として温泉郡新濱村民からなる高濱団体13戸が莞島面加用里に、いずれも半農半漁の形で移住していることが判明する。

後者は、主として西宇和郡三崎村海士からのあわび漁、越智郡魚島から巨済島旧助羅へのイワシ巾着網漁、そして南宇和郡西外海村内泊から三千浦へのサワラ・タイなどの巾着網漁について、その出漁の背景や指導者の存在、愛媛村の行く末などについて検討している。いずれも漁場の狭隘や網元の独占を背景とし、国や県の出漁奨励・移住漁村の建設補助などがあったことを指摘している。

第２部では、朝鮮に生きた愛媛の人びとということで、三・一独立運動期の朝鮮でキリスト教布教活動に従事した松山市の乗松雅休、伊予西条藩出身で大倉喜八郎の娘婿として京釜鉄道・京義鉄道建設に従事した大倉粂馬、韓国保護国化の際に特派大使として派遣された伊藤博文の随行員でのちに統監秘書となる東宇和郡宇和町出身の古谷久綱、三・一独立運動時に徴集され朝鮮軍に入営し、上官に刃向かって軍法会議にかけられた松山市出身の永井叔、温泉郡小野村（現松山市）出身で、満鉄京城管理局経理課に就職する傍ら、詩人として「朝鮮のひとたちによりそった」詩集を創作した山部珉太郎、父親の本籍が愛媛県宇和島町で、光州女子高等普通学校在学中に朝鮮独立のための示威行動を行った岩城錦子、西宇和郡千丈村川之内（現八幡浜市）出身で日本人教師として雑誌『新興教育』に依りながら植民地朝鮮で植民地教育に疑問をもちこれと闘った上甲米太郎について取り上げている[6]。

2.　資料の状況

2.1　外務省外交史料館

周知のように外務省外交史料館には膨大な量の外交文書が所蔵されており、そのなかには海外移民関係史料も多数含まれていることはいうまでもない。『海外旅券勘合簿』（1878～90年）、『海外旅券下附（附与）返納表進達一件』と呼ばれる旅券発給控えや『移民取扱人ヲ経由セル海外渡航者名簿』といった移民関係基本史料から、海外移民の送金持帰り金データなど、各道府県別に追うことができ、したがって愛媛県関係者に関してもこれらの史料によって、基本的な数値を確認することができる。

このほか、移民に関連した係争につき、海外領事館より本省宛の諸問合せ、報告書類、調査書類などが豊富に存在し、ただちに愛媛県と特定できないまでも、丹念に調べていけば、愛媛県関係の記録を探し当てることができる。これらのうち、徐々に近代デジタルライブラリーとしてウェブ上に公開されるようになってきている。もし個々の文書ごとの索引が作成されれば、道府県別に検索ができるようになり、研究が大いに進展することになるであろう。

2.2　愛媛県内県政史料、役場文書

1）愛媛県立図書館所蔵資料

愛媛県内の図書館にある文献目録に関しては、1978年と81年に以下のものが公刊されており、基本的な文献資料を探すのには便利である。

・愛媛県立図書館『愛媛県内公共図書館所蔵　郷土資料総合目録』1977年３月末現在、

・同上、1981 年 3 月末現在

また、愛媛県の行政資料に関しては、愛媛県立図書館所蔵『愛媛県行政資料目録　藩政期・明治期』というものがあるが、移民関係資料は乏しく、若干韓海出漁組合関係資料があるていどである。このほか戦前期に愛媛県内で発行された新聞については、明治後半期以降からのものとして、『海南新聞』、『愛媛新報』、『南豫時事新聞』などがあり、マイクロフィルムで閲覧することができる（所蔵新聞一覧については、えひめ資料室ブックリスト 6『郷土の新聞』2012 年 6 月改訂を参照のこと）。

2）東宇和郡俵津からのブラジル移民関係綴

表題は、俵津村役場（社会）『伯国移住一件書類』昭和九年度となっており、内容的には、おおよそ以下の通りである。

1. 川上村長より愛媛県海外移住組合宛「ブラジル移住希望者ノ件」昭和 8 年 11 月 27 日
2. 川上村長より小学校長宛「ブラジル移住懇談会開催ノ件」昭和 8 年 12 月 21 日
3. 愛媛県海外移住組合山下利久より川上村長宛「無題」昭和 8 年 12 月 20 日
4. 東宇和郡ブラジル移住相談所より俵津村長宛「ブラジル移住希望者ニ関スル件」昭和 8 年 12 月 21 日
5.「ブラジル移住希望者」18 名、昭和 9 年 1 月 6 日
6. 井上助役より関係者宛「ブラジル移住ニツキ懇談会開催通知ノ件」昭和 9 年 1 月 6 日
7. 愛媛県海外移住組合山下利久より川上村長宛「無題」昭和 9 年 2 月 5 日
（名産ネーブル各 1 箱を拓務省拓務局保護部、奨励部、海外移住組合連合会宛送付依頼）
8. 愛媛県東宇和郡俵津村役場「南米移住希望者氏名」（25 名）
9. 川上村長より宇都宮富士太郎宛「ブラジル移民ニ関スル件」昭和 9 年 2 月 8 日
10. 愛媛県海外移住組合山下利久より川上村長宛「無題」昭和 9 年 2 月 7 日
11. 愛媛県海外移住組合専務理事汐谷薫より俵津村長宛「移住者手続ニ関スル件」昭和 9 年 2 月 19 日
12. 山下利久より川上村長宛「はがき」昭和 9 年 2 月 20 日
13. 山下利久より「はがき」昭和 9 年 2 月 22 日
14. 川上村長より移民希望者宛「ブラジル移住ニ関スル件」案、昭和 9 年 2 月 27 日
15. 井上助役より三瓶町津布理宮内豊高宛「南米伯国移住ニ関スル件回答」昭和 9 年 2 月 26 日→宮内より俵津村役場宛「返事」昭和 9 年 2 月 27 日
16. 石田書記より愛媛県海外移住組合宛「ブラジル移民ニ関スル件」案、昭和 9 年 3 月 10 日
17. 長嶺昇（神戸移住教養所）より川上満亀（村長）宛「礼状」昭和 9 年 3 月 14 日
18. 山下利久より川上村長宛「礼状」昭和 9 年 3 月 19 日
19. 川上村長より移住教養所長宛「ブラジル移住者入所日ノ件」案（移住民名簿付）、昭和 9 年 3 月 20 日
20. 川上満亀（村長）より愛媛県海外移住組合御中「ブラジル移住者戸籍謄本引替ニ関スル件」昭和 9 年 3 月 21 日
21. 山下利久より川上村長宛「電報」昭和 9 年 3 月 23 日
22. 西田書記より卯之町警察署長宛「身分証明書善行証明書下付願ノ件」昭和 9 年 3 月 23 日
23. 愛媛県海外移住組合理事長瀬谷薫より俵津村長宛「移住者ニ餞別贈与ノ件」昭和 9 年 4 月 2 日

24. 西田書記より海外移住組合連合会宛「除籍謄本送付ノ件」昭和９年４月４日
25. 海外移住組合連合会より愛媛県海外移住組合宛「俵津村移民団ノ家族構成ニ関スル件」昭和９年４月４日
26. 川上村長より海外移住組合連合会宛「ブラジル移住者続柄ニ関スル件」昭和９年４月５日
27. 西田書記より海外移住組合連合会宛「除籍謄本送付ノ件」昭和９年４月５日
28.「移住申込書」「身分証明書下付願」「善行証明書下付願」等

すなわち、1934 年 4 月、東宇和郡俵津村からブラジル移民 25 家族 150 名を送り出すにあたって、もっぱら愛媛県海外移住組合、全国組織の海外移住組合連合会と俵津村との間の各種文書を中心とし、前年の 11 月末から翌年 4 月初旬の出発に至るまでの往復文書・ハガキ・電報類が収録されている。これによって、ブラジル移住までにどのような手続きが必要であったかをつぶさに知ることができる。また､神戸移住教養所の「入所要覧」も挟み込まれており[7]､入所マニュアルや手続きなどもうかがうことができる。

3）東宇和郡旧魚成村役場文書（満洲移民ファイル）

東宇和郡城川町（現西予市）には、西予市城川文書館があり、そこには旧魚成村役場文書が整理され、『旧魚成村役場文書目録』（2007 年 5 月、総説 6 頁、目録 82 頁）が作成され、公開されている。あわせて 3,240 点に及ぶ資料はたいへん貴重であり、その中の移民関係では、『分村計画満洲農業開拓ニ関スル綴』（魚成村役場、自昭和十四年）という資料がある。

同綴には、分村計画を策定するにいたった経緯、移民の募集、先遣隊の派遣、後続家族の派遣、応援作業班の派遣、青少年義勇軍募集、現地からの手紙などが含まれており、満洲農業移民に関するたいへん貴重な資料を提示するものといえる。なお、同役場文書には、戦後の引揚げ関係の資料もあって、満洲移民の人びとが戦後に帰村して以降、どのような状況にあったかの概要を知ることができる。

今後は、県内に残存する市町村役場文書の現状把握とその整理、公開が期待されるところである。

2.3　名簿・人名録、発展史、回顧録

1）太宰正夫『在米愛媛県人発展史』（米国）大陽堂書店、1913 年、337p.

本書は、ロサンジェルス在住の太宰正夫（春峯）によって刊行されたもので、その凡例によれば､「在米愛媛県人の事業と其の経営状態及び発展の径路を記述する目的なり」とあって、日米関係や米国国勢の概観を行ったのち､「愛媛県人発展之由来」として北米愛媛県人会・南加愛媛県人会などの組織を紹介し、最後に「殖民地に確固不抜の地盤を築ける実業家にして共に社会に信用ある我県人」として 117 名の出身地、渡航の経緯、現状などについて記載している。著者や発刊の趣旨については必ずしも明瞭ではないが[8]、米国における排日熱の勃興の中で、在米愛媛県人の発展の跡を記録にとどめようとしたものといえる。

2）西村綠也編『朝鮮満洲南支四国人発展史』京城四国人発展史編纂社、1924 年、605p.

本書は、朝鮮・満洲・南支那（実際は北京・天津・青島・上海などの華中・華北）といった、当時の日本の植民地・勢力圏に在住した四国出身の「著名人」を採録したものである。編者の西村綠也は京城在住の文筆家であり、鮮満支を包含した母国同胞の「先覚者か異境に活躍せる

情勢を論評して更に開大進取の士を迎へんとす」るために本書を刊行したという（自序）。1920年代には同様の出身地域別の人名録が各地で刊行されており、一定の地歩を築いた同郷人の足跡を記し、後身の参考としようとしたのである[9]。

そこで採録された人物は、表1に示す554名であり、四国4県では愛媛県がもっとも多く約40％の222名、行先別では朝鮮がもっとも多いことがわかる。県内の市郡別動向では、温泉郡、松山市、越智郡、西宇和郡、喜多郡の順であり、南予の南部や東予地域が比較的少なく、中予とその周辺地域が多かったことがうかがえる。

表2から職業別構成をみると、諸商がもっとも多く、これに一般会社員、自由業、土木建築業、製造業が続く。官公吏も16名と多い方であるが、高知県の23名よりは少なくなっており、逆に国策会社員は18名で高知県の3名よりはるかに多くなっている。なお､諸営業者は朝鮮に多く、一般会社員は中国に多いという特徴もみてとれる。これらの地域への日本人の進出パターンの相違を反映しているといえよう。

表1　在留地別各県郡市出身者数

県郡市	朝　鮮	満　洲	中国本部	計
愛媛県	150	38	34	222
宇摩郡	3	1	4	8
新居郡	9	4	2	15
上浮穴郡	3	2	0	5
越智郡	20	2	3	25
今治市	4	0	0	4
周桑郡	8	3	1	12
松山市	22	3	9	34
温泉郡	26	9	3	38
伊予郡	11	3	2	16
喜多郡	14	5	2	21
西宇和郡	15	1	6	22
東宇和郡	4	1	0	5
北宇和郡	3	3	1	7
宇和島市	4	0	1	5
南宇和郡	3	0	0	3
不明	1	1	0	2
香川県	86	18	13	117
徳島県	92	15	16	123
高知県	54	13	25	92
計	382	84	88	554

出典：『朝鮮満洲南支四国人発展史』
四国人発展史編纂社、1924年より作成。

表2　愛媛県出身者の出先別職業別人数

職　業	朝　鮮	満　洲	中　国	計
1 農林水産業	2	2	0	4
2 土木建築業	12	4	4	20
3 製造業	17	2	1	20
4 貿易	3	3	3	9
5 諸商	37	10	3	50
6 職人的職業	5	0	0	5
7 旅館料理業	11	4	1	16
8 不動産金融業	10	3	0	13
9 運送業	3	0	0	3
10自由業	14	4	4	22
11官公吏	14	0	2	16
12国策会社員	14	3	1	18
13一般会社員	8	3	15	26
計	150	38	34	222

表1に同じより作成。

3）愛媛県『海外移住者県人名簿』1970 年、427p.

本書はハワイ「元年者」移民が渡航して 100 年を記念し、1968 年より海外移住者名簿の編纂事業を開始し、その刊行によって「関係各位に活用され、相互の連絡に、あるいは母県と移住者との心のかけ橋となって、ますますその親密さを増し、ひいてはこれから移住を志す人々へ何らかのお役に立つと共に今後本県民の海外発展への一助ともなれば幸い」（県知事「発刊にあたって」より）とあるように、相互の連絡やかけ橋となることを期待して取り組まれたものである。

内容は戦前（移住再開前）と戦後（移住再開後）に区分し、11 市 11 郡別、町村別に渡航年月順に記載されている。各個人の記載事項は、出身町村、氏名、家長･家族の別、生年月日、職業、住所、国内連絡先となっており、備考欄には一時帰国などの情報が入っている。基本的に旅券記録からのものであろうが、愛媛県からの南北アメリカを中心とする海外移住者の動向を知るうえで、たいへん貴重な資料といえる。

市郡（町村）別の集計データもあり、戦前期には市では松山市、八幡浜市が多く、郡では西宇和郡、北宇和郡、東宇和郡の南予地区が多く、町村では伊予郡松前町 280 名、東宇和郡明浜町 272 名、西宇和郡三崎町 225 名が多かった。戦後期には市ではやはり松山市が、郡では上浮穴郡、東宇和郡が多く、上浮穴郡の久万町が 232 名でもっとも多かった[10]。

4）田中幸一編『ブラジル愛媛俵津移民四十五年史』在伯俵津会、1978 年、185p.

本書は、ブラジル移民 70 周年の年であり、また東宇和郡俵津村からブラジルへ移住者を出して 45 年にあたるということで、もっぱら在伯俵津会の手により編纂されたものである。俵津からの渡伯は 1933、34、36 年の 3 回にわたり、30 余家族が確認されるが、もっとも多くの渡伯者を出したのは 1934 年 4 月の 25 家族 150 名で、その際には知事夫人も臨席し村内の高等小学校で歓送会が催されている。

本書の構成は、各界から寄せられた序文、写真集、家族写真と略歴、主な人びとの回顧録、

1978 年時点の家族名簿及び現住所などからなる。

村単位での集団渡伯はたいへんめずらしく、回顧録などから移住経緯やその後の変遷、戦時下の勝ち組・負け組の動向などもうかがうことができ、前掲の役場文書とあわせて、今後詳細な分析が期待されるところである。

5)『ブラジル愛媛県人 100 年の歩み（1908-2008)』在伯愛媛県人会、2008 年、167p.

本書はブラジル移民 100 年を記念して、2008 年に刊行されたもので、凡例には「ブラジル在住愛媛県人及び二、三世が執筆した原稿の集大成。移民と子孫の生活環境を素朴に、そして真摯に描写した現実味の滲み出た論考と体験記」とある。第 1 章で移民史の概略と総論を示した後、第 2 章笠戸丸移民とその子孫、第 3 章先人の偉業、第 4 章自ら綴る移民人生、第 5 章今を生きる県人移民とあって、第 6 章にはブラジル愛媛県人会史（50 年史）が年表風に示されていて貴重である。なお本書はポルトガル語版もある。

2.4 海外移住組合刊行物

1）愛媛県海外移住組合『時報』創刊号、1931 年、136p.

海外移住組合は 1927 年に各道府県に設置され、その全国組織である連合会が政府の融資によって取得した土地に移住民を入植させる役割をにない、愛媛県では同年 9 月に移住組合を設立させ、1931 年時点でブラジルのバストスに 13 家族を送り出している。

組合設立後 4 年を期して愛媛県海外移住組合は『時報』という機関誌を発行した。管見の限りではその創刊号のみ目にすることができた。1931 年 8 月 31 日刊行（非売品）で、拓務局長の郡山智より「時報創刊号に寄す」とする寄せ書きを得ている。また巻頭写真には、組合長である愛媛県知事、理事長である県学務部長、専務理事である県社会課長が並び、ブラジルを中心とする移住の勧誘･奨励論や愛媛県海外移住組合の現状報告、移住者通信、質疑応答欄などがあった。

「編輯室より」によれば、当初 3 ヶ年 200 家族という目標を立て、ポスター・パンフレット・講演会等の宣伝活動や移住相談所の設置、郡内町村主任会の開催などを行ったが、思うような成果をあげ得なかったとあり、そうした局面打開のための一方策として本誌の刊行がなされたものとみられる。

2）愛媛県海外移住組合『年度別市町村別ブラジル移住者概要』1940 年、12p.

本書は、「年度別市町村別ブラジル渡航志願者調」とあり、1908 年から 1939 年までのブラジル移民の数値が示されている。その数値は、渡航の許可は受けたが、諸種の事情で郷里出発を中止し、又は神戸で乗船できなかった者約 70 名を包含しているとあって、総計 3,709 名であるので、ほぼ渡航者に匹敵する数値であるということができる。それによって日本の社会情勢との関係を知ることができ、また県下のどの地方が多く、その事情はどのようなものであるのかを検討して参考にすることを目的とするものであると記されている。

本書の表紙には「愛媛県と海外移住　第一輯」とあって、第二輯以降の存在が興味深いが、管見の限り発見できていない。

2.5 県内遺跡類

1）東宇和郡旧明浜町俵津公民館前：（ブラジル移民）「拓魂」碑

俵津からの渡伯 50 周年（1984 年）を記念して建設された。愛媛県知事の稀覯による。（前掲、『明浜町誌』544 頁所載）

2）南宇和郡旧西海町内泊：（朝鮮）「迎日湾遭難者弔魂碑」

1923 年、迎日湾に出漁中の漁船が嵐で遭難し、内泊村民 34 名が犠牲となった。その慰霊碑で背面には 34 名の名前が記載されている。（前掲、金秀姫稿、168 頁所載）

3）八幡浜市お四国山愛染堂：「西井久八像」（二代目）

西宇和郡矢野崎出身でアメリカのシアトルに在住し、多くの後続移民を招聘し、あるいは郷里に寄付をしたことにより、1927 年に建てられた銅像。戦時中に供出され、戦後再建された。（『愛媛県史』資料編、社会経済下、1986 年、929 頁、村川前掲書、87 頁所載）

なお八幡浜市立白浜小学校内には、西井が 1890 年に矢野崎第一尋常小学校の建設費を 100 円、1902 年には同第二校舎に西井ほか 39 名が 860 円寄附し、それに関する碑文も残されているという（村川前掲書、88 頁）。

4）西宇和郡旧三崎町串：「加藤太郎松翁頌徳碑」

1894 年、朝鮮出漁を開始し、99 年には現地に缶詰工場を設立し、これを契機に三崎の漁船や海士が朝鮮に出漁するようになったため、これを顕彰して建てたもの。（前掲、武智利博『愛媛の水産業と漁村』61 頁所載）

5）松山市護国神社：「拓魂」碑

満洲における旧愛媛開拓移民で帰国することなく亡くなられた方々の霊をなぐさめるため、西沢団長らが 1974 年に建立したもの。（『愛媛県史』部門史、社会経済 5、社会、625 頁所載）

おわりに

以上にみてきたところからわかるように、愛媛県海外移住史に関する研究は、1960 年代から進められており、朝鮮海域への出漁や満洲農業移民に関して一定の成果をみているが、その総合的かつ本格的な研究はまだ達成されていない。それを実現するためには、県内・県外に散在する史資料を集約し、相互に照らし合わせることができるような体制を作ることが不可欠であろう。また、聞き取り調査資料や記録集などを集約するとともに、新たな聞き取り調査を実施することも必要である。さらに戦後の中南米移住に関しては、研究者も少なく、町村合併等で資料が散逸することが考えられ、集中的な資料調査・保存が迫られているといえよう。

追記：本稿は、JICA横浜海外移住資料館アーカイヴスプロジェクト「国内各地における資料調査研究」の成果の一部である。

註

[1] 日本における移民研究の動向については、移民研究会編『日本の移民研究　動向と目録』Ⅰ・Ⅱ（明石書店、2010年）を参照のこと。

[2] なお北海道移民に関しては桑原真人『近代北海道史研究序説』（北海道大学出版会、1982年）があり、明治期の東予地区（棉作地帯）からの北海道移民の事例が分析されている。

[3] なお、旧愛媛県史というべき『愛媛県史概説』下巻（1960年）にも第五章に移民に関する記述がある。

[4] 武智利博「佐田岬半島三崎における出稼漁業の変遷」（伊予史談会例会発表原稿、1961年2月）、同「愛媛の水産業と漁村　第5章県外出漁および沖合・遠洋漁業」（愛媛県農林水産部水産課『愛媛県産業地誌』別冊、1965年4月）。

[5] この点は、山口県の事例を分析した木村の場合も同様の指摘をしている「戦前期日本における海外移民－山口県の事例を中心に」『東アジアのディアスポラ』（明石書店、2011年）。

[6] 上甲米太郎に関しては多くの研究書がある。最初に取り上げたものとしては新藤東洋男『在朝日本人教師―反植民地教育運動の記録―』（白石書店、1981年）があげられよう。このほか、温泉郡粟井村に1891年に生まれ、松山中学、東洋協会学校（現拓殖大学）を卒業後、朝鮮総督府土地調査局や金融組合連合会に勤務した重松靄修（まさなお）に関する田中秀雄の研究がある（『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人　重松靄修物語』草思社、2010年、302p.）。

[7] 神戸移住教養所については、木村健二「戦前期『移民収容所』政策と異文化教育」（『社会科学討究』第124号、早稲田大学社会科学研究所、1997年3月）を参照のこと。

[8] 太宰正夫については、村川庸子前掲書によれば、『南豫時事新聞』（1926年10月19日付）記事において、北宇和郡成妙村出身で、20数年間アメリカに暮らし、帰国後、松竹蒲田撮影所で映画監督をしていたという（84頁）。

[9] 朝鮮へ行った日本人の人名録及び本書については、木村健二「『朝鮮編』総合解説」『日本人物情報大系』第71巻（皓星社、2001年）を参照のこと。

[10] 集計データは『愛媛県史』（資料編、社会経済、下、1986年）の944-945、948-949頁に採録されている。

引用文献リスト

愛媛県 1986『愛媛県史』資料編、社会経済下
愛媛県 1986『愛媛県史』部門史、社会経済5社会
島津豊幸編著 1988『愛媛県の百年』東京：山川出版社
日本コリア協会・愛媛編著 2011『植民地挑戦と愛媛の人びと』愛媛新聞社
村川庸子 1987『打瀬船物語　アメリカの風が吹いた村』愛媛県文化振興財団

History of emigration studies and historical materials in Ehime prefecture

Kenji Kimura（Shimonoseki City University）

There has been considerable research conducted on migration, especially about such “Imin-Ken” as Hiroshima, Yamaguchi, Wakayama, Nagano and Okinawa in Japan. In those prefectures, for example, migration museums have been established to investigate and preserve historical materials. However, other prefectures like Ehime, from which not many people emigrated abroad, have rarely been addressed within the context of migration studies, and even more, the research trend and research materials in each prefecture have not been introduced in the past.

Therefore, in this paper, I deal with a trend in migration studies and the remaining condition of historical materials in Ehime, in order to further advance migration studies.

This paper deals with the following subjects : the period from the Meiji era to the present; the destinations of emigrants to all foreign countries including former Japanese colonies and the area of Japan's sphere of influence; the types of emigrants including not only farmers and workers but also merchants, police officers, public officers and teachers.

Keywords：Ehime ken, stowaway to America, fishermen to Korea, settlers to Brazil, divers to Australia, settlers to Manchuria

〈研究ノート〉

リーマンショックによってブラジル人は どのようなことに困難を感じているのか
― 豊田市保見団地でのフィールドワークから ―

大谷かがり（中部大学・助手）

＜目　次＞

はじめに
1.　保見団地について
　1.1　豊田市と保見団地の人口動態
　1.2　保見団地とブラジル人コミュニティ
2.　リーマンショック後に仕事はあるのか
3.　健康に不安を感じているブラジル人
まとめにかえて

キーワード：日系ブラジル人、豊田市、健康、リーマンショック後

はじめに

1980 年代後半から自動車関連企業の労働力として日系人が働くようになった。1990 年の出入国管理及び難民認定法の改定後、豊田市内やその周辺の製造業にブラジル人が従事し、保見団地で暮らすようになった。ブラジル人コミュニティに関する研究では、自治区の代表者、NPO のメンバー、雇用主、行政の職員らの視点から、製造業に従事するブラジル人は地域につながりがなく、生活のサポートが必要なマイノリティとして語られてきた［都築　1999、2001、2003］［梶田、丹野、樋口　2005］［米勢　2007］［近藤　2005］［小内ほか　2009］。

たとえば梶田ら［2005］は、1990 年以降のブラジル人の労働状況について、ブラジル人を雇用している企業、派遣会社などへのインタビューやアンケート結果などを分析し、ブラジル人の日本での暮らしを「顔の見えない定住化」と称した。梶田らによると、ブラジル人は非正規雇用に依拠した暮らし方であり、寝る時しか自宅に帰らないほど働く。また数か月ごとに仕事場が変わるため、そのつど派遣会社が用意した住まいに転居しなければならないが、転居する際に必ずしも転入届や転出届を市町村に提出するわけではない。これらのことから、ブラジル人は地域や行政からは「顔の見えない」存在となったという［梶田、丹野、樋口　2005］。

しかし 2008 年 9 月のリーマンショック以降、豊田市内では大勢のブラジル人が失業して、ブラジル人の暮らしやその環境がいささか変わったように思う。私が保見団地で出会ったブラジル人の多くは、ある程度のお金がたまったらブラジルに帰るがそれはいつか分からないという。リーマンショック後は仕事を得ることが難しく帰国を選んだ人もいたが、帰国せず生活費を切り詰めながら日本で働き続けている、もしくは働くチャンスをうかがっている人もいる。私はブラジル人の子どもや保護者の健康をサポートしている外国人医療支援グループの活動に 2003 年から携わっている。派遣会社から工場に派遣されて働いているブラジル人は社会保険に加入するのが難しく、保険証を持っていないブラジル人は体が不調でも受診せず残業していた。リーマンショック後は保険証を持っ

ていないしお金もないので、体調が悪くても受診を避けているようだ。リーマンショック後、日本に残ることを選んだブラジル人がどのように暮らし、どのようなことに困難を感じているのかを、生活の現場から考えることが必要ではないかと考える。本論の目的は、リーマンショック後にブラジル人の生活がどのように変化したのかを明らかにすることである。

外国人労働者と医療制度に関して、池上［2001］は、1997 年に浜松市の市民団体「グルッポ･ジェスチサ・エ・パス」が静岡県や浜松市にブラジル人やペルー人などの外国籍住民の医療保障を求める陳情書を提出したことと、それにかかわる一連の出来事を分析している。池上によると、外国人労働者の社会保険加入率が低い。その理由について、間接雇用の外国人労働者の場合、派遣元の会社が保険料の支払いを回避するために社会保険に加入させない、厚生年金保険の加入とセットであるため、長期滞在を予定していない外国人にとっては厚生年金分の負担が掛け捨てになるので、その負担を免れるために加入しない、現在病気ではないので加入を拒むなどがあるという［池上 2001：230-231］。

就労しているが社会保険に加入できない外国人労働者が個別に行政の窓口で国民保険を申請して、国民健康保険に加入している場合がある。国民健康保険とは、自営業者や無職者を対象とした日本の健康保険制度である。池上によれば、こうした外国人の申請には各自治体が対応を任されており、国民健康保険加入を制限する自治体と、そうでない自治体とに分かれたようである［池上　2001：231-232］。

このような議論の背景には､日本の公的医療保険制度である健康保険が関わっている。この制度は、健康保険に加入している被保険者が医療を受ける必要があるとき、病院に受診してかかった費用の一部を負担してくれる制度であり、日本では皆が加入するものとされている。外国人であっても、日本で 1 年以上の在留資格がある場合は、健康保険法で健康保険に加入することが定められている [1]。日本では、就職すると会社の健康保険と年金をセットに自動的に加入し（会社の事務が手続きを行ってくれる）、給与明細を見ると毎月いくら引き落とされたのかが記載されている。しかしながら日本に暮らすブラジル人の保険加入率は極めて低く、日本人と同じように加入できる、もしくはしているとは限らない。したがって、池上［2001］が論じた問題が生じているのである。

2007 年度に行われた静岡県外国人労働実態調査 [2] によると、調査票の回答者 1922 名中、派遣・請負で働いているブラジル人は約 60％、直接雇用で働いているブラジル人は 20％である。これに対し、ブラジル人の社会保険加入率は 35％、国民健康保険の加入率は 13.5％であった。また、2006 年に静岡市で行われた「外国人のための無料医療相談と検診会」（外国人のための無料健康相談と検診会実行委員会主催）によると、総受診者 97 名のうち、社会保険加入者は 28％（26 名）、国民健康保険加入者は 41％（38 名）であった [3]。志甫［2007］は、外国人労働者の社会保険加入について、加入を促進する要因や阻止する要因をさぐるために、おもにブラジル人を対象に行われた『2005 年度磐田市外国人市民実態調査』の 608 世帯分のデータを分析した。志甫によると、有効回答 482 名中何らかの健康保険に加入しているのは 37.13％（179 名）であり､そのうち国民健康保険が 35.19％（63 名）、社会保険が 29.05％（52 名）であった［志甫　2007］。それぞれ異なる調査であるが、これらの結果をまとめると、外国人労働者の社会保険加入率は 2、3 割、国民健康保険加入率は 1 割から 4 割ほどと低い。

外国人労働者は、日本の保健医療制度に組み込まれず、病気をしてもなかなか受診できないことに不満を抱いていると報告されている。林、池上［1998］は、浜松市で MAF 浜松が開催した「外国人のための無料健康相談と検診会」に参加した受診者 140 名にアンケートを郵送し、返信があった 47 通から、日本での受診行動や保健制度、健診について分析を行った。林らによると、61.7％が病

院に行きにくいと答えた。その理由としては「言葉が通じない」「保険がない」「時間がない」「交通が不便」などであった。また、日本の保健医療制度に59.6％が不満を持っていた。もっとも多かった意見は「市が国保に加入させてくれない」、次いで「保険制度が理解しにくい」「年金加入がセットだから」であったという［林、池上　1998：126-128］。

これらの外国人労働者と医療保険制度に関する研究は、ブラジル人が日本の保健医療制度に組み込まれにくいという問題を浮き彫りにしているが、受診が困難なブラジル人はどのように病気に対処しているのかには言及していない。本論では健康の問題が生じた場合どのように対処していたのか、リーマンショック後どのような変化が起こったのかを明らかにしたい。

本論は、外国人医療支援グループの2009年から2011年までの活動に参加しながら行った調査に基づく。このグループは豊田市内の在住外国人の健康をサポートするために健康相談、ワークショップ、現状調査などを行っている。2004年からは保見団地でブラジル人学校の児童・生徒の健康相談会を行ったり、ポルトガル語の壁新聞を作って暮らしの情報を発信したりしている。このほかに、外国人医療支援グループの活動に参加している、もしくはサポートしているコミュニティ通訳者[4]18名への聞き取り調査も行った。

1.　保見団地について

1.1　豊田市と保見団地の人口動態

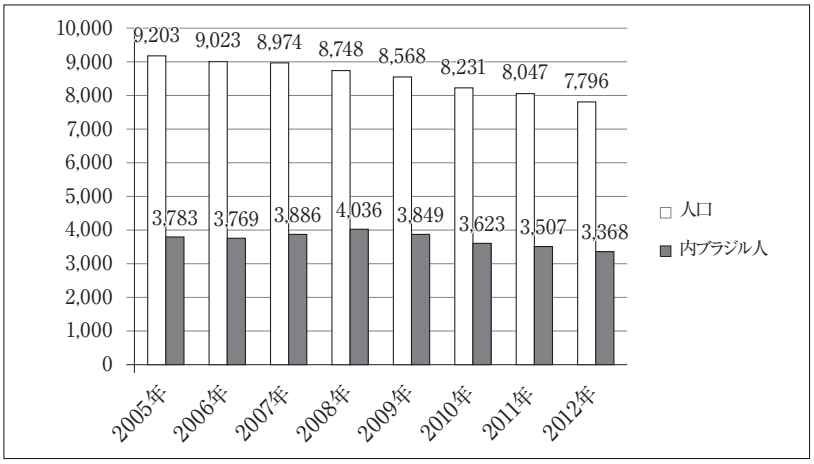
保見団地は愛知県豊田市の保見が丘地区にある大型団地であり、名鉄豊田市駅、愛知環状鉄道新豊田駅から北西部に位置している。両駅から保見団地までは車で20分ほどである。最寄駅は愛知環状鉄道保見駅で、この駅から徒歩20分、車で5分である。この団地は1975年に入居・分譲が始まった。 2012年5月現在、豊田市の全人口は423,582人、そのうち5,991人（1.41％）がブラジル人である（表1）。保見団地のある保見が丘地区の人口は7,796人、そのうちブラジル人は3,368人で、これは保見が丘地区人口の43.2％にあたる。保見が丘地区の住民数は2002年の9,450人以降減少を続けている。一方保見が丘地区のブラジル人人口は2008年まで約4,000人まで増加したが、それ以降減少の一途をたどっている（図1）。

表1　豊田市の人口

	人口総数	外国人総数	ブラジル人
2005年	411,137	14,458	7,006
2006年	414,839	14,989	7,343
2007年	419,055	16,005	7,753
2008年	423,200	16,800	7,917
2009年	423,677	15,694	7,264
2010年	423,822	14,799	6,663
2011年	423,234	14,228	6,298
2012年	423,582	14,060	5,991

出典：豊田市役所総合企画部国際課「豊田市外国人統計（概要）」（平成24年5月1日現在）。
表は著者が作成した。

図1　保見が丘人口とブラジル人人口



出典：豊田市役所総合企画部国際課「豊田市外国人統計（概要）」（平成24年5月1日現在）。
表は著者が作成した。

1.2　保見団地とブラジル人コミュニティ

80 年代後半、企業や人材派遣会社は都市再生機構と法人契約を結び、社員寮として保見団地内の部屋を借り上げ､ブラジル人が入居するようになった｡1990 年の出入国管理及び難民認定法の改定後、保見団地に入居するブラジル人数が増えていった。都築［1999］は、保見団地での出来事を調査しその変遷を分析した。都築によると、保見団地では入居数が増えるにつれて、ごみの分別、夜間の騒音、路上駐車などに関するトラブルが頻発するようになった。保見団地自治区は日本語教室を立ち上げたり、外国籍住民と一緒に夏祭りを開催したりして、住民の交流の場を設け、都市再生機構、警察や市役所などに相談をしてともに暮らす方法を模索した。しかしトラブルは後を絶たず、ブラジル人の入居数はますます増え、日本人の住民は同じ地域でともに暮らすことに不安を募らせていったという［都築　1999］。 1999 年 6 月 8 日の中日新聞[5]によると、1999 年 5 月下旬に保見団地でブラジル人と右翼関係者がにらみ合い、警察が駆けつける騒ぎが起こった。6 月上旬に右翼団体の街宣車と暴走族が団地内を走り回ったり、右翼団体の車が放火されて右翼団体関係者数十名とブラジル人たちが一触即発の状態となったりして、県警機動隊が出動する事態となった。これら一連の出来事は、保見団地でフィールドワークをしているといまだに耳にすることがある。これらは保見団地のことを説明する際によく語られる。

保見団地では、ブラジル人は日本人とは異なった生活圏を築いていき、2012 年 12 月現在では日本の地域社会とあまり接することなく日常生活が営めるようになっている。ブラジル人の間では、保見団地はブラジルとほぼ変わらない生活ができる場所として周知されている。団地の周辺にはブラジル人学校が 2 校あり、保見団地内にはブラジルの商品が購入できるスーパー、レストラン、美容院、洋品店、ケーキ屋、託児アパート[6]などがある。これらの商売は各アパートの一室で営まれていることもあり、何棟何号室に何があるかについては、ブラジル人のネットワークで情報が交換される［大谷　2008］。保見団地のブラジル人は暮らしに必要な情報を得るためにオルクッチ(orkut)などのソーシャルネットワーキングサービスを利用したり、スーパーに置いてある無料の情報誌を読んだりする。しかしオルクッチの情報の中には、うわさや古い情報も含まれている。

日本語が話せなくても生活できる状況が整っている環境のためか、保見団地のブラジル人は日本語が話せない／読めない人が多い。ポルトガル語に訳された豊田市の広報誌が各家庭に配布されて

いるが、保見団地のブラジル人はたとえポルトガル語でもあまり読まないようである。彼らは保見が丘地区や豊田市で暮らすために必要な情報を、団地内のコミュニティ通訳者やブラジル人学校の教員から得る。コミュニティ通訳者は子どもが急に熱を出した場合、保護者に代わって学校に迎えに行き、病院に連れて行ってくれるので、ブラジル人が残業するためには必要不可欠な存在であった。コミュニティ通訳者やブラジル人学校の教員は保見が丘地区や豊田市で暮らすために必要な情報をNPOやボランティアグループから得る。NPOやボランティアグループは保見団地のブラジル人コミュニティの情報をコミュニティ通訳者やブラジル人学校の教員から得る。コミュニティ通訳者やブラジル人学校の教員はブラジル人コミュニティと地域をつなぐパイプ役となっている［大谷　2009］。しかしリーマンショック後、失業したブラジル人は残業をすることがなくなり、コミュニティ通訳者を雇う必要がなくなった。またブラジル人学校の学費を払えなくなり、多くの子どもたちが学校を辞めた。その結果、コミュニティ通訳者とブラジル人学校の教員の仕事が減った。聞き取り調査をしたコミュニティ通訳者18名中3名が仕事を失って帰国、1名が他県へ引っ越し、4名は転職した（ヘルパー1名、病院の看護助手1名、保見団地内の小学校の日本語指導員2名）。

ブラジル人コミュニティと地域をつなぐパイプ役が減ってから、外国人医療支援グループには、ブラジル人の間で病気に関するうわさが立っているという話が届くようになった。例えば、2009年11月、ブラジル人学校の教員が、新型インフルエンザのうわさが立って保護者がとても心配しているので、保護者を対象にした説明会をしてくれないか、と連絡をしてきた。そのうわさは、新型インフルエンザのウイルスが豊田市内にばらまかれており、ブラジル人だけが罹患するようになっている、という内容であった。

2.　リーマンショック後に仕事はあるのか

2008年9月以前は、保見団地のブラジル人は製造業に携わり夫婦で1か月50万円ほど稼いでいた。外国人医療支援グループが2006年度に行ったアンケート調査によると、保見団地に暮らすブラジル人男性は1日平均13時間働いていた[7]。朝から夜遅くまで仕事に励み、家族全員で食事ができるのは週末だけという家庭が多く、男性は昼勤、夜勤を1週間ずつ交代で行う車部品の製造業、女性は夜勤のない食品加工や精密機器に就いていた。車部品の製造業は時給1,200円、食品加工は時給950円、精密機器は時給1,000円ほどであったという。

しかしリーマンショック後は、仕事を得ることが難しくなった。正確な数字は分からないが、保見団地での聞き取り調査によると、リーマンショックによって失業したブラジル人は7割とも8割とも言われている。2008年9月以降、自宅待機日数が月を追うごとに増えていき、2009年1月から2月に仕事を失ったブラジル人が多いという。2009年度に日系人離職者に対する帰国支援事業が実施されたが、ハローワーク豊田管内での申請者730名中704名がブラジル人であった[8]。ハローワーク豊田管内の外国人の相談件数は2009年6月に急増するが、その後は徐々に減少している。また新規求職者数は2010年3月に61人まで減少した（表2）。失業給付が終了した後も仕事が見つからない人が大勢いた。

表2　ハローワーク豊田管内における外国人の新規求職者数と相談件数

	2009年1月	2009年6月	2010年3月	2010年4月	2010年5月	2011年8月	2011年9月	2011年10月
新規求職者数（人）	599	134	61	95	88	58	58	56
相談件数（件）	792	3,807	784	717	733	635	568	465

出典：『豊田市の国際化（現状と取り組み）』豊田市総合企画部国際課平成22年10月、『豊田市国際化推進計画の推進状況（平成21年度実績）について』（平成21年3月開催の多文化共生推進会議合同部会の資料、『平成24年度重点取り組み事項』（平成24年7月開催の豊田市多文化共生推進協議会コミュニティ部会の資料。表は著者が作成。

保見団地内のスーパーマーケットにはフリーペーパーが置かれており、ブラジル人はフリーペーパーを読んで求人、引っ越しなどの生活に必要な情報を収集している。なかでも『alternativa』は人気のフリーペーパーである。今回は『alternativa』2011 年 7 月 28 日 262 号、2011 年 8 月 25 日 264 号、2011 年 10 月 28 日 268 号、2011 年 11 月 3 日 269 号、2011 年 12 月 1 日 271 号の求人広告を分析した。2011 年 7 月に 205 件、8 月に 242 件、10 月に 251 件、11 月に 255 件、12 月に 216 件の求人広告が掲載された（図 2）。7 月から 12 月まで製造業が最も多く、そのうち電子機器、自動車、食品加工の求人数が上位を占めた（図 3）。求人に製造業が多いのはリーマンショック前と変わらない。

図2『alternativa』の求人件数（2011年5月から12月まで）

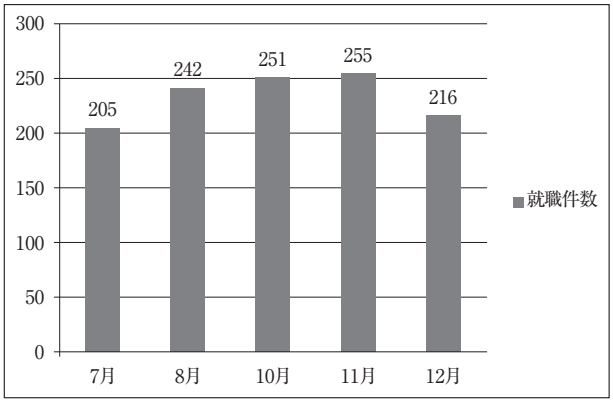
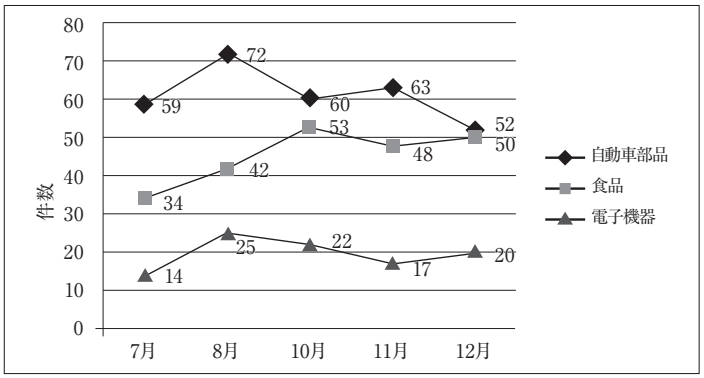


図3 『alternativa』の求人数：自動車、食品加工、電子部品（2011年5月から12月まで）



採用の条件を見てみると、どの職種もある程度日本語を話したり書いたり読んだりする能力を求めている。上記５冊の求人広告では採用者に求める日本語の読み書きや話す能力の程度をパーセンテージで表示している[9]。７月の求人のうち自動車部品の 59 件中 23 件が「日本語 50％」以上、食品加工の 34 件中 14 件が「日本語 30 ～ 40％」、電子機器の 14 件中６件が「日本語 30 ～ 40％」以上を採用条件として挙げている。８月の求人のうち自動車部品の 72 件中 45 件が「日本語 30 ～ 40％」以上、食品加工の 42 件中 21 件が「日本語 30 ～ 50％」、電子機器の 25 件中 13 件が「日本語 40％から流暢な日本語まで」を採用条件として挙げている。10 月の求人のうち自動車部品の 60 件中 14 件が「日本語 30％」以上、食品加工の 53 件中 17 件が「基礎的な日本語から流暢な日本語」、電子機器の 22 件中８件が「日本語 40％から流暢な日本語」を採用条件としている。11 月の求人のうち自動車部品の 63 件中 15 件が「日本語 30％から流暢な日本語」、食品加工の 48 件中 15 件が「日本語 30％から流暢な日本語」、電子機器の 17 件中５件が「基礎的な日本語から中級程度の日本語」を採用条件としている。12 月の求人のうち自動車部品の 52 件中 13 件が「日本語 30％から流暢な日本語」、食品加工の 50 件中 10 件が「日本語 30％から流暢な日本語」、電子機器の 20 件中９件が「基礎的な日本語から中級程度の日本語」を求めている。

リーマンショック前は工場に通訳者がいたが、リーマンショック後工場は通訳者を置かなくなった。聞き取り調査を行ったコミュニティ通訳者 18 名中７名が製造業に携わり工場で通訳も行っていたが、リーマンショック後６名が失業した。自動車部品、食品加工、電子機器ともに、日本語能力の程度の差はあるが、就職する際には日本語のコミュニケーション能力が求められるようになり、日本語が話せない／読めないブラジル人にとって厳しい状況となっている。

このような状況におかれたブラジル人をサポートするために、豊田市では外国人の就労を目的とした日本語教室が開かれるようになった。たとえば、豊田市産業労政課が NPO 法人トルシーダに委託した「外国人就労支援日本語教室と外国人就労支援セミナー」などである[10]。

3. 健康に不安を感じているブラジル人

豊田市は 1997 年３月頃まで、社会保険を持っていない外国人労働者に対して、行政窓口で国民健康保険を申告した場合は交付していたが、豊田市の保険年金課が厚生省より指導を受け、資格審査が厳しくなった［斎藤、大谷　2008：188］。豊田市内の間接雇用で働いているブラジル人がどの程度社会保険を持っているのかは不明であるが、2012 年時点では、豊田市の外国籍住民 3,723 名（2,285 世帯）が国民健康保険に加入している（表 3）。これは豊田市の外国人住民の 26.4％にあたる[11]。

表3　豊田市の外国籍住民の国民健康保険加入者数

	2010 年	2012 年
加入者数	4,069	3,723
加入世帯	2,446	2,285

出典：『豊田市の国際化（現状と取り組み）』豊田市総合企画部国際課平成22年10月、『豊田市国際化推進計画の推進状況（平成21年度実績）について』（平成21年3月開催の多文化共生推進会議合同部会の資料、『平成24年度重点取り組み事項』（平成24年7月開催の豊田市多文化共生推進協議会コミュニティ部会の資料。）表は著者が作成。

保見団地のブラジル人は病気かなと思うとき、まずは近所の薬局に行って薬を購入したり、ブラジルから薬を取り寄せて内服したりするが、それでもよくならない場合は病院に行く。しかし、日本語が話せない／読めないとコミュニティ通訳者に同行してもらわないといけないし、医師の対応が冷たいと感じたり、日本の処方薬は効き目が弱いと感じる[12]ので病院に行くことをあまり好まない［大谷　2010：231-233］。

しかし、病院に行くことを好まなくても、製造業で長時間労働している、もしくはしていたブラジル人は健康に不安を感じており、それはリーマンショック後高まっている。このことは、次の2つの調査結果がよく物語っている。外国人医療支援グループは2009年10月3日に豊田スタジアムで開催されたビバ！ブラジルデー2009（豊田日伯協会主催）で健康相談コーナーを設けた。相談者30名中29名が高血圧、1名が糖尿病であった。相談者全員がリーマンショック後に失業したため保険証を持っておらず、そのことを大変心配していた。蓄えをくずしながら生活しており、保険証がないので仕方なく受診や内服をやめたとのことであった。表3をみると、多くのブラジル人が失業した後の2010年の国民健康保険加入者数は4,069人である。これは豊田市に暮らす外国人総数の27.4％にあたるが、2009年の健康相談に訪れた人たちはここに該当しておらず、何らかの理由で保険証を得ることができなかったと考える。

2010年6月6日に豊田スタジアムで開催されたVIVA!　TOYOTA（豊田日伯協会主催）でも外国人医療支援グループは健康相談コーナーを設け、相談に訪れた人びとにアンケート調査を行った（表4）。11時から15時までオープンしていた外国人医療支援グループの健康相談コーナーに訪れた53名（日本3名、タイ1名、ボリビア1名、ネパール2名、ペルー3名、インドネシア4名、アルゼンチン2名、ブラジル37名）のうち、健康に心配がある、もしくは治療中であると答えたのは15名であった。その内容は、血圧、心臓病、貧血、肩こり、肝臓病、倦怠感、アレルギー、ヘルニア、コレステロールが高いこと、糖尿病、肺疾患などさまざまな疾患であり、この調査の結果から回答者らが体を酷使して働いている様子がうかがえた。保険証を持っていないと答えたのは8名、うち7名がブラジル人、1名がペルー人であった。医療について39名が心配であると回答した。その理由として最も多かったのは「日本語が不自由」であった。

表4　VIVA!　TOYOTAでのアンケート調査結果（2010年6月6日）

1　あなたは健康ですか。	はい　38名　　心配がある　12名　　治療中3名
2　1で心配がある、または治療中と答えた方、その内容は。	回答13名：血圧、心臓病、貧血、肩こり、肝臓病、倦怠感、アレルギー、ヘルニア、コレステロールが高い（以上1名ずつ）、糖尿病、肺疾患（以上2名ずつ）
3　運動はしていますか。	週1回以上　20名　　月1〜2回　4名　　しない　29名
4　食事は規則的ですか。	はい　47名　　いいえ　6名
5　保険証を持っていますか。	はい　45名　　いいえ　8名（ブラジル7名、ペルー1名）
6　医療について心配がありますか。	ある　39名： 情報不足　11名　日本語が不自由23名 支払い　3名　その他2名（2名とも詳細は記入なし） ない　10名（ブラジル7名、インドネシア1名、ペルー1名、日本1名） 無回答　4名

まとめにかえて

リーマンショック後、2009 年度の日系人離職者に対する帰国支援事業で約 700 人のブラジル人が帰国し、豊田市には 2012 年 5 月 1 日現在、約 6,000 人のブラジル人が暮らしている。そのうち約 3,000 人が保見団地に暮らしている。ブラジル人はリーマンショック後も自動車、食品加工、電子部品といった製造業に従事している。しかし、日本語が話せたり読めたりすることが仕事にアクセスする条件となり、日本語が話せない／読めない保見団地のブラジル人が仕事を得るには厳しい状況となった。ブラジル人コミュニティのパイプ役のコミュニティ通訳者が減って暮らしの情報も入りにくくなっていることが考えられる。豊田市では就労のための日本語教室がいくつか開催され、日本語が話せない／読めないブラジル人は教室に通っているが、彼らが語学力を身につけるにはある程度の時間がかかると思われる。

本調査でも先行研究と同様に、ブラジル人は保健医療制度に組み込まれにくいことが見えた。製造業に携わっているブラジル人は健康に不安を抱えている。失業している人の中には、定期的に検査を受けなければならない高血圧症や糖尿病を患っていても、保険証がないために病院に受診することができず困っている人がいることも分かった。暮らしや仕事と同じく、医療もまた、日本語が話せない／読めないと受ける事が難しいと思われる。

今後は、健康が不安なブラジル人や病院に受診することができないブラジル人に関して追加調査を行い、このようなブラジル人をサポートする方法を模索したい。また、保見団地以外の集住地域でも同じような問題があるのかを調査して、相対化する必要があると考える。

註

1 国民健康保険法より。2012年4月27日現在。http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S33/S33HO192.html

2 「静岡県外国人労働実態調査」調査結果概要より。2012年4月27日現在。www.pref.shizuoka.jp/kikaku/ki-140/documents/roudougairyaku.pdf

3 外国人のための無料健康相談と検診会実行委員会編2006「第9回外国人のための無料医療相談と検診会報告集」外国人のための無料健康相談と検診会実行委員会。

4 市役所や病院などで通訳が必要な場合にブラジル人が雇うコミュニティの通訳者。訓練を受けていたり資格を持っていたりするわけではない。1時間3,000円（送迎代込み）である。私が出会ったコミュニティ通訳者はコミュニケーション力が優れていた。通訳するだけでなく、利用者の生活や子育ての相談に乗ったりもする。多くのコミュニティ通訳者は工場で働きながら通訳業も行っていた。

5 1999年6月8日の中日新聞、朝刊社会面27ページ。

6 託児アパートとは、工場で働く保護者の代わりに朝7時前から夜10時くらいまで子どもを預かり保育をおこなう保育所のような場所である。子どもを預けると1カ月につきひとり4万5千円前後の費用がかかる。ブラジル人は子どもを託児アパートに預けて夜遅くまで働いていた［大谷 2007］。

7 大谷かがり、中谷紘編2006『2005年度保見外国人児童・生徒健康相談会アンケート結果報告書』外国人医療支援グループ。

8 「豊田市国際化推進計画の進捗状況（平成21年度実績）について」（平成21年度3月開催の多文化共生推進会議合同部会の資料）より。

[9] コミュニティ通訳者5名に確認したところ、「日本語30～40％」はひらがなやカタカナの読み書きができる程度、「日本語50％」はひらがなやカタカナ、基本的な漢字が読み書きできる程度ではないかということであったが、読む人によって解釈は若干変化するものであるとのことであった。

[10] トルシーダでの聞き取り調査による。トルシーダのホームページはhttp://www.geocities.jp/torcidajpjp/（2012年12月1日現在）。資料代・テキスト代実費、講座は無料。

[11] 「豊田市多文化共生推進会議コミュニティ部会（平成24年7月）」資料より。

[12] 日本の処方薬の成分の含有量はブラジルの処方薬の成分の含有量の1／4ほどである［大谷2009：29］。

引用文献リスト

池上重弘編2001『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店。

小内透編2009『在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房。

大谷かがり2007「日系ブラジル人の子どもの健康を守る」『地域問題研究』74、2-9。

大谷かがり2008「日系ブラジル人の子どもたちをめぐる社会空間 ―日本語教室のある日の出来事から」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』9、355-374。

大谷かがり2009「日本に暮らす日系ブラジル人の子どもの健康をめぐる人びとの実践」『共生の文化研究』2、20-29。

大谷かがり2010「日系ブラジル人と日本人が「健康」をつくる ―外国人医療支援グループの活動を事例として」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』11、225-241。

梶田孝道、丹野清人、樋口直人2005『顔の見えない定住化― 日系ブラジル人と国家･市場･移民ネットワーク』名古屋大学出版会。

近藤敏夫2005「日系ブラジル人の就労と生活」『社会学部論集』40、1-18。

斎藤尚文、大谷かがり2008「市民活動を書く ―豊田市の外国人医療支援グループ―」松田昇、小木曽洋司、西山哲郎、成元哲編『市民学の挑戦』梓出版社。

都築くるみ1999「外国人受け入れの責任主体に関する都市間比較 ―豊田市の事例を中心に、大泉町、浜松市との比較から」『コミュニティ政策学部紀要』2、127-146。

都築くるみ2001「外国人との『共生』とNPO ―愛知県豊田市H団地を取り巻くNPOの現状と課題」『コミュニティ政策研究』3、61-79。

都築くるみ2003「日系ブラジル人を受け入れた豊田市H団地の地域変容 ―1990～2002年」『フォーラム現代社会学』2、51-58。

林ゆかり、池上重弘1998「浜松市における外国人無料検診会の意義 ―ブラジル人受信者へのアンケート結果をもとに―」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』12（1）、123-132。

米勢治子2007「外国人集住地域におけるネットワーク形成 ―あるNPOの活動を事例として」村井忠政編『トランスナショナル･アイデンティティと多文化共生』明石書店。

志甫啓2007「日系ブラジル人の社会保障適応の実態」『季刊・社会保障研究』43（2）、84-106。

Difficulties experienced by Brazilian from 2009 to 2011: From field work in Toyota City, Homi Complex

Kagari Otani（Chubu University）

The purpose of this study was to investigate Brazilians lives after The Lehman Crisis. Many Brazilians who lived in Toyota lost their jobs in 2009. Brazilians must speak Japanese in order to get Jobs in Japan. But many Brazilians do not speak Japanese and cannot read Japanese well at the Homi Complex. They need to improve their Japanese language skills, and several Japanese language classes are offered to support Brazilian people in Toyota City.

Brazilian workers in the manufacturing industry work hard and are concerned about their health. Some people have severe disease, but lack health insurance. It is difficult to access the Japanese health insurance system due to their inadequate Japanese communication abilities. They feel uneasy in these situation.

Keywords：Brazilians, Toyota City, health, The Lehman Crisis

執筆者一覧
Authors

島田法子（日本女子大学・教授）
Noriko Shimada（Japan Women's University）

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）
Toshio Yanagida（Keio University）

森茂岳雄（中央大学・教授）
中山京子（帝京大学・准教授）
福山文子（元財団法人海外日系人協会嘱託職員）
Takeo Morimo（Chuo University）
Kyoko Nakayama（Teikyo University）
Ayako Fukuyama（The Association of Nikkei and Japanese Abroad）

服部圭子（近畿大学・准教授）
大舩ちさと（国際交流基金マニラ日本文化センター・日本語教育アドバイザー）
中山京子（帝京大学・准教授）
スエナガ サンドラ テルミ（元群馬県太田市立太田小学校バイリンガル教員）
Keiko Hattori（Kinki University）
Chisato Ofune（The Japan Foundation, Manila）
Kyoko Nakayama（Teikyo University）
Sandra Terumi Suenaga（ Former Bilingual Teacher at Ota Elementary School, Ota City, Gunma, Japan）

木村健二（下関市立大学・教授）
Kenji Kimura（Shimonoseki City University）

大谷かがり（中部大学・助手）
Kagari Otani（Chubu University）

JICA 横浜　海外移住資料館　研究紀要 7
平成 24 年度

発　　行：国際協力機構横浜国際センター
Japanese Overseas Migration Museum
海外移住資料館
発行年月：2013 年 3 月

問い合せ先
JICA 横浜　海外移住資料館
〒231-0001　神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 赤レンガ国際館
Tel 045-663-3257 ／ Fax 045-211-1781
Web:http://www.jomm.jp/　E-mail:info@jomm.jp

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum JICA Yokohama

Vol. 7
2012

Articles

The Honolulu Cho-on Shisha Poetry Club: Japanese Immigrants' Life as Reflected in Tanka Poems
Noriko Shimada

Tanka Poetry for Nisei (Second-Generation) Japanese-Peruvians and Prewar Japanese-language Education: The Lima Women's Vocational High School and the Tanka Poetry Circle "Yashi no Mi" of the Peruvian Japanese Women's Association
Toshio Yanagida

Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (Ⅰ):Development of "Nihon-Burajiru Imin Karuta" as a Teaching Material for Migration Studies
Takeo Morimo・Kyoko Nakayama・Ayako Fukuyama

Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (Ⅱ):Practical Reports on Application of "Nihon-Burajiru Imin Karuta"
Keiko Hattori・Chisato Ofune・Kyoko Nakayama・Sandra Terumi Suenaga

Research Notes

History of emigration studies and historical materials in Ehime prefecture
Kenji Kimura

Difficulties experienced by Brazilian from 2009 to 2011: From field work in Toyota City, Homi Complex
Kagari Otani

JICA